

保 存 用

大学研究ノート

第52号 (1982年2月)

日本の大学院教育に関する 留学生の意見調査

—全国調査結果の概要—

「大学の国際化」プロジェクト

広 島 大 学
大学教育研究センター

日本の大学院教育に関する留学生の意見調査 —全国調査結果の概要—

広島大学・大学教育研究センター
「大学の国際化」プロジェクト

目 次

まえがき	
I 研究の目的と方法	1
1. 研究の目的	1
2. 調査の方法	2
(1) 調査方法	2
(2) 調査項目	3
3. 回答者の属性	3
(1) 年齢分布と性	3
(2) 出身国籍	3
(3) 婚姻と居住形態	4
(4) 滞日期間	4
(5) 所属大学と専攻分野	4
(6) 日本政府奨学金	5
(7) 留学前の取得学位	5
(8) 留学前の職業	5
4. 分析の方法	6
II 調査結果	9
1. 日本留学の選択	9
(1) 日本留学の選択理由	9
(2) 第一志望率	10
2. 大学院の選定	11
(1) 留学前の情報量	11
(2) 大学院選定の理由	12
(3) 満足度	13
3. 大学院入試の難易	13
4. 大学院における研究指導	14
(1) 日本語能力	14
(2) 研究テーマの決定スタイル	15
(3) 教授用語	17
(4) 議義・演習・実験の理解度	19
(5) 授業の難しい理由	20
(6) 研究指導の回数と充足度	21

5. 学位の取得	23
(1) 学位の必要度	23
(2) 学位取得の難易	24
(3) 学位の評価	25
(4) 学位の効用	27
(5) 学位（博士）制度改善への意見	27
6. 日本の大学（大学院）の一般的評価	29
(1) 学術水準	29
(2) 教育内容・方法・評価	30
(3) 留学生に対する教師・学生の協力度	30
7. 日本留学の評価	31
III 授業の理解度と大学院生活への満足度の規定要因	33
(1) 外国人留学生の授業の理解度の規定要因	33
(2) 外国人留学生の日本の大学院への満足度の規定要因	35
IV 留学生の自由記述意見集	39
1. 留学生の受入れについて	40
2. 留学に関する情報提供の問題について	51
3. 日本語および日本語教育について	54
4. 日本の大学教育，教員，学生について	58
(1) 全般的論評	58
(2) 日本の学生についての論評	61
(3) 大学の教員，教育方法，学校制度，施設，設備などに関する論評	64
(4) 学位をめぐる	72
(5) その他	74
5. 留学生からの提言	76
V 要約と結論	83
VI 附 録	
日本の大学院教育に関する留学生の意見調査（調査票）	93
VII 英文要約	113

ま え が き

この報告書は、昭和53年度から広島大学・大学教育研究センターにおいて実施されてきた「大学の国際化に関する総合的研究」（研究代表者・喜多村和之／研究分担者15名で構成。昭和53～55年度文部省科学研究費補助金・総合研究A，ならびにフォード財団研究助成金による研究プロジェクト）の一環として行なわれた，「日本の大学院教育に関する留学生の意見調査」の結果をまとめたものである。

すでにわれわれは、内外各地の大学や関係者各位の御協力を得て、これまでに、つぎのような「大学の国際化」シリーズの報告書を発表してきた。すなわち、

- ① 「大学の国際化 — 第6回（1977年度）研究員集会の記録」『大学研究ノート』第32号（1978年8月）81 p.
- ② 「諸外国の大学における国際交流 — とくにアメリカ合衆国を中心として」（喜多村和之・天野郁夫・湯浅信之）『大学研究ノート』第33号（1978年10月）60 p.
- ③ 「大学の国際交流に関する文献目録」『大学研究ノート』第41号（1979年12月）40 p.
- ④ 「日本の大学における外国人教員 — 全国調査結果の概要」『大学研究ノート』第43号（1980年1月）85 p.
- ⑤ A National Survey of Opinion among Foreign Teachers at Japanese Universities and Colleges, Research Institute for Higher Education, Hiroshima University, December 1979, 18p.
- ⑥ 「諸外国の大学における外国人教授の任用 — 制度と実態」（喜多村和之）『大学研究ノート』（第47号，1980年11月）48 p.
- ⑦ The Internationalization of Higher Education — A Final Summary Report. Research Institute for Higher Education, Hiroshima University, December 1981, 99p.

この日本の大学院教育に関する留学生の意見調査の報告書は、以上の「大学の国際化」シリーズの研究成果の1部であり、この報告書の刊行を以てわれわれの4年間にわたる共同研究は完結されることになる。なお、われわれの「大学の国際化」研究プロジェクトの成果の総括的なまとめについては、上記の英文報告書⑦に要約されているが、日本語版としては、別の形でまとめて刊行したいと念願している。

この留学生調査をまとめるにあたっては、企画の段階から実施、整理、さらには報告書の作成に至るまでに、多くの大学や諸機関、関係者各位の筆舌につくしがたい御理解と御協力をいただいた。

アンケートに熱心に答えて下さり、卒直な意見の開陳を惜しまれなかった多くの留学生諸君にたいしても、感謝の念を禁じえない。その他、直接・間接にわれわれの研究を助けてくださった方々に心からお礼を申し上げたい。

このささやかな調査が、日本の大学の「国際化」にいささかでも貢献することを念じつつ。

1981年11月

喜多村 和 之
「大学の国際化」プロジェクト
共同研究者を代表して

この報告書は、昭和53～55年度文部省科学研究費補助金（総合研究A）およびフォード財団研究助成金による研究成果の1部である。

大学の国際化に関する総合的研究 共同研究者氏名一覧

(50音順)

天 野 郁 夫	東 京 大 学	教 育 学 部	助 教 授
井 門 富二夫	筑 波 大 学	哲 学 思 想 学 系	教 授
石 附 実	天 理 大 学	学 芸 部	教 授
馬 越 徹	(現 大 阪 市 立 大 学)	文 学 部	教 授
江 原 武 一	広 島 大 学	大学教育研究センター	助 教 授
大 塚 豊	奈 良 教 育 大 学	教 育 学 部	助 教 授
喜 多 村 和 之	広 島 大 学	大学教育研究センター	助 手
小 林 哲 也	(現 国 立 教 育 研 究 所)	第 五 研 究 部	研 究 員
友 田 泰 正	広 島 大 学	大学教育研究センター	教 授
中 山 茂	京 都 大 学	教 育 学 部	教 授
二 宮 皓	大 阪 大 学	人 間 科 学 部	助 教 授
丸 山 孝 一	東 京 大 学	教 養 学 部	講 師
三 宅 彰	広 島 大 学	教 育 学 部	助 教 授
安 原 義 仁	九 州 大 学	教 育 学 部	助 教 授
湯 浅 信 之	国 際 基 督 教 大 学	教 養 学 部	教 授
	国 立 教 育 研 究 所	第 一 研 究 部	研 究 員
	広 島 大 学	文 学 部	助 教 授

作 業 分 担 一 覧

* 本研究は、共同研究者全員の討議や作業を経てまとめられたものであるが、個別の作業としては、次のような分担で行なわれた。

◦ 調査の実施および報告書の総括

喜多村和之・馬越 徹

◦ 調査の実施・整理

馬越 徹・大塚 豊・安原 義仁・山崎 博敏

◦ 調査票英文校閲

Joe Hicks (広島大学・大学院生)

◦ 報告書の執筆

喜多村和之 (I - 1 , V , VII)

馬越 徹 (II . 1 - 3 , 5 - 7)

二宮 皓 (II - 4)

山崎 博敏 (I . 2 - 4 , III)

◦ 自由記述意見の整理 (翻訳を含む)

石附 実・馬越 徹

大塚 豊・安原 義仁

◦ 報告書の英文要約校閲

Philip G. Altbach (ニューヨーク州立大学教授)

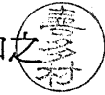
昭和57年2月25日

調査協力者各位 殿

広島大学大学教育研究センター

「大学の国際化」プロジェクト

研究代表者 教授 喜多村 和之



拝啓

時下ますます御清栄のこととお慶び申し上げます。

過般、当センターにて実施いたしました「日本の大学院教育に関する留学生の意見調査」につきましては、多大の御協力を賜りましてまことにありがとうございます。御蔭様にてこのほどその結果をまとめた報告書の完成をみるに至りました。

ここにこれまでの御高配に心より御礼を申し上げますとともに、報告書を御手許にお届けいたします。

なお、この報告書を以て、過去4年にわたって継続してまいりました「大学の国際化に関する総合的研究」のプロジェクトは、全部で8点の報告書を発行し、一応の完結をみることができました。

お寄せいただきました御厚情に重ねて御礼申し上げ、完了の御挨拶といたします。

今後ともかわらぬ御教示と御協力を賜りますようお願いいたします。

敬具

図 表 一 覧

- 第 1 図 国費・私費別の日本留学選択理由
第 2 図 滞日年数と日本語能力
第 3 図 授業の理解度
第 4 図 韓国とインドネシア留学生の講義の理解度
-

- 第 1 表 調査対象および回収率
第 2 表 本調査対象者と全国データの比較
第 3 表 外国人留学生の年令分布
第 4 表 留学生の出身地域
第 5 表 出身地域別専攻分野
第 6 表 専門分野別留学前の取得学位
第 7 表 留学前の取得学位と課程
第 8 表 留学先としての「日本」の第一志望率
第 9 表 留学前における大学院に対する情報の有無
第 10 表 大学院選定への影響理由
第 11 表 大学院転学希望の有無
第 12 表 所属大学院への満足度
第 13 表 大学院入試の難易度
第 14 表 留学生の日本語能力
第 15 表 留学生の研究テーマ決定スタイル
第 16 表 教授用語
第 17 表 日本語能力と教授用語
第 18 表 授業の難しい理由
第 19 表 日本語能力と授業の難しい理由
第 20 表 留学前の職業別にみる授業の難しい理由
第 21 表 指導回数
第 22 表 指導の充足度
第 23 表 研究テーマ決定スタイルと充足度
第 24 表 修士学位の必要度
第 25 表 博士学位の必要度
第 26 表 学位取得の難易
第 27 表 日本の学位の母国での評価
第 28 表 学位の効用
第 29 表 日本の大学の国際的学術水準
第 30 表 日本留学のすすめ
第 31 表 授業理解度の規定要因
第 32 表 大学院への満足度の規定要因

THE HISTORY OF THE

REIGN OF
HENRY THE SEVENTH
OF ENGLAND
BY
JAMES HALLAM, ESQ.

IN THREE VOLUMES.
THE SECOND VOLUME.
LONDON:
PRINTED BY J. JOHNSON, ST. PAULS CHURCH-YARD, 1734.

THE HISTORY OF THE
REIGN OF
HENRY THE SEVENTH
OF ENGLAND
BY
JAMES HALLAM, ESQ.

IN THREE VOLUMES.
THE SECOND VOLUME.
LONDON:
PRINTED BY J. JOHNSON, ST. PAULS CHURCH-YARD, 1734.

THE HISTORY OF THE
REIGN OF
HENRY THE SEVENTH
OF ENGLAND
BY
JAMES HALLAM, ESQ.

IN THREE VOLUMES.
THE SECOND VOLUME.
LONDON:
PRINTED BY J. JOHNSON, ST. PAULS CHURCH-YARD, 1734.

THE HISTORY OF THE
REIGN OF
HENRY THE SEVENTH
OF ENGLAND
BY
JAMES HALLAM, ESQ.

IN THREE VOLUMES.
THE SECOND VOLUME.
LONDON:
PRINTED BY J. JOHNSON, ST. PAULS CHURCH-YARD, 1734.

I 研究の目的と方法

1 研究の目的

本研究は、昭和53年度から広島大学・大学教育センターにおいて実施されている「大学の国際化に関する総合的研究」の一環として行なわれたものである。

プロジェクト全体の研究目的は、既刊の一連の報告書において述べられているが、要約すれば、1)日本の大学の教育・研究上の国際交流を阻害している要因や条件を分析・解明すること、2)日本の大学教育に直接かかわっている外国人教員および外国人留学生を調査の対象として、彼らの日本の大学観や生活意識の分析を通じて、彼らの日本の大学に関する評価や日本の大学の国際的解放度を究明すること、3)これらを通じて、日本の大学(大学院)教育の改善に資することの以上三点にまとめられる。

本調査は上記第二の目的に関連して行なわれたものであり、外国人留学生のうち大学院レベルの留学生に的を絞り、調査事項も留学生の教学面に限った。大学院レベルの留学生に調査対象を限定したのは、これまでに行なわれた留学生調査が学部留学生を対象にしたものであるか、学部課程留学生と大学院留学生を区別することなく両者を一体として対象としたものが多く、大学院留学生の直面している固有の問題—とりわけ教育・研究上の問題点が必ずしも明確になっていないくらいがあると思われるからである。いまひとつの理由としては、日本の大学の教育や研究の質を国際比較の観点から分析し評価するという目的のためには、母国の大学教育を経験してきた大学院留学生の方が、教育・研究面の意見をきくうえにはるかに有益かつ適当な対象と考えたからである。

なお、調査内容から留学生をとりまく宿舍・食事・交友関係等の日常生活問題を省き教学面に限ったのは、前者を軽視したからではない。生活問題は大学における教育・研究の前提であり、その重要性はいうまでもないことだが日本の大学がまずもって問われなければならないのは、大学自身の留学生に対する教育・研究指導のあり方であり、この領域こそ大学自身が主体的にとりくみかつ改革すべき立場にあると考えるからである。

調査結果は第Ⅱ部において、調査項目に従い、(1)日本留学の選択、(2)大学院の選定、(3)大学院入試の難易、(4)大学院における研究指導、(5)学位の取得、(6)日本の大学(大学院)の一般的評価、(7)日本留学の評価、以上7つの観点から単純集計およびクロス集計の結果を分析した。なお質問項目にそったこれらの分析とは別に、第Ⅲ部において大学院留学の成否をわけけるキイ・ポイントとなる「授業の理解度」と、所属大学院への適応度の指標ともなる「大学院生活への満足度」のそれぞれを規定する要因を因子分析した。

第Ⅳ部においては「自由記述意見欄」に寄せられた303名のコメント(全回収者の61.8%)のなかから、主なもの168点を、ほぼ原文のままで収録した。寄せられた意見を一定の観点から分析する時間的余裕がなかったため、ここではとりあえず、(1)留学生の受け入れについて、(2)留学に関する情報の提供について、(3)日本語および日本語教育について、(4)日本の大学、教育、教員、学生について、(5)留学生からの提言、の五つに分類整理し生まのままで収録した。これらから、数量データからはうかがうことのできない留学生の卒直な意見を読みとることができると考えるが、何らかの形で留学生問題に関係する方々の御参考になれば幸いである。

2 調査の方法

(1) 調査方法

本調査は、外国人大学院留学生を比較的多く受入れている大学の中から、地理的バランスと調査実施可能性などを考慮し、国立大学9校、私立大学5校を選定し、それら14大学の大学院に在学する外国人留学生を調査対象としている。サンプル大学の内訳は、国立大学では東京大学・東京工業大学・東京水産大学・筑波大学・京都大学・大阪大学・神戸大学・広島大学・九州大学、私立大学では早稲田大学・慶応義塾大学・明治大学・国際基督教大学・同志社大学である。この14大学に在籍する大学院留学生は1979年5月現在、1,145名（国立913名、私立232名）であり、全国の大学院留学生総数¹⁾2,116名の54.1%にあたる。大学院レベルの留学生を対象にしたこの種の全国調査は、わが国でははじめての試みであり、学部レベルの留学生を対象とする調査²⁾を含めて、調査対象数および回収した調査票はこれまででは最大の規模と思われる。

調査票は、巻末の「付録」にあるとおり、見開きの左ページに日本語による質問文、右ページに英語による質問文が配置されているが、回答者はどちらか一方の国語で回答することを求められている。調査票は昭和54年12月に原則として各大学に郵送し、大学当局から一人ひとりの留学生に学内便あるいは呼び出しやミーティングの席で手渡された。しかし、例外的に大学側から当大学教育研究センター宛に送られてきた留学生名簿をもとに当センターから留学生に直接調査票を郵送した大学もある。調査票の回収は留学生から大学教育研究センターに直接郵送してもらうか、各大学当局で回収し一括まとめて当センターに返送してもらうかのいずれかの方法をとった。

調査票は昭和55年3月までに493通の回答があり、その内、白紙の回答など3点を除いた490の有効回答標本で分析を行なった。回答者の内訳と回収率は第1表に示す通りである。調査票の配布と回収の方法が大学によって若干異なるため、大学別にみれば回収率のばらつきは大きい³⁾が、全体の回収率は42.8%となっている。この数値は、外国人留学生を対象とする調査としては必ずしも低いものではない。設置者別にみれば、国立大学が44.7%、私立大学が30.6%と、私立大学の回収率が国立大学に比べて低くなっている。なお、第2表により本調査回答者と全国の大学院留学生の分布を設置者別にみると、本調査はやや国立大学に偏っている傾向がみられる。これには私立大学留学生からの回収率が低かったことも影響していると考えられる。

第1表 調査対象および回収率

	調査対象	回答者	回収率
国立大学 (9校)	913人	408人	44.7%
私立大学 (5校)	232	71	30.6
不 明	—	11	—
計	1,145	490	42.8

第2表 本調査対象者と全国データの比較 ※

設置者	本調査の 回答者	%	全 国 の 大 学 院 留 学 生 数	%
国立大学	408人	83.3	1,512人	71.5
公立大学	—	—	52	2.5
私立大学	71	14.5	552	26.0
不 明	11	2.2	—	—
計	490	100.0	2,116	100.0

※文部省「学校基本調査報告書（高等教育機関）」
昭和54年版による。

注 1) 学校基本調査報告書（高等教育機関）昭和54年版 文部省

2) 例えば従来のこの種の調査として最も調査対象者の多いのは、次のものである。

阿部洋・稲葉継雄「アジア人留学生の日本留学観」、『国立教育研究所紀要』第89集 昭和51年 149-252。

3) 回収率は最低12.5%から最高80.0%の範囲にあった。そのうち10%台は合計3校あった。

(2) 調査項目

調査項目は、年令、性、国籍、婚姻関係、家族と同居の有無、滞日期間、課程（修士・博士・研究生など）、所属大学、研究科・学部、専攻、日本政府からの奨学金の有無、留学前の取得学位、留学前の職業などの基礎的変数の他に、①日本留学を決めた理由、②大学院選定の要因、③大学院入試と日本語能力、④所属大学院への満足度、⑤研究テーマの決定方式、⑥授業の理解度、⑦大学院の指導体制、⑧学位取得の必要度、難易度、日本の学位への評価、⑨日本の大学院に対する一般的評価、⑩留学の一般的評価、⑪帰国後の計画などを問う総計23項目の質問から構成されている。そして、最後に、日本の大学（院）教育、大学教授、日本人学生、留学生政策などについて自由記述意見を求めている。自由記述欄には490人の回答者のうち、実に62%にあたる303人から意見が寄せられている。

3 回答者の属性

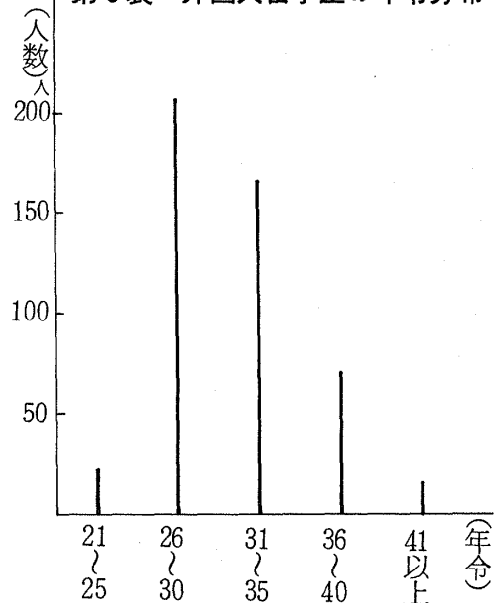
(1) 年令分布と性

本調査は日本の大学院に在学する外国人留学生を対象としたものである。回答者の性・年令などの生得的属性には次のような特徴がみられる。年令は第3表にみられるように、26才から30才までが最も多く、全体の42.4%（208人）を占め、年令が高くなるにつれ遞減しているが、26才から35才までの範囲に全体の76.5%の者が属している。性別についてみると男性が圧倒的に多く81.6%を占めている。このように、大学院留学生は20代後半から30代前半の男性がその大部分を占めている。

(2) 出身国籍

留学生の出身国籍は多様であり、490人のサンプルながら61カ国にものぼっている。ところが、その多様さの中に著しい偏よりがみられる。留学生数が最も多い国は台湾で152人、次いで韓国の87人であるが、3位以下は急激に減少し、インドネシアとタイの2カ国が19人から29人、ブラジルなど4カ国が10人から19人までとなっている。以下、5人から9人までの国は6カ国、4人の国が7カ国、3人の国が10カ国、2人の国が6カ国、1人の国が25カ国となっている。出身国籍を地域別に整理したものが第4表である。これから明らかなように、外国人留学生の70%以上がアジア地域から来ており、その中でも最も近い隣国であり、かつて植民地として日本統治下にあり、また日本と共通の漢字文化圏に属する台湾と韓国からの留学生が合わせて全体の約半数を占めている。なお、中華人民共和国からの留学生数は調査時点では8

第3表 外国人留学生の年令分布



第4表 留学生の出身地域

台湾・中国	160 (33.5)	漢字文化圏
韓国	87 (18.2)	247(51.7)
インドネシア	29 (6.1)	東南アジア
タイ	19 (4.0)	110(23.0)
フィリピン	10 (2.1)	
南アジア	52 (10.9)	
オーストラリア	7 (1.5)	欧米
ニュージーランド	7 (1.5)	
アメリカ・カナダ	17 (3.6)	58(12.1)
西ヨーロッパ	23 (4.8)	
東ヨーロッパ	11 (2.3)	
中近東	13 (2.7)	その他
アフリカ	13 (2.7)	
中南米	13 (2.7)	63(13.2)
N. A・不明		12

(計 490)

カッコ内はパーセント

人であった。この留学生の地域別分布は文部省調査の全国統計（学校基本調査，国籍別専攻別外国人学生数（大学院），昭和53年度版）ともほぼ似たような分布となっている。

(3) 婚姻と居住形態

留学生の婚姻の状況をみると，全体の43.1%（211人）が未婚（独身）あり，55.9%（274人）が既婚である（N.A. 5人）。また，既婚者の72.3%が家族同伴で来日している。逆にいえば3割弱の者は母国に妻子を残したまま来日していることになる。

(4) 滞日期間

留学生の滞日期間は，0～1年の者が全体の14.1%，1～2年26.9%，2～3年18.8%，3～4年15.5%，4～5年7.6%，5～10年13.5%，10年を越える者2.0%となっている（N.A. 1.6%）。このように，留学生の約4割が滞在期間2年以下，約6割が3年以下となっており，5年以下の者で全体の8割強を占めている。なお，滞在期間の最高は18年2か月であった。少数だが留学生の中には10年以上も日本にとどまっている者も何人か存在している。

(5) 所属大学と専攻分野

留学生の所属大学は質問紙の回収率の項でも述べたように，設置者別にみれば国立大学に偏っており，国立83.3%（408人），私立14.5%（71人），不明2.2%（11人）である。課程別にみると修士課程および博士課程前期（以後これを一括して修士課程と呼ぶことにする）が42.0%（206人），博士課程および博士課程後期（以後一括して博士課程と呼ぶ）が33.9%（166人），研究生22.2%（109人），その他（聴講生など）1.0%（5人）となっており（N.A. 0.8%），大学院の前期段階が比較的多くなっている。

専攻分野については，文部省の『学校基本調査』の学科系統分類表（大学院）の大分類に従って分類すると，工学系が最も多く26.7%（131人），次いで社会科学16.5%（81人），人文科学14.1%（69人），農学13.9%（68人），保健（医学，歯学，薬学など）11.8%（58人），教育7.8%（38人），理学6.3%（31人），その他0.2%（1人）の順になっている（N.A. 2.7%）。これを文科系・理科系に二分する（教育は文科系に算える）と，理科系が62.5%を占める。このように専門分野別の留学生の分布をみると，アジアの発展途上国からの留学生が多いためか，理科系に比重がかかっている。これをさらに詳細にみたものが第5表である。欧米からの留学生（オセアニアも含む）は人文科学専攻者の比率が高く，「日本研究」のために来た者がその大部分を占めているものと想像される。

第5表 出身地域別専攻分野

	漢字文化圏	東南・南アジア	欧米	その他	不明	計
人 文 科 学	33(13.4)	8(7.3)	20(34.5)	7(11.1)	1(8.3)	69(14.1)
社 会 科 学	47(19.0)	16(14.5)	8(13.8)	9(14.3)	1(8.3)	80(16.5)
理 学	17(6.9)	7(6.4)	3(5.2)	3(4.8)	1(8.3)	31(6.3)
工 学	63(25.5)	33(30.0)	12(20.7)	22(34.9)	1(8.3)	131(26.7)
農 学	34(13.8)	17(15.5)	7(12.1)	10(15.9)	0(0.0)	68(13.9)
保 健	37(15.0)	13(11.8)	2(3.4)	6(9.5)	0(0.0)	58(11.8)
教 育	15(6.1)	13(11.8)	5(8.6)	4(6.3)	1(8.3)	38(7.8)
不 明	1(0.4)	3(2.7)	2(3.4)	2(3.2)	7(58.3)	15(3.1)
計	247(50.4)	110(22.4)	58(11.8)	63(12.9)	12(2.4)	490

(6) 日本政府奨学金

日本政府からの奨学金を取得して来日した者は全体の過半数にあたる 53.9%にものぼる。これを所属大学の設置者別にみると大きな差がみられる。国立大学大学院に在学する留学生は 60.4%の者が日本政府からの奨学金を得ているのに対し、私立大学大学院に在学する留学生のそれは 15.5%にしかすぎず、ほとんどが私費留学生ということになる。これは文部省の留学生政策がもろもろの要因から、国立大学中心になっている事実を反映している。

(7) 留学前の取得学位

留学前の最終取得学位は学士が最も多く 54.5%，次いで修士 26.7%，その他 9.8%で、博士号所有者はわずか 2.7%である。(N. A. 6.3%)。

第 6 表 専門分野別留学前の取得学位

	留 学 前 の 取 得 学 位			
	学 士	修 士	博 士	そ の 他
人 文 科 学	40 (64.5)	16 (25.8)	0 (0.0)	6 (9.7)
社 会 科 学	53 (69.7)	14 (18.4)	1 (1.3)	8 (10.5)
理 学	15 (51.7)	14 (48.3)	0 (0.0)	0 (0.0)
工 学	74 (57.8)	34 (26.6)	4 (3.1)	16 (12.5)
農 学	30 (47.6)	22 (34.9)	3 (4.8)	8 (12.7)
保 健	30 (58.8)	9 (17.6)	4 (7.8)	8 (15.7)
教 育	19 (50.0)	17 (44.7)	0 (0.0)	2 (5.3)
計(N. A. 6.3%)	267*(54.5)	131*(26.7)	13*(2.7)	48*(9.8)

* 専門分野の不明（無回答）も含む。

これを専門分野別にみたものが第 6 表である。留学前に修士以上の学位を取得した者の割合が多い分野は理学、農学、教育で、逆に人文科学、社会科学、保健は学士取得者の割合が多い。さらに、留学前に取得した学位と日本の大学院の所属課程の対応関係を調べたのが第 7 表である。日本の大学院で修士課程に在学している者の 70.9%は留学前に学士課程を終了し、博士課程に在学している者の 47.0%は留学前に修士号を取得している。また、留学前の最終取得学位と日本の大学院の在学課程が同レベルの者は修士課程で 13.1%，博士課程で 1.8%である。しか

第 7 表 留学前の取得学位と課程

		日 本 の 大 学 院 で の 所 属 課 程			
		修 士	博 士	研 究 生	そ の 他 無 回 答
留 学 前 の 取 得 学 位	学 士	146 (70.9)	65 (39.2)	54 (49.5)	2 (22.2)
	修 士	27 (13.1)	78 (47.0)	24 (22.0)	2 (22.2)
	博 士	2 (1.0)	3 (1.8)	7 (6.4)	1 (11.1)
	そ の 他	23 (11.2)	11 (6.6)	12 (11.0)	2 (22.2)
	無 回 答	8 (3.9)	9 (5.4)	12 (11.0)	2 (22.2)
	計	206	166	109	9

し、母国で博士号まで取得しながら、日本の大学院で修士課程に在学している者もわずかではあるがいる。また、博士課程に在学している留学者の 39.2%は留学前に母国で学士号までしか取得していない。彼らのほとんどは日本留学後、日本の大学院で修士号を取得し、ひきつづき博士課程に進学した者であろう。これは高度な学問研究機関が充実していない開発途上国の実情を反映しているものと考えられる。なお、研究生の 49.5%は留学前に学士，22.0%は修士号の取得者であり、このほとんどは修士課程に進学するものと考えられる。

(8) 留学前の職業

留学前の職業として最も多いのは、大学・研究職（32.4%）で、次いで学生（24.7%），会社

員（10.6％）、公務員（9.8％）、初等・中等学校教員（5.5％）、無職（3.1％）の順となっている（N.A. 3.9％）。大学院への留学であるので、大学・研究職の比率が高いのは当然であろう。以上を大学院の課程別にみると、留学前に大学、研究職についていた者の約半数の52.2％は博士課程に在学しているのに対して、学生だった者の53.7％と、会社員だった者の67.3％は修士課程に在学している。このように、留学前の職業と在学している課程には関連が深い。さらに、専攻分野別にみるとやはり興味深い特徴がみられる。すなわち、社会科学では会社員、教育では初等・中等学校教員が留学前の職業の2位以内にはいっており、各職業の特性を反映している。これ以外の人文科学、理学、工学、農学の分野は大学・研究職と学生が多く、それぞれ一・二位を占めている。なお、保健と教育は学生の占める割合が低く、それぞれ10.3％、5.3％となっている。

4 分析の方法

490の有効回答の調査票はコンピュータによる統計処理を行なうため、データカードにコーディングし、広島大学情報処理センターの磁気ディスクにファイルし、M-180を用いてクロス分析と数量化理論Ⅰ類およびⅡ類による分析を行なった。

クロス分析はSPSSを用いて次のような軸によって行なわれた。

- (1) 大学の設置者（国立・私立）
- (2) 課程（博士，修士，研究生，その他）
- (3) 専攻分野（人文科学，社会科学，理学，工学，農学，保健，教育，その他／理科系，文科系）
- (4) 日本政府奨学金の給付の有無
- (5) 出身地域（台湾・中国，韓国，インドネシア，タイ，フィリピン，南アジア，オーストラリア・ニュージーランド，アメリカ・カナダ，西ヨーロッパ，東ヨーロッパ，中近東，アフリカ，中南米）なお，これらの地域分類をさらに次の四カテゴリーに再分類した。（漢字文化圏，東南・南アジア，欧米，その他）

変数のカテゴリー化について若干の説明加えると、専攻分野は学校基本調査報告書（高等教育機関）の学科分類表（大学院）の大分類に従っている。そのため、医学、薬学、歯学、衛生学、栄養学などは「保健」のカテゴリーに属している。また、専攻分野を文科系と理科系に二分類した時には、文科系のカテゴリーに属する分野は人文科学，社会科学，教育の3分野，理科系に属するのは理学，工学，農学，保健，その他（環境科学関係）である。出身地域の分類は上記の13分類または4分類で行なった。このうち、出身地域の4分類は、13分類が細かすぎるためにそれを再分類したものである。その際、同じアジアの国でも台湾・中国，韓国は日本に来る留学生数も多く，日本と同じように漢字を使い，日本語能力も高く，また比較的日本の事情にも通じた者が多いため，その他のアジアの国とは別に扱い，漢字文化圏というカテゴリーを設定し，これに含めた。なお，在日外国人の子弟は，学校基本調査でも「外国人学生」と分類され，外国人留学生とは区別されている。したがって本調査の対象はすべて外国人留学生であり，在日朝鮮人および中国人の子弟などは一切含まれていない。大学の分類は，東大と京大を国立Ⅰグループ，東京工業大学と東京水産大学の単科大学および筑波大，大阪大，神戸大，広島大，九州大の5大学を国立Ⅱグループ，私立大学5校すべてを私立グループとし，合計3カテゴリーで分析した。

数量化理論Ⅰ類およびⅡ類による分析Ⅲ-(1)～(2)は留学生の授業の理解度と大学院への満足度

の規定要因を分析するために行なった。本分析は PPSS (Program Pacage for Social Science) を使用した。

Ⅱ 調 査 結 果

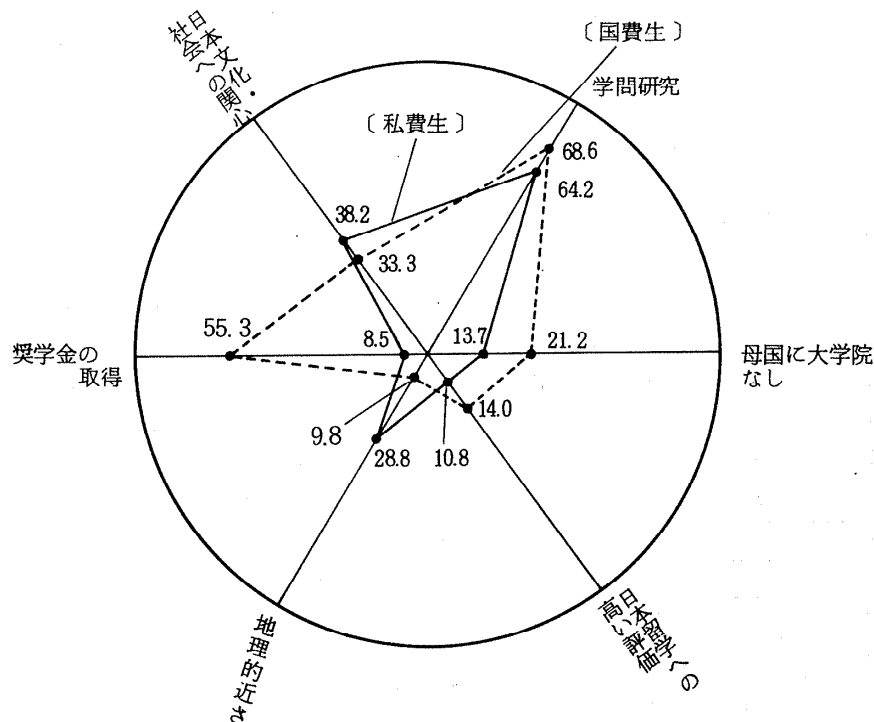
1 日本留学の選択

(1) 日本留学選択の理由

本調査では、まず最初に、留学生が「日本」を留学先として選択した理由について質問した。(Q-1. 「あなたが日本留学(大学院)を決心する上で、つぎのそれぞれの理由はどの程度の影響力をもちましたか」)「非常に影響を与えた」比率の最も高いのは、「学問研究上の理由」(66.7%)で、次いで「日本の文化や社会への関心」(35.7%)、「奨学金が得られたこと」(35.7%)となっている。他方、「地理的な近さ」(18.0%)、「母国に適当な大学院がない」(17.8%)、「母国における日本留学の高い評価」(12.4%)、「日本に住む親せきや知人の援助」(11.2%)を、日本留学の選択にあたって「非常に影響を与えた」とする者は少なく、これらの理由は、日本留学の決め手となっていないようである。

ただこれを専攻分野別の観点からみると、人文科学・社会科学専攻者の場合、日本の文化や社会への関心を最も影響を与えた理由とする比率が、それぞれ72.5%、48.1%と高くなっており、「学問研究上の理由」(それぞれ73.9%、65.4%)に匹敵する選択理由となっている。理学、工学、農学、医学等の自然科学系の分野は、全体的傾向に一致している。

次に、日本政府奨学金の有無の観点からみると、第1図にみられるように選択理由にかなりの違いをみることができる。まず、日本政府奨学金を得ている、いわゆる国費留学生の場合は、「奨学金が得られた」ことを「非常に影響した」とする者の比率が55.3%と高く、奨学金の獲得



第1図 国費・私費別の日本留学選択理由
(「最も影響を与えた」要因の比率)

が日本留学選択の決め手となっていることを示している。これに対し、私費留学生の場合、当然のことながら「奨学金の取得」(8.5%)は留学選択要因としては低く、逆に「地理的近さ」(28.8%)が、国費生に比べて高い比率となっている。

以上を要約すれば、日本留学選択に影響をおよぼす最大の理由は、大学院における「学問研究」であり、その背景として「日本の文化や社会への関心」があるといえる。ただし国費留学生の場合は、日本政府奨学金を取得したことが、「日本」選択の大きな理由となっている。

(2) 第一志望率

第二に、こうして選択された留学先としての「日本」が、彼らの第一志望であったか否かについて質問した。(Q-2 「日本は留学先として第一志望の国でしたか」)「日本」が第一志望であったか否かは留学のあり方全体を決める有力な指標となると考えたからである。

まず全体的傾向についてみると、6割強(64.5%)の者が、日本が第一志望であったと答えている。ところが、これを課程別にみると、修士課程(70.4%)に比べて博士課程(50.6%)の第一志望率はかなり低くなっている。次に、地域別の観点からみると、中南米(91.9%)および北米(88.2%)、オセアニア(85.7%)、ヨーロッパ(82.4%)からの留学生は第一志望率8割以上となっているが、発展途上国からの留学生の場合は、概して低くなっている。特に、アフリカ、韓国(47.1%)の場合は5割を下まわっており、東南・南アジアの場合も、5割を若干上まわっているにすぎない。(第8表)このような地域による第一志望率の差は、Q-2に対し「いいえ」と答えた、いわゆる日本が第一志望でなかった者への関連質問(「では第一志望国はどこでしたか」)への回答にその理由を発見できる。すなわち、大学院留学生の7割以上を占めるアジ

第8表 留学先としての「日本」の第一志望率

		1. はい	2. いいえ	3. N. A	→ では第一志望の国はどこでしたか。		
単 純 集 計		64.5	35.1	0.4	アメリカ	ヨーロッパ	ア ジ ア
課 程 別	修 士	70.4	29.1	0.5	63.3	18.3	18.4
	博 士	50.6	48.8	0.6	79.0	11.1	9.9
	研 究 生	76.1	23.9	0.0	76.9	0.0	23.1
地 域 別	台 湾 ・ 中 国	68.8	31.3	0.0	84.6	9.6	5.8
	韓 国	47.1	51.7	1.1	86.7	8.9	4.4
	東 南 ・ 南 ア ジ ア	53.6	46.4	0.0	70.6	11.8	17.6
	オ セ ア ニ ア	85.7	14.3	0.0	0.0	0.0	100.0
	北 米	88.2	11.8	0.0	0.0	100.0	0.0
	ヨ ー ロ ッ パ	82.4	17.6	0.0	16.7	33.3	50.0
	中 近 東	76.9	23.1	0.0	33.3	0.0	66.7
	中 南 米	91.9	8.1	0.0	66.7	33.3	0.0
	ア フ リ カ	46.2	46.2	7.7	16.7	16.7	66.7
専 攻 分 野 別	人 文	85.5	13.0	1.4	55.6	33.3	11.1
	社 会	75.3	24.7	0.0	50.0	35.0	15.0
	理 学	51.6	48.4	0.0	66.7	13.3	20.0
	工 学	60.3	38.9	0.8	74.5	7.8	17.6
	農 学	58.8	41.2	0.0	78.6	10.7	10.7
	保 健	50.0	50.0	0.0	89.7	0.0	10.3
	教 育	57.9	42.1	0.0	81.3	6.3	12.5

ア諸国の場合をみると、まず第一志望率の最も低い韓国の場合、アメリカを第一志望とする者が86.7%にもなっている。また台湾・中国（84.6%）、東南・南アジア（70.6%）の場合もアメリカ留学を希望する者が多い。これらのアジア地域の留学生の場合、ヨーロッパを第一志望とする者の比率は10%前後にすぎず、圧倒的多数はアメリカを留学希望先としているのである。このことの原因は、第二次大戦後におけるそれらの諸国とアメリカとの政治・経済・文化面での関係に求められるであろうが、ここでは、こうしたアメリカ指向の強さが日本を第一志望とする比率の原因となっていることを指摘するととどめたい。

次に、第一志望率を専攻分野別の観点からみると、人文（85.5%）、社会（75.3%）系は概して高く、保健（50.0%）、理学（51.6%）、農学（58.8%）、工学（60.3%）等の自然科学系と教育系（57.9%）は低い。これらについても、日本を第一志望としなかった者の第一志望国についてみると、過半数が「アメリカ」と答えており、特に保健（89.7%）、教育（81.3%）、農学（78.6%）、工学（74.5%）の分野のアメリカ指向が顕著である。人文・社会系についても、日本が第一志望でなかった者の半数は、やはりアメリカを第一志望としており、約3割強の者がヨーロッパ諸国を第一志望としているのである。

2 大学の選定

(1) 留学前の情報量

日本を留学先として選定した留学生にとって、次に問題となるのは、大学の選定である。まず、日本の大学に関する情報量が留学前にどの程度あったかについて設問した（Q-4）。ある程度の情報をもっていた者は、全体の6割近く（57.3%）にすぎない。設置者別にみると（第9表）、私立大学への留学生の場合、76.1%の者が事前に何らかの情報を得ているのに対し、国立大学への留学生の場合、45.9%の者は、全然情報をもっていない。これは、国立大学に在籍する留学生のかなりの者が日本政府奨学金による国費留学生であり、文部省によって大学の選定や配置が決定されているという事情にも原因があると考えられる。特に国費生についてのみみると、実に彼らの55.3%の者が大学院に関する情報を事前にもたなかったと回答しているのである。このような大学院に関する情報量の不足は、大学当局の、大学院に関する広報努力（特に英文による紹介）の不足にも、その原因が求められるであろう。

第9表 留学前における大学院に対する情報の有無

	単 純 集 計	設置者別		奨学金別		地 域 別								
		国 立	私 立	国 費	私 費	台 湾	韓 国	東南 ア ジ ア	オ セ ア ニ ア	北 米	ヨ ー ロ ッ パ	中 近 東	中 南 米	ア フ リ カ
1.はい	57.3	54.1	76.1	44.7	73.1	98.1	66.7	33.6	28.6	41.2	47.1	15.4	54.1	46.2
2.いいえ	42.7	45.9	23.9	55.3	26.9	21.9	33.3	66.4	71.4	58.8	52.9	84.6	45.9	53.8

なお事前の情報量は、地域によってもかなりのバラツキがみられ、日本に地理的に近い台湾・中国（98.1%）、韓国（66.7%）の場合は高いが、その他の地域は、50%以上の者が事前に何らの予備知識もなく留学していることになる。特に、台湾・中国・韓国に次いで日本に地理的に近く、留学生数も多い東南アジア地域の場合、7割近くの者（66.4%）が、事前に何の情報も特に

ないままに来日しているのである。

(2) 大学院の選定理由

次に、具体的に大学院を選定する上で影響した理由（Q-3）についてみると、第10表にみられるとおり、最も大きな理由となっているのは、「専攻分野にすぐれた教授がいるから」（38.0%）であり、4割弱の者が自己の研究目的にそって大学院を選定しているといえる。しかし、この理由は、4割に満たない比率で、必ずしも高いとはいえない。第二番目の理由は、「文部省により定められたから」（23.1%）であるが、これは国費留学生の場合に限られよう。

大学院選定理由を奨学金別にみると、国費生の場合は、「文部省により定められたから」（38.3%）が最も多く、次いで「専攻分野にすぐれた教授がいるから」（33.0%）となっているのに対し、私費生の場合は、「専攻分野にすぐれた教授がいるから」（44.3%）が最も多く、次いで「大学院が有名だから」（19.8%）が続いている。

第10表 大学院選定への影響理由

	単 純 集 計	奨 学 金 別	
		国 費	私 費
1. 地理的に適当な位置にあるから	4.5	2.7	7.1
2. 文部省により決められたから	23.1	38.3	2.4
3. 入学試験に合格したから	8.6	6.4	11.3
4. 大学院が有名だから	12.2	6.4	9.8
5. 専攻分野にすぐれた教授がいるから	38.0	33.0	44.3
6. その他	11.6	10.2	14.2
N. A.	2.0	3.0	0.9

では、こうして選定された大学院は、留学生にとって希望どおりのものであったのであろうか。問題点を探る意味で転学希望の有無についての質問をした（Q-6）。その結果は第11表にみられるとおり、他の大学院への転学を希望する者が12.4%いるが、85.1%の者は、現在の大学院に一応の適応を示しているとみることができる。これを設置者別にみると、私立（16.9%）の方が国立

第11表 大学院転学希望の有無

	単 純 集 計	設 置 者 別		奨 学 金 別		課 程 別		
		国 立	私 立	国 費	私 費	修 士	博 士	研 究 生
1. は い	12.4	11.1	16.9	10.6	14.6	16.0	7.2	13.8
2. い い え	85.1	86.7	80.3	86.7	83.0	81.6	89.8	85.3
N. A.	2.4	2.2	2.8	2.6	2.4	2.4	3.0	0.9

（11.1%）より若干転学希望者が多く、奨学金別にみると、私費生（14.6%）の方が、国費生（10.6%）よりやや転学希望が高くなっている。また課程別にみると修士（16.0%）、研究生（13.8%）、博士（7.2%）となっており、転学希望は大学院入学の初期段階で最も多いことが明らかである。（研究生は大学院入学前の段階であるが、同一大学院に入学を前提としている場合がほとんどである。）

ここで注目されるのは、とかく問題が指摘されている国費留学生の文部省による大学選定制度にもかかわらず、国費生は私費生より転学希望者が少ないという事実である。これをより詳細にみるため、Q-3（大学院選定理由）で、「文部省により定められたから」と回答した者と、Q-6（大学院転学希望の有無）をクロスさせてみたところ、大学院転学希望者は12.4%であり、

全体的傾向とまったく一致している。このように、文部省による国費留学生の大学配置は、全体的にみればおおむね適正な配置がなされているといえそうである。ただ10%強の者は大学院転学の希望を表明しており、文部省による大学院選定の不合理を「意見欄」にめんめんと書き綴っている者があったことは指摘しておかねばならない。

(3) 満足度

しかし、結論的にいって、大学院の選定に関しては、事前の情報量は必ずしも多くないにもかかわらず、概して順調に行なわれているといえそうである。現在所属している大学院への満足度（Q-5）も第12表にみられるとおり、かなり高い。「大変満足している」、「満足している」を加えると、全体の73.9%の者が、大学院に満足の意を表明しているのである。「不満である」という否定的回答（4.7%）は5%以下である。満足度は私立より国立の方が、また私費生より国費生の方がやや高くなっている。この大学院への一般的な満足度の因子分析は第Ⅲ部で扱う。

第12表 所属大学院への満足度

	単純集計	設置者別		奨学金別	
		国立	私立	国費	私費
1. 大変満足している	20.6	21.1	15.5	23.1	17.5
2. 満足している	53.3	53.6	56.3	54.2	52.4
3. どちらでもない	17.1	15.5	25.4	14.4	20.3
4. 不満である	4.7	4.9	2.8	5.3	3.8
5. わからない	3.1	3.4	0.0	1.5	5.2
N. A.	1.2	1.5	0.0	1.5	0.9

3 大学院入試の難易

留学生の大学院入学に際しての選考方式には、全国的な基準があるわけではなく各大学各様的方式を採用している。たとえば同一の国立大学内でも、学部（研究科）によって選考方式は異なっている場合があり、選考方式に関する全国的動向を把握するのはきわめて困難である。ここ数年の傾向をみると、同一大学（大学院）内でも、国費留学生に対する選考方式と私費留学生に対する選考方式との間にはかなりの差があるようである。一般的にいって前者の場合は、書類選考と面接に重点が置かれ、若干の留学生用の学科試験が加えられているのに対し、後者の場合は書類選考・面接・留学生用学科試験もしくは、日本人学生と同一の試験等により選考されるケースが多いようであり、私費留学生に厳しい選考方式となっている。¹⁾

ここでは、そうした選考方式の全国的データを求めることが目的ではなく、現在日本の各大学院で留学生の大学院入学に際して行なっている各種の選考試験に対し、留学生自身がどのような印象をもっているか、いいかえれば入試の難易度について、考えようとするものである。

まず、選考試験を(1)語学試験と(2)専攻科目試験に分け、さらに前者を①日本語の試験②外国語の試験、後者を、①日本語による専攻科目の試験、②英語による専攻科目の試験、に細分して困難度を質問した。（第13表）

注1) 村田翼夫「わが国の四年制大学におけるアジア人受入れの現況」『国立教育研究所紀要』（第89集）昭和51年、97-148頁

第13表 大学院入試の難易度

(%)

		大 変 難しかった	か な り 難しかった	それほど 難しくな か っ た	試 験 は な っ た	N. A
語 学 試 験	日 本 語	9.0	22.7	32.4	24.1	11.8
	外 国 語	5.5	20.2	34.3	26.1	13.9
専 攻 科 目 試 験	日 に 本 語 よ る	10.4	26.1	21.1	28.0	13.9
	英 に 語 よ る	2.9	13.5	26.9	40.2	16.5

語学試験についてみると、「それほど難しくなかった」とする者の比率が①日本語試験(32.4%)②外国語試験(34.3%)の双方において、「大変難しかった」および「かなり難しかった」の回答を合わせた者の比率よりやや多くなっている。それに対し、専攻科目の試験は、日本語で行なわれた場合、「大変難しかった」、「かなり難しかった」両者の合計(36.5%)が「それほど難しくなかった」(21.1%)より上回っているが、英語で行なわれた場合は、「それほど難しくなかった」(26.9%)とする者が、「大変難しかった」、「かなり難しかった」とする者を合計した比率を上回っている。概して、語学試験よりも専攻科目の試験の方が難しいと留学生には感じられているようである。さらに日本語の試験は外国語の試験より、また日本語による専攻科目の試験は、英語によるそれよりも難しいとする比率が高い。これは結局、留学開始時における留学生の日本語能力にその原因が求められよう。この傾向は、私費留学生に比べ国費留学生に特に強いようである。

4 大学院における研究指導

(1) 日本語能力

大学における教育・研究指導の前提条件となる日本語能力(読み・書き・話し・聞く)について、留学生に自己評価(Q-8)を求めたところ、「できる」と回答した者の比率は、聞く力(68.4%)、読む力(66.9%)、話す力(64.5%)、書く力(50.1%)の順となっており、半数以上の留学生は自分には日本語能力があると思っているといえる。論文やレポートを日本語で書くことができないと思っている者が少なくない(48.4%)ことは予想できることであり、ある意味では当然のことであろう。

かなりの留学生が、授業を聴き、論文を読むことに困難を感じていないといっても、留学生の日本語能力には顕著な地域差がみられる。韓国・台湾・中国の漢字文化圏からの留学生の場合、「できる」と回答した者の比率は、読む力(93.1%)、聞く力(84.2%)、話す力(73.7%)、書く力(71.6%)の順となっており、日本語能力については余り問題がないように思われる。(第14表) それに対し、欧米の留学生の場合、話す力(67.3%)や聞く力(65.6%)にはそれほど問題がないにしても、読む力(46.5%)と書く力(34.5%)にはかなり困難を感じているよ

第14表 留学生の日本語能力

			話 す 力		聞 く 力		読 む 力		書 く 力	
			できる	できない	できる	できない	できる	できない	できる	できない
全 体（ 単 純 集 計 ）			% 64.5	% 33.7	% 68.4	% 30.0	% 66.9	% 31.5	% 50.1	% 48.4
課 程	研 究 生		41.3	55.0	46.8	49.6	48.6	46.7	27.5	69.8
	修 士		69.9	29.1	74.8	24.8	70.9	28.6	53.4	46.6
	博 士		72.9	25.3	75.3	22.9	73.5	25.3	62.0	26.8
地 域	漢字圏（台・中・韓）		73.7	24.7	84.2	14.2	93.1	5.3	71.6	27.2
	東 南 ・ 南 ア ジ ア	東南・南アジア	50.0	49.1	46.4	42.7	39.1	60.0	28.1	71.8
		インドネシア	20.6	75.9	24.1	72.4	17.2	79.3	13.8	86.2
		タ イ	42.1	57.9	47.4	52.6	52.6	47.4	42.1	57.9
		フィリピン	40.0	60.0	60.6	40.0	30.0	70.0	10.0	90.0
	欧 米		67.3	29.3	65.6	32.8	46.5	50.0	34.5	63.8
	その他の国（中近東・ アフリカ・中南米）		50.8	46.0	50.8	46.0	30.1	68.3	20.7	77.7

うである。さらに東南・南アジアやその他の国（中近東・アフリカ・中南米）の留学生の場合、日本語能力という点で大きな困難を感じている者の割合が大きい。なかでも、インドネシアの留学生が最も大きな問題を抱えている。すなわち、「できる」と回答したインドネシアの留学生の比率は、他の国の留学生に比して極端に低くなっており、聞く力24.1%、話す力20.6%、読む力17.2%、書く力13.8%という状態になっている。

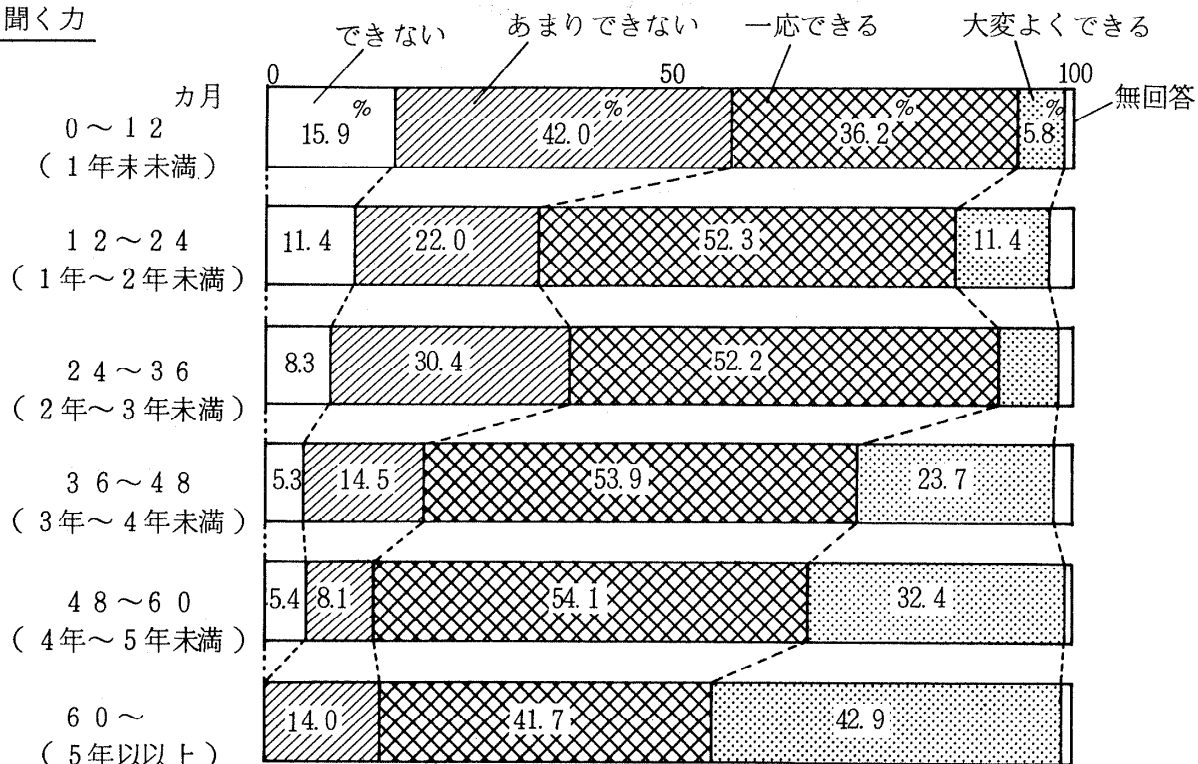
なお、修士課程と博士課程の留学生の日本語能力には差はなく、かなり「できる」と回答している者が多い。それに対して、研究生の日本語能力は、滞日年数も少ないこともあって、それほど高くなく、半数以上の者が「できない」と回答していた。

留学生の日本語能力と滞日年数との間には当然密接な関係がある。第2図は、聞く力と書く力について、それぞれ滞日年数別に「できる」「できない」の回答の割合を示したものである。この図から明らかなように、聞く力、書く力のいずれの場合も、1年未満と1年以上の滞日者の間には大きな差がみられる。すなわち、留学生の日本語能力は、1年で急激に向上しているようである。聞く力については、留学生の約半数以上が「できる」と思うようになるのは、1年以上の滞日で十分であるが、書く力については、3年以上の滞日経験を待たなくてはならない。一般に日本語は難しいと言われているが、留学生の自己診断によれば、1年でかなり「できる」となると考えられており、とりわけ日本語だけが難しいとは思われているわけではないようである。

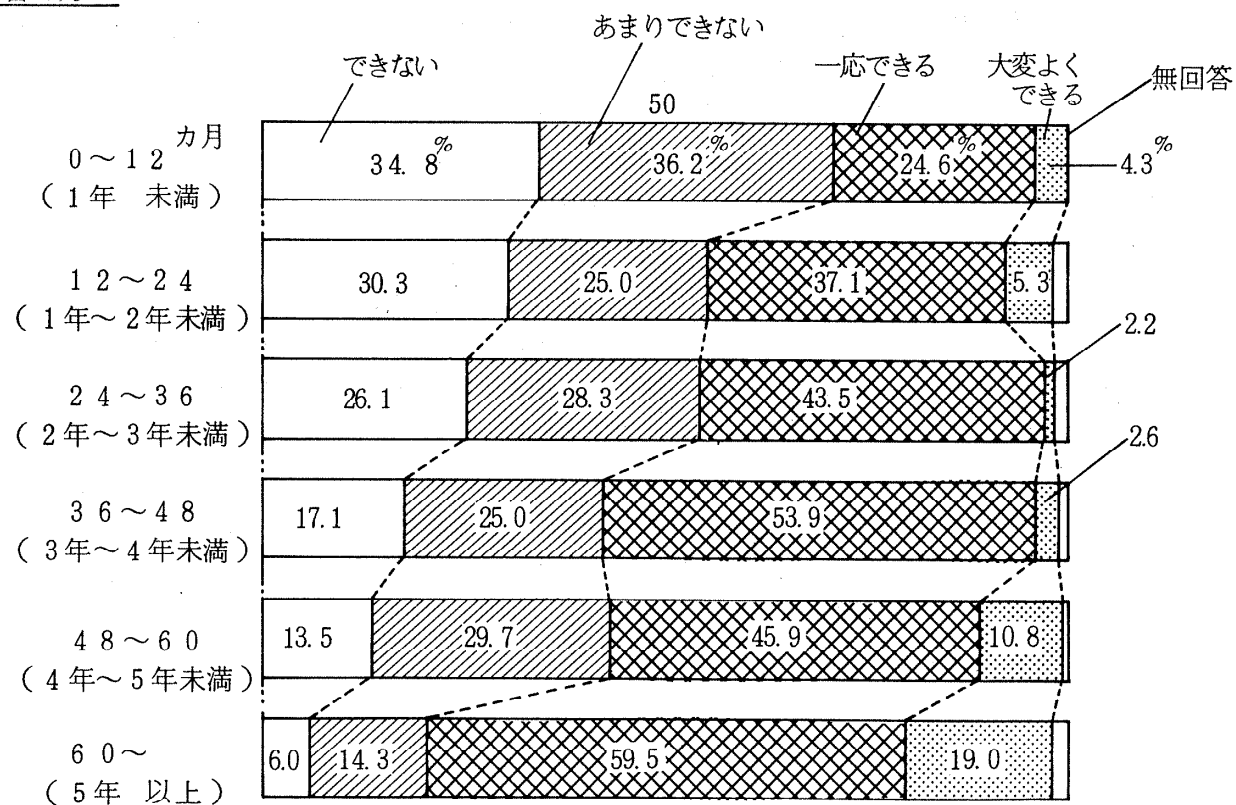
(2) 研究テーマの決定スタイル

「あなたは現在の研究テーマをどのように決めましたか。（一つだけ選んで下さい）」（Q-9）との設問にたいしては第15表に示すように、「自分自身の学問の関心にもとづいて」決定した者（自己決定型）が最も多く、全体の48.4%にたっている。次いで、「指導教授の助言により」決定した者（指導助言型）が、37.1%となっている。「母国の政府や大学の要請により」決定した者（国家要請型）は、2.0%と、きわめて少ない。なお、「まだ決めていない」と回答した者も若干いる（4.5%）。

(1) 聞く力



(2) 書く力



第2図 滞日年数と日本語能力

第15表 留学生の研究テーマ決定スタイル

	全 体	専 攻 分 野							地 域			
		文 科 系			文 科 系	理 科 系		理 科 系	台 湾 中 ・ 国	東 南 ア ジ ア	欧 米	そ の 他
		人 文	社 会	教 育		工	保 健					
1. 自分自身の学問の関心にもとづいて (自己決定型)	48.4 %	79.7 %	64.2 %	57.9 %	68.6 %	34.4 %	36.2 %	36.3 %	47.8 %	40.9 %	67.2 %	50.8 %
2. 指導教授の助言により (指導助言型)	37.1	10.1	17.3	26.3	16.5	57.3	43.1	50.2	40.5	39.1	22.4	31.7
3. 母国の政府や大学の要請により (国家要請型)	2.0	1.4	2.5	2.6	2.1	0.8	3.4	1.7	2.0	4.5	0.0	0.0
4. まだ決めていない	4.5	2.9	7.4	7.9	5.9	2.3	8.6	3.5	3.2	4.5	1.7	9.5
5. その他	3.5	2.9	6.2	0.0	3.7	3.8	1.7	3.5	3.6	1.8	5.2	4.8
9. 無回答	4.5	2.9	2.5	5.3	3.2	1.5	6.9	4.8	2.9	9.1	3.5	3.2
(計)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

留学生の研究テーマ決定スタイルも、自己決定型と指導助言型に二分されるが、とくに専攻分野によって研究テーマの決定スタイルが大きく異なっている。すなわち、文科系には自己決定型が多く（68.6%）、理科系には指導助言型が多い（50.2%）。また、文科系にあっても、人文・社会・教育では若干、自己決定型の留学生の割合が異なっている。人文系では、留学生の約8割が自己決定型であるのに対し、社会系では64.2%、教育系では57.9%となっている。

研究テーマ決定スタイルを地域別にみると、欧米の留学生に自己決定型が多く、指導助言型が少いと言えるが、欧米以外の地域の留学生の場合、自己決定型と指導助言型がおおよそ半々である。

(3) 教授用語

「あなたの大学院では、講義、演習、実験は主として何語で行われますか」（Q-11）と大学院の教授用語について尋ねたところ、留学生全体の63.7%が、「日本語だけ」と回答していた。「日本語だけ」で授業が行われていると回答した者の比率が高かったのは、博士課程（71.7%）、人文系（71.0%）、工学系（75.6%）、農学系（70.6%）であり、地域別にみると欧米（74.1%）、東南・南アジア（70.0%）である。（第16表）

それに対して、「英語（あるいは日本語以外の外国語）」と回答した留学生は、0.2%であり、英語だけの授業は皆無に近い。

「日本語と英語（あるいは他の外国語）」と回答した者の比率は、全体で33.5%である。専攻分野別にみると、文科系と理科系全体では差はみられないが、理学系（54.8%）、保健系（53.4%）および社会系（43.2%）が、「日本語と英語（あるいは他の外国語）」の併用による授業が多く

第16表 教授用語

	全 体	課 程			専 攻 分 野								地 域				
					文 科 系			文 科 系		理 科 系							
										理 科 系							
		修 士	博 士	研 究 生	人 文	社 会	教 育	文 科 系		理	工	農	保 健	理 科 系	漢 字 圏	東 南 ア ジ ア	欧 米
1. 日本語だけ	% 63.7	% 64.1	% 71.7	% 51.4	% 71.0	% 53.1	% 60.5	% 61.2	% 45.2	% 75.6	% 70.6	% 41.4	% 64.4	% 57.1	% 70.0	% 74.1	% 65.1
2. 日本語と英語 2. (あるいは他の外国語)	33.5	34.5	25.3	44.0	26.1	43.2	36.8	35.6	54.8	21.4	27.9	53.4	32.9	40.1	26.4	24.1	31.7
3. 英語(あるいは日本語以外 の外国語)	0.2	0.0	0.0	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	1.7	0.0
4. その他	1.2	1.0	1.8	0.9	2.9	1.2	0.0	1.6	0.0	0.8	1.5	1.7	1.0	1.6	0.9	0.0	1.6
無 回 答	1.4	0.5	1.2	2.8	0.0	2.5	2.6	1.6	0.0	1.5	0.0	3.4	1.4	1.2	2.7	0.0	1.6

行われているようである。ところが、日本語能力がかなり高いはずの漢字圏の留学生の 40.1 % の者が、二言語併用であると回答しており、その比率は、東南・南アジアの留学生 (26.4 %), 欧米の留学生 (24.1 %), その他の地域の留学生 (31.7 %) のそれよりもはるかに高いという奇妙な結果が現われている。このことは、教授用語が「日本語と英語 (あるいは他の外国語)」であるということについての留学生の受け取り方に問題があることによると考えられる。すなわち、大学院の授業が日本語と英語の二言語併用 (bilingual) で行われているということではなく、日本語が中心であるけれども、英語あるいは他の外国語 (恐らくテクニカル・タームであろうが) も頻繁に用いられているということであろう。二言語併用ではなく、二言語混用であるというべきではなかろうか。

ちなみに、留学生の日本語能力 (聞く力) と教授用語についての回答状況とをクロスしてみると第17表のとおり、日本語能力に問題があるほど日本語だけの授業が少なくなり、日本語と英語あるいは他の外国語との混用による授業が増えていることがわかる。すなわち、「日本語と英語 (あるいは他の外国語)」と回答した者の割合が、日本語の「大変よくできる」者の 27.8 %, 「一応できる」者の 29.8 %, 「あまりできない」者の 41.1 %, 「できない」者の 48.6 % となっている。

第 1.7 表 日本語能力と教授用語

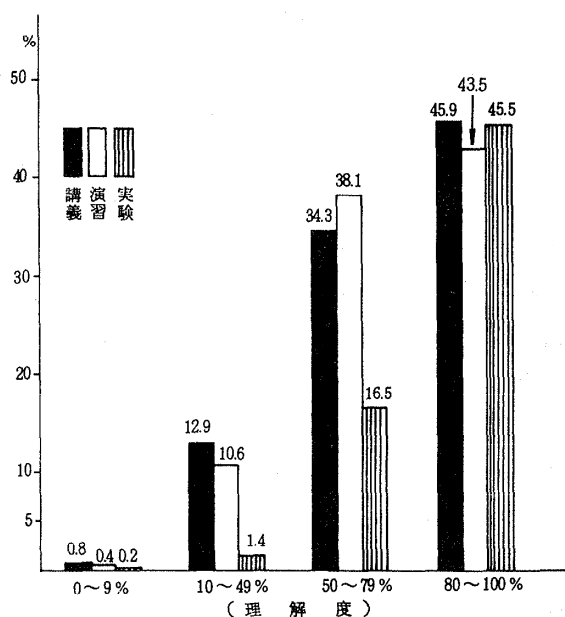
教授用語 (Q11)	日本語能力 (Q8-B)	授 業 を 聞 く 力 (Q8-B)			
		1. 大変よくできる	2. 一応できる	3. あまりできない	4. できない
1. 日本語だけ		72.2 %	66.8 %	58.0 %	45.7 %
2. 日本語と英語		27.8	29.8	41.1	48.6
3. 英語 (他の外国語)		0.0	0.0	0.0	2.9
4. その他		0.0	2.1	0.0	2.9

以上のことから、わが国の大学院での授業は、基本的に日本語だけで行われているが、留学生がいる場合にはその日本語能力に応じて、英語あるいは他の外国語の混用を行うという配慮がなされていると言えよう。

(4) 講義・演習・実験の理解度

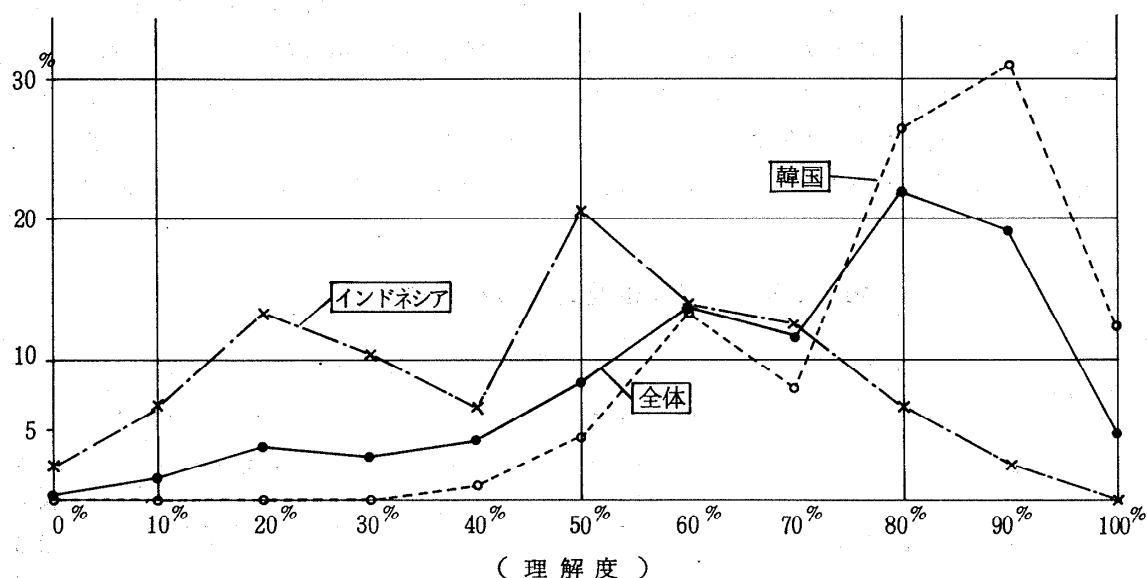
講義・演習・実験のそれぞれについて、「何パーセントぐらい理解できると思いますか」(Q-12)と尋ねたところ、第3図にみられるように授業の80%以上理解できると回答した者の比率は、講義 45.9%, 演習 43.5%, 実験 45.5%であった。さらに50~70%は理解できると回答した者の比率は、講義で 34.3%, 演習で 38.1%, 実験で 16.5% (実験については無回答が 36.3%と高い) となっており、留学生の授業の理解度に関する自己判断は非常に高いといえる。

講義の理解度が低いと考えている者は約 1 割強いるが、国立大学 (14.5%), 国費



第 3 図 授業の理解度

留学生（18.9％）、研究生（21.1％）となっている。さらに、専攻分野別でみると、教育系（21.1％）と保健系（20.7％）に理解度の低い者が多い。地域別では、東南・南アジア（26.3％）とその他（中近東・アフリカ・中南米）の地域（19.1％）に多い。漢字圏の留学生で授業の半分も理解できないと回答した者の割合が、わずか4.0％であることを考えれば、東南アジアその他の地域の留学生が授業が理解できないのは、日本語能力の不足によるものと考えられる。ちなみに第4図に示すように、韓国の留学生とインドネシアの留学生の講義の理解度の分布を比べてみると、両者の間に顕著な差が存在していることが明らかになる。日本語能力が高い韓国の留学生の講義の理解度はきわめて高いのに対し、日本語に困難を感じているインドネシアの留学生のそれは、かなり低い。



第4図 韓国とインドネシア留学生の講義の理解度

(5) 授業の難しい理由

講義や演習の理解度が低いのは、留学生の日本語能力に問題があると想定できるが、留学生自身、授業が難しい理由についてどのように考えているのであろうか。

「もし、授業が難しいとすれば、その主な原因は何か」（Q-19）と尋ねたところ、多数の留学生（約60％）が「日本語の理解力が不足」を挙げていた。（第18表）それに対し、「教授法が系統的でない」（9.0％）「外国語、数学、物理などの基礎学力が不足（8.4％）」、「授業の水準が高すぎる」（8.0％）および「教育内容が不適切」（2.9％）の理由を挙げた者はきわめて少ない。このことは、留学生の日本語が授業の内容や方法、あるいは水準を批判するに十分ではないことを意味するのであろうか。あるいは、日本語の理解力さえ解決できれば、授業は容易に理解されうることであろうか。

そこで、日本語能力が高い留学生（授業を聞く力につ

第18表 授業の難しい理由

		全 体
留 学 生 の 個 人 理 由	2. 日本語の理解力が不足	59.6 %
	4. 外国語などの基礎力が不足	8.4
	（小 計）	68.0
授 業 の 内 容 方 法	1. 水準が高すぎる	8.0
	5. 内容が不適切	2.9
	3. 教授法が系統的でない	9.0
	（小 計）	19.9
無 回 答		12.2

いて、「大変よくできる」と回答した者)の意識についてみると、第19表にみられるように22.7%の者が依然として、「日本語の理解力が不足」を理由として挙げているが、その割合は全体のそれよりもはるかに小さくなっている。それに対して、無回答の比率は24.7%とかなり高くなっている。このことは、日本語能力さえ高くなれば、日本の大学院の授業は難しくないと評価されていることを意味しよう。なお、日本語が「大変よくできる」留学生にとっても、授業が難しい理由は、「教授方法が系統的でない」(18.6%)、「基礎学力の不足」(16.5%)、「授業の水準が高すぎる」(11.3%)、「内容が不適切」(6.2%)という順で選ばれており、留学生全体の傾向とまったく同じである。

ところで第20表は留学生の留学前の職業別の授業の難しい理由を示したものであるが、日本語の問題を別にすれば、学生の目からは、「教授方法が系統的でない」ことが大きな理由とされ研究者(大学・研究職)の目からは、「外国語、物理、数学などの基礎学力の不足」が授業の難しい理由であるとされているようである。

第19表 日本語能力と授業の難しい理由

理 由	授 業 を 聞 く 力				
	大 変 よくできる	一応できる	あ ま り できない	できない	無 回 答
日 本 語 の 理 解 力 が 不 足	22.7 %	60.1 %	83.9 %	82.9 %	50.0 %
基 礎 学 力 が 不 足	16.5	8.4	2.7	2.9	12.5
水 準 が 高 す ぎ る	11.3	10.5	2.7	0.0	0.0
教 育 内 容 が 不 適 切	6.2	2.1	0.9	5.7	0.0
教 授 法 が 系 統 的 で な い	18.6	8.4	4.5	0.0	12.5
無 回 答	24.7	10.5	5.4	8.6	25.0

第20表 留学前の職業別にみる授業の難しい理由

理 由	1 無 職	2 学 生	3 大 学 ・ 研 究 職	4 教 員	5 公 務 員	6 会 社 員	7 そ の 他	9 無 回 答
2. 日本語の理解力の不足	53.3 %	51.2 %	59.7 %	51.9 %	79.2 %	51.9 %	71.4 %	68.4 %
4. 基礎学力の不足	13.3	6.6	10.1	7.4	2.1	11.5	10.2	5.3
1. 水準が高すぎる	6.7	9.9	9.4	11.1	4.2	9.6	2.0	0.0
5. 教育内容が不適切	6.7	4.1	2.5	7.4	0.0	3.8	0.0	0.0
3. 教授方法が系統的でない	13.3	14.0	4.4	7.4	6.3	15.4	6.1	10.5
無 回 答	6.7	14.0	13.8	14.8	8.3	7.7	10.2	15.8

(6) 研究指導の回数と充足度

大学院での指導教授による研究指導がどの程度行われているかを知るために、「あなたは、研究上のことで指導教授と一年に何回ぐらい会いますか」(Q-14)と尋ねたところ、第21表のような結果を得た。1年に10回以下と回答した者の比率は、28.8%と最も高くなっている。次いで11～20回(18.2%)、41～100回(14.7%)、21～40回(14.1%)の順となっている。

研究指導を受けるために指導教授に1年に10回以下しか会わない者は、博士課程の留学生(34.4%)、専攻分野別にみれば、教育系(44.7%)に多い。また、日本に1年以上滞在しているにも

かかわらず、1年に1回も指導教授と会わないと回答した者が、0.8%いた。

研究指導については単に指導教授と会うか会わないかということだけで、指導が十分であるか否かを判断することはできないにしても、教育系のように留学生の2人に1人は、平均して月平均1回程度しか直接指導教授に会って研究指導を受けていないという実態には、少なからぬ問題があるといえる。

第21表 指導回数

指導回数	全 体	課 程			専 攻 分 野						
		修	博	研	人文	社会	教育	理	工	農	保健
0 - 10	28.8 %	27.2 %	34.4 %	25.7 %	31.8 %	30.8 %	44.7 %	19.4 %	22.1 %	30.9 %	25.9 %
11 - 20	18.2	18.0	21.1	14.7	14.5	17.3	10.5	12.9	26.0	22.1	13.8
21 - 40	14.1	17.0	11.4	12.8	23.2	19.8	15.8	12.9	16.0	5.9	1.7
41 - 100	14.7	14.1	16.3	11.9	13.0	16.0	18.4	19.4	14.5	8.8	17.2
101 -	7.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
N. A	18.0	18.0	9.0	29.0	17.4	14.8	2.6	16.1	13.7	26.5	29.3

ところが、このような研究指導の実態であるにもかかわらず、「あなたは、研究上十分な指導や助言を得ていると思いますか」と、研究指導の充足度について尋ねたところ、十分な指導・助言を受けていると回答した者は68.0%であり、逆に十分な指導・助言を得ていないと回答した者は18.9%であり、研究指導の充足度がかなり高いという結果が得られた。

教育系の留学生の充足度もきわめて高く、73.7%の者が、十分な指導・助言を得ていると回答していた。指導教授と会う回数は少ないが、指導・助言は十分であるということであろうか。それに対して、工学系の留学生の場合会う回数も多く、指導・助言も十分であるという。

研究指導の充足度は、漢字圏およびアジアの留学生の方が、欧米、その他の留学生よりもかなり高くなっている。欧米の留学生の31.0%の者が、十分な指導・助言を得ていないと批判的である。(第22表)

第22表 指導の充足度

充分な指導を得ているか	全 体	専 攻 分 野									地 域 別			
		文 系				理 系					漢字圏 (中国・台湾・韓国・日本)	東南アジア	欧米	その他
		人文	社会	教育	文系	理	工	農	保健	理系				
1. はい	68.0%	69.6%	66.7%	73.7%	69.1%	64.5%	74.8%	63.2%	65.5%	69.2%	73.7%	68.2%	58.6%	58.7%
2. いいえ	18.9	23.2	18.5	13.2	19.1	29.0	11.5	22.1	15.5	16.6	15.0	15.5	31.0	20.6
3. わからない	9.8	4.3	9.9	13.2	8.5	3.2	11.5	10.3	12.1	10.4	7.7	12.7	5.2	17.5

研究指導を十分受けていないと思っている留学生は、研究テーマを自分の学問的関心に基づいて決定した、いわゆる自己決定型に多く（21.9%）、教授の指導・助言によってテーマを決定した者は少ない（12.6%）。研究テーマを決定する上での指導や助言が必要であり、留学生からも求められていると言えよう。（第23表）

第23表 研究テーマ決定スタイルと充足度

決定スタイル 充足度	自己決定	助言型	母国要請型	未定	その他	無回答
はい	67.1%	74.2%	70.0%	40.9%	64.7%	54.5%
いいえ	21.9	12.6	30.0	22.7	23.5	13.6
わからない	7.2	12.6	0.0	18.2	11.8	9.1
無回答	3.8	0.5	0.0	18.2	0.0	22.7

5 学位の取得

(1) 学位の必要度

大学院レベルの留学生にとって、学位の取得が留学の最大の目的であることは、いくつかの先行研究が示すところであるが、本調査（Q-17「あなたにとって日本の学位はどの程度必要ですか」）においても、学位取得の必要度はきわめて高いことが確認された。

まず、修士学位についてみると（第24表）「絶対に必要」（25.7%）、「必要」（31.8%）の両者を合わせると、57.5%の者が、修士学位取得の必要性があるとしている。特に、現在修士課程に在籍中の大学院生の場合、その必要度は特に高く、8割近く（79.1%）の者が、修士学位を「絶対必要」または「必要」と答えている。これを地域別にみると、最も必要度（「絶対必要」「必要」の合計、以下同じ）が高いのは、中南米（66.8%）、台湾・中国（63.8%）、中近東（61.6%）、東南・南アジア（60.9%）の順であり、これらの国では6割以上の者が修士学位を必要としている。これに次いでアフリカ（58.3%）、韓国（56.3%）も必要度が高い地域といえる。

第24表 修士学位の必要度

	単純集計	課程別			地域別								
		修士	博士	研究生	台湾	韓国	東南・南アジア	オセアニア	北米	ヨーロッパ	中近東	中南米	アフリカ
1. 絶対に必要	25.7%	33.5%	24.1%	14.7%	32.5%	29.9%	21.8%	0.0%	11.8%	5.9%	30.8%	24.3%	23.3%
2. 必要	31.8	45.6	23.5	18.3	31.3	26.4	39.1	28.6	17.6	29.4	30.8	40.5	25.0
3. それほど必要でない	12.0	13.1	9.6	13.8	14.4	11.5	10.9	14.3	23.5	14.7	0.0	10.8	0.0
4. まったく必要でない	9.2	4.9	4.2	24.8	7.5	1.1	5.5	57.1	47.1	32.4	0.0	2.7	8.3
5. わからない	3.1	1.0	3.6	4.6	1.9	3.4	5.5	0.0	0.0	2.9	0.0	2.7	8.3
6. N. A.	18.2	1.9	34.9	23.9	12.5	27.6	17.3	0.0	0.0	14.7	38.5	18.9	25.0

このように、発展途上国における修士学位の必要度は概して高い。これに対して、オセアニア(28.6%)、北米(29.4%)、ヨーロッパ(35.3%)等、いわゆる先進諸国からの留学生の場合、修士学位の必要度は3割前後で、あまり高いとはいえない。「それほど必要としない」「まったく必要としない」を合わせるとオセアニアの場合71.4%、北米70.6%、ヨーロッパ47.1%となっている。

次に博士学位の必要度についてみると、61.3%の者が「絶対必要」または「必要」と回答しており、修士学位の必要性より高くなっている。特に博士課程在籍者の場合、91.6%の者が博士学位を必要としていることから明らかなように、大学院留学生(特に博士課程)は学位(博士学位)を取得するために留学していることが明かである。(第25表)ただ博士学位についても、地域差が顕著であり、アフリカの場合100%、韓国の場合91.9%の者が博士学位の必要性を表明している。同様に、東南・南アジア(66.4%)、中近東(61.6%)、発展途上国からの留学生は博士学位の必要性が高い。これに対し、北米(23.5%)、ヨーロッパ(20.6%)、オセアニア(0.0%)の場合は、修士学位よりもその必要度は低くなっている。

第25表 博士学位の必要度

	単純集計	課程別			地域別								
		修士	博士	研究生	台湾・中国	韓国	東南アジア	オセアニア	北米	ヨーロッパ	中近東	中南米	アフリカ
1. 絶対に必要	27.8	15.0	50.6	18.3	19.4	51.7	30.0	0.0	0.0	8.8	30.8	18.9	61.5
2. 必要	33.5	32.5	41.0	25.7	34.4	40.2	36.4	0.0	23.5	11.8	30.8	40.5	38.5
3. それほど必要ではない	19.6	27.7	6.6	24.8	31.3	4.6	14.5	28.6	11.8	32.4	23.1	18.9	0.0
4. まったく必要ではない	6.7	8.7	0.6	12.8	4.4	0.0	2.7	71.4	35.3	23.5	7.7	5.4	0.0
5. わからない	4.5	4.4	0.0	8.3	3.1	1.1	7.3	0.0	11.8	8.8	0.0	5.4	0.0
N. A.	8.0	11.7	1.2	10.1	7.5	2.3	9.0	0.0	17.6	14.7	7.7	10.8	0.0

これは、母国における大学院(つまり学位授与)の充実度と深く関係していると考えられる。発展途上国の場合、母国における大学院(特に博士課程)は必ずしも充実しておらず、学位(特に博士学位)は海外でとらざるをえない場合が一般的であるともいえる。一方、欧米先進国からの留学生の場合、その必要度が低いのは、後にみるように、母国における日本の学位の低い評価とともに、母国で学位(特に博士/Ph.D)を取るための準備段階(Candidate)として日本留学を位置づけている者が多いためと思われる。

(2) 学位取得の難易

日本の大学院留学生の7割以上を占めるアジア諸国からの留学生をはじめとして、発展途上国からの留学生の学位志向性は、きわめて強いのであるが、彼らの実際の学位取得の可能性をも含めて、その難易度をどのようにみているのであろうか。(Q-15)

修士学位についてみると、容易であるとする者が全体の5割以上(53.3%)あり、必ずしも困難とみなされているとはいえない。課程別にみると、修士課程(57.3%)、博士課程(59.0%)在籍者の場合、6割近くの者が、修士学位の取得は容易と回答しているのである。専攻分野の観

第26表 学位取得の難易

		単純集計	課程別					専攻分野別						
			修士	博士	研究生	その他	N. A.	人文	社会	理学	工学	農学	保健	教育
a. 修士学位の場合	1. 難しい	16.3%	20.9%	13.9%	11.9%	20.0%	—	20.3%	12.3%	19.4%	18.3%	17.6%	8.6%	18.4%
	2. 容易	53.3	57.3	59.0	37.6	40.0	50.0	56.5	72.8	41.9	55.0	45.6	37.9	52.6
	3. わからない	21.4	20.4	13.9	33.9	40.0	25.0	20.3	13.6	29.0	19.8	27.9	22.4	26.3
	N. A	9.0	1.5	13.3	16.5	0.0	25.0	2.9	1.2	9.7	6.9	8.8	31.0	2.6
b. 博士学位の場合	1. 難しい	60.0	58.7	69.9	48.6	20.0	75.0	73.9	74.1	54.8	57.3	47.1	46.6	71.1
	2. 容易	10.2	8.3	14.5	7.3	20.0	0.0	4.3	1.2	19.4	11.5	17.6	13.8	10.5
	3. わからない	23.3	23.3	13.9	36.7	40.0	25.0	17.4	16.0	22.6	23.7	29.4	36.2	10.5
	N. A	6.5	9.7	1.8	7.3	20.0	0.0	4.3	8.6	3.2	7.6	5.9	3.4	7.9

点からみると、社会系（72.8%）と人文系（56.5%）は、特に容易に修士学位がとれるようである。自然科学系の場合は、人文社会系ほどではないが、それでも5割前後の者は修士学位の取得を「容易」としており「難しい」とする者は2割に満たない。（第26表）

ところが、博士学位となると事情は一変する。全体の6割（60.0%）の者が「難しい」と答えており、博士課程に在籍する留学生の場合、7割近く（69.9%）が取得の困難さを表明している。これを専攻分野別にみると、修士学位の場合とは逆に、社会系（74.1%）、人文系（73.9%）、教育系（71.1%）が、博士学位の取得の困難さを訴えており、逆に自然科学系（理学54.8%、工学57.3%、農学47.1%、保健46.6%）では学位取得が困難であるとする者は5割前後である。こうした傾向は、自然科学系の場合、「課程博士」の理念に即して学位を出しているのに対し、人文・社会系の場合、制度上は「課程博士」制をとりながら、実際の学位の認定は旧制博士的感覚で行なわれているところに原因があると考えられる。

(3) 学位の評価

このように、一般的に（特に人文・社会系）取得が難しいと考えられている日本の博士学位は、留学生の母国ではどのように評価されているのであろうか。特に欧米諸国の学位と母国の学位との対比において、日本の学位は留学生の母国でどのように評価されているのであろうか。（Q-18）

まず全体的傾向についてみると第27表にみられるとおり、最も高く評価されていると留学生が回答しているのは、アメリカ合衆国の学位であり、「高く評価されている」（66.3%）、「ある程度評価されている」（23.5%）となっている。次いで高い評価を得ているのはヨーロッパ諸国の学位であり、「高く評価されている」48.6%、「ある程度評価されている」が39.4%となっている。これに対し、日本の学位を、「高く評価している」とする者は21.2%にすぎず、その取得が難しいにもかかわらず、必ずしも高い評価を得ているとはいえない。ただ、「ある程度評価する」とする者は50.6%に達している。次に留学生の母国の学位は、これらの諸国の学位に比べ、社会的評価は必ずしも高くないようであり、「それほど評価されていない」が28.6%にも達している。もちろん母国の学位も取得すればそれなりの評価はされるのであり、「高く評価されている」とする者17.6%、「ある程度評価されている」とする者42.0%となっている。

以上の結果から、大学院留学生にとって学位の母国における社会的評価は、アメリカ合衆国の

第27表 日本の学位（博士相当）の母国での評価

①高く評価されている。 ②ある程度評価されている。
③それほど評価されていない ④わからない（N.A.含む）

(%)

学位の種類	回 答	単純集計	地 域 別								
			台中 湾・国	韓 国	東南 アジア ・ア	オセア ニア	北 米	ヨー ロッパ	中 近 東	中 南 米	ア フリ カ
a. 日 本 の 学 位	①	21.2	18.8	28.7	21.8	0.0	5.9	11.8	23.1	23.1	32.4
	②	50.6	66.3	59.8	44.5	0.0	23.5	23.5	53.8	23.1	40.5
	③	13.7	10.0	6.9	18.2	42.9	29.4	23.5	0.0	23.1	10.8
	④	14.5	5.0	4.5	15.5	57.1	41.2	41.2	23.1	30.8	16.2
b. ヨーロッパ 諸 国 の 学 位	①	48.6	43.1	54.0	57.3	28.6	29.4	26.5	46.2	61.5	64.9
	②	39.4	43.8	33.3	35.5	57.1	52.9	58.8	46.2	30.8	29.7
	③	3.1	1.9	5.7	0.0	0.0	5.9	8.8	7.7	0.0	2.7
	④	9.0	11.2	6.9	7.3	14.3	11.8	5.9	0.0	7.7	2.7
c. アメリカ合衆国 の 学 位	①	66.3	63.1	73.6	80.9	0.0	52.9	32.4	61.5	53.8	83.8
	②	23.5	28.1	17.2	13.6	71.4	29.4	44.1	30.8	38.5	13.5
	③	3.3	2.5	4.6	0.0	14.3	0.0	17.6	7.7	0.0	0.0
	④	7.0	6.2	4.6	5.5	14.3	17.7	5.9	0.0	7.7	2.7
d. 母 国 の 学 位	①	17.6	12.5	8.0	20.0	14.3	41.2	38.2	30.8	23.1	16.2
	②	42.0	51.9	44.8	30.9	71.4	29.4	38.2	30.8	53.8	37.8
	③	28.6	27.5	42.5	29.1	0.0	5.9	20.6	30.8	7.7	32.4
	④	11.8	8.1	4.5	20.0	14.3	23.5	2.9	7.7	15.4	13.5

学位を頂点に、ヨーロッパ諸国の学位、日本の学位、母国の学位の順になっている。日本の学位は、欧米の学位と母国の学位の中間に位置しているといえる。こうした学位のプレステージ構造がいかにして形成されたかは、本調査の範囲外の問題ではあるが、特に、アメリカ合衆国の学位の高い評価については、次のことはいえるであろう。すなわち、第二次大戦後におけるアメリカ合衆国の強大な国力を背景に、学問の中心（Center of Learning）がヨーロッパからアメリカに移ったこと、また本調査対象者の7割以上を占めるアジア諸国（台湾、韓国、東南・南アジア）の第二次大戦後におけるアメリカとの政治・経済・文化の各領域における紐帯関係の強さがこうした結果と無関係ではないと考えられる。

ちなみに、地域別に学位の威信構造についてみると、旧宗主国をヨーロッパにもつアフリカや東南・南アジア地域において、アメリカの学位が最も高く評価されていることは第二次大戦後の特色として注目される。同様に、第二次大戦前は日本の統治下にあった台湾、韓国においても、現在最も高い評価を受けている学位は、アメリカ合衆国のそれであり、これは、ひとえに、第二次大戦後のアメリカ合衆国の対台湾・対韓国政策を背景にした大量の留学生招致政策によるところが大であるといえよう。ただ台湾・韓国の場合は、歴史的に日本とつながりの深い隣国として、他の地域に比べ、日本の学位に対する評価は高いといえる。日本の学位を「それほど評価していない」と否定的に評価する留学生の比率は、オセアニア 42.9%，北米 29.4%，ヨーロッパ 23.5%，東南・南アジア 18.2%に対し、台湾の場合 10.0%，韓国の場合 6.9%と低くなっている。これら両国では、「ある程度評価されている」を含めると、日本の学位に一定の評価を与えている比率は、韓国 88.5%，台湾 85.1%と決して低くはない。また日本がかなりの数の留学生を受け

入れている東南アジア地域ではアメリカおよび欧米の学位に匹敵する評価を得ていないものの、「ある程度評価されている」を含めれば、66.3%の者が一定の評価を与えている。中近東やアフリカにおいても、学位の威信の序列は、アメリカ、ヨーロッパ、日本の順ではあるが、これらの発展途上国における学位のもつ価値は高いようであり、70%以上の者が日本の学位が「高く」および「ある程度」評価されていると答えているのである。一方、オセアニア、アメリカ、ヨーロッパ諸国では、日本の学位を「高く評価する」比率はきわめて低く、「わからない」とする者の比率が4-5割に達しており、日本の学位そのものが社会的評価の対象として話題になっていないことを示している。いいかえれば、評価の対象になる程多くは日本の学位が欧米人に対してこれまで授与されてこなかったということでもあろう。

(4) 学位の効用

つづいて、日本の学位が、母国における就職、昇進、昇給などの面でどの程度有効であるかについてみてみよう。ここで学位とは、修士、博士の学位を含むが、日本の学位の効用（Q-19）の全般的傾向としては、「大変有利である」とする者21.6%、「有利である」とする者49.2%となっており、「それほど有利でない」とする者11.8%を大きく上まわっている。ただ、前項でみた日本の学位の評価と同様に学位の効用についても地域差が顕著である。（第28表）

第28表 学 位 の 効 用

	単純集計	地 域 別								
		台 湾・中 国	韓 国	東南・南 アジア	オーストラ リア・ニュ ージーランド	北 米	ヨー ロッパ	中 近 東	ア フリ カ	中 南 米
大 変 有 利 で あ る	21.6%	16.3%	34.5%	20.9%	0.0%	5.9%	8.8%	15.4%	30.8%	37.8%
有 利 で あ る	49.2	58.8	54.0	44.5	28.6	23.5	44.1	38.5	23.1	43.2
そ れ ほ ど 有 利 で な い	18.8	18.1	8.0	20.0	42.9	35.3	38.2	7.7	23.1	13.5
不 (わ か ら な い)	10.4	6.9	3.4	14.5	28.6	35.3	8.8	38.5	23.1	5.4

まず、日本の学位の効用の高い地域としては、韓国、中南米、台湾・中国、東南・南アジアなどがあり、その効用があまり認められない地域としてオーストラリア・ニュージーランド、北米などが挙げられる。特に後者の場合、「それほど有利でない」とする比率が、「有利である」比率を上まわっていることが注目される。総じて、日本の近隣に位置するアジア地域の発展途上国および中南米でその効用が高く、北米・豪州等の先進諸国で低いという結果となっている。

前項でみたように、日本の学位は欧米の学位に比べて、必ずしも高い評価を得ているとはいえない。しかし、アジアおよび中南米等の発展途上国では、学位を取得すればそれなりの効用があることが、この結果は示しているといえる。中近東、アフリカ、ヨーロッパ地域の者も5割以上の者が、その有効性を表明しているのである。

(5) 学位（博士）制度改善への意見

以上、日本の学位をめぐる諸問題について留学生の意識を探ってきたのであるが、最後に、博

士学位の取得に関連して、改善を要するいくつかの問題点について検討してみたい（Q-16）。まず学位取得上、「改善すべき点がある」と答えた者は、全体の45.3%であり、「特にない」と答えた者は14.9%となっている。これを専攻分野別にみると、「改善すべき点がある」とする比率が高いのは、「教育」（68.4%）、「人文科学」（55.1%）、「社会科学」（50.6%）であり、いずれも5割以上の者が改善の必要性を訴えている。一方、理学、工学、農学、保健等の分野でも、改善の必要性を表明している者が、そうでない者よりも多いが、いずれもその比率は3-4割であり、人文・社会・教育ほど高くはない。これらから明らかなように、学位取得をめぐる改善の必要性は、先にみた取得の困難度とも関連するが、人文・社会・教育等の分野にあるようである。Q-16の附属質問（「もし御意見があれば、具体的にお書き下さい」）に対する回答（記述意見）においても同様のことが表明されている。（なお、本調査報告の第IV部として「自由記述意見」が収録されており、そこでも学位問題に関する意見が整理されているが、以下に引用する意見は、Q-16の附属質問に対する回答だけから代表的なものを選んだものである。）

改善を要する点は、大きくわけて次の四点ある。

第1は、博士学位、特に人文科学、社会科学系の学位（博士）取得を容易にせよとするものである。

「日本は、アメリカやヨーロッパに比べて、人文・社会系の分野で博士号を取得するのは、ほぼ夢のようだ。例えば、日本で日本語、日本文学を勉強しても、結局はアメリカへ行って博士号を取得せざるをえないケースもある。」（国立、韓国、文学）

「文学部では、事実上、博士号を取得することは不可能であるらしい。」（国立、韓国、哲学）

「もっとアメリカ・スタイルにして、どんどん出してほしい。」（国立、タイ、工学）

「文科系の場合、博士号がなかなかとれないので、母国に帰って、母校で博士コースを開設できない。」（国立、韓国、文学）

「文学系統では、欧米諸国に比べて非常に難しいと聞いています。理・農・工なみに改善してほしいと希望します。」（国立・台湾・文学）

「留学生はあくまで母国に帰り、母国で、就職するので、しっかり勉強すればなるべく学位を出してほしい。これは日本にとっても決して損とはいえない。なぜなら肩書が物をいうので、学位なしで母国へ帰れば、どんな仕事もやれないし、特に中進国の場合、学位以外に実力の判定基準がない。」（国立、台湾、工学）

「とりわけ、社会科学、人文科学の博士学位の場合、留学生には特別の配慮をすべきだと思います。」（国立、タイ、社会科学）

「博士号を国際化し留学生用の博士号を授与すれば帰国後の競争で地位を確保しやすい」

（国立、台湾、社会科学）

第2は、学位（特に博士）のあり方についての提言である。

「『学位』というのは、学者の一番基本的な免許状であることを、先ず日本の社会（特に学問の社会）が認識すべきではないでしょうか。」（国立、韓国、社会科学）

「博士という学位の権威が高すぎる。アメリカ式に、『専門分野に従事できる能力』として認められた段階でよいと思う。」（国立、韓国、体育）

「制度的には、文科系も理科系も一律に定められているが、実際には人文・社会系は業績によって、理工系はコース・ワークによって学位が決定されている。日本人には問題はないと思うが、外国人留学生にとっては問題である。」（国立、韓国、歴史学）

「特に博士学位を取るのは、研究経歴を重視しているらしい。」（私立、韓国、社会科学）

第3は、学位の審査にあたって、学位の「水準」（および評価の「基準」）が不明確である点、

また審査の過程における様々な問題が指摘されている。

「論文審査の基準が曖昧」(国立, 台湾, 工学)

「博士学位を取得するための水準をはっきりさせるべきである。なお, 審査にかかる時間は一般に長すぎるので, これを短縮すべきである。」(国立, ベトナム, 工学)

「審査において, 教授の前近代的な権威主義的我執が強すぎる。」(私立, 国籍不明, 社会科学)

「学位を与えるための評価基準を明確にすること, またそれを国際的スタンダードに合わせること」(国立, ブラジル, 教育学)

「どの程度で博士号がとれるのか, 基準がわからない。」(国立, 台湾, 社会科学)

第4に, 博士課程における学位取得のための指導についての指摘がある。

「十分な指導によって卒業の時点になると自然に論文(博士)ができるようにしなければならない。留学生は母国へ帰って活躍しないと留学それ自体の意義も生かせないことを十分考えてほしい。」(国立, 韓国, 教育学)

「大学院への入学試験を厳しくすること。しかし合格者に対しては, 学位を取得できるだけ組織化された指導を行なうこと。」(国立, ブラジル, 教育学)

以上は, 数多く記述された改善意見のうちから代表的なものをいくつか選んだにすぎない。しかし, 他の意見も内容的には上記の五点のいずれかに分類できるものであり, 学位(特に博士)問題が, 留学生にとって最も切実でしかも緊急に解決を要する問題であることが表明されているといえる。

6 日本の大学(大学院)の一般的評価

(1) 学術水準

次に, 大学院を含む日本の大学を, 留学生はどのように評価しているかについて, いくつかの観点から質問を試みた。II-1-(1)においてすでにみたように, 大学院留学生にとって, 留学目的の第一番目に位置する「学問研究」と密接に関係する「日本の学術水準が国際的水準に達しているか」(Q-20)についてみると, 全体の63.5%の者が, 日本の大学を国際的な学術水準に達していると肯定的にみている。否定的な見解を示した者は13.7%にすぎない。しかし, これを専攻分野別にみると, 自然科学系で評価が高く, 人文社会科学系は低くなっている。保健(医歯系), 理学, 工学の分野では7割以上の者が, また農学の分野でも6割強の者が国際的水準に達していると高く評価している。ところが社会科学, 教育の分野では, 国際的学術水準に達しているとみている者は5割強にすぎず, 人文科学分野では, 5割を割っている(47.8%)。これら, 人文・社会・教育の分野では, 国際的水準に達していないと, 否定的に評価する者が2割前後にのぼって

第29表 日本の大学の国際的学術水準

(%)

	単純集計	専攻分野別						
		人 文	社 会	理 学	工 学	農 学	保 健	教 育
① は い	63.5	47.8	53.1	74.2	72.5	60.3	79.3	52.6
② い い え	13.7	23.2	22.2	9.7	6.9	13.2	5.2	18.4
③ わからない	22.8	29.0	24.7	16.1	20.6	26.5	15.5	28.9

いる。地域別にみると、アジア諸国の留学生が比較的高い評価をしているのに対し、北米・オセアニアの留学生の間では、否定的意見が肯定的意見を大幅に上回っている。(第29表)

(2) 教育内容・方法・評価

大学教育に関連して、やや特殊な質問ではあるが、大学院留学生(本調査回答者)の9割近くが開発途上国からの学生であることを考慮して「日本の大学は開発途上国の問題に十分関心を払っているか」(Q-20)という質問をした。「十分な関心を払っている」と肯定的な回答をした者は、全体の18.4%であり、「はらっていない」とする否定的回答者は5割を上まわっている(51.2%)。この傾向は専攻分野別にみても出身地域別にみても同様であり、日本の大学は開発途上国から眼をそらしていると、留学生の眼には映っているようである。

教育方法の面で、一般に英語による授業の開設要求が留学生からなされることが多いと伝えられているが、本調査では、「日本の大学は留学生のために英語による授業を開設すべきであるか」(Q-20)に対し、全体的には「必要なし」とする否定的意見(56.5%)が、肯定的意見(27.6%)を大幅に上まわっている。ただし、東南アジア・南アジアおよびアフリカからの留学生は、英語による授業の開設を求める意見が5割を超えており、特にフィリピン(80.0%)、アフリカ諸国(76.9%)では強い。これを専攻分野別にみると、すべての分野で「開設の必要なし」とする意見が、「必要」とする意見より多いが、教育(42.1%)、農学(35.3%)、社会科学(30.9%)などの分野では、3割以上の者が開設を求めており、かなりの要望があることも事実である。

次に、留学生は、日本の大学教授の成績評価を「甘い」とみているのであろうか「厳しい」とみているのであろうか(Q-20)。先にみた学位(博士)の授与においては、人文社会系を中心に「大変厳しい」という意見が支配的であったが、大学での一般的な成績の評価については、全体的にみると、「甘い」(31.4%)と「厳しい」(34.1%)「わからない」(33.5%)となっており、意見が分かれている。やや厳しいというところであらうか。専攻分野別にみると、「甘い」が「厳しい」を上まわっているのは、社会科学、教育系のみであり、その他は「厳しい」がやや多くなっている。これを出身地域別にみると、台湾・中国、韓国など漢字文化圏の留学生は成績評価が「甘い」とする者19.8%、「厳しい」とする者45.3%で、日本の大学教授の成績評価は決して甘くないと感じているようである。一方、欧米および東南・南アジアの留学生は、「厳しい」とする者よりも「甘い」とする者の方が圧倒的に多く、5割前後の者が日本の大学の成績評価を「甘い」とみている。このような「評価」に対する感じ方の地域差は、母国における成績評価のあり方と深くかかわりがあると考えられる。

(3) 留学生に対する教師・学生の協力度

留学生にとって、日本の大学教授や学生はどのようにうつっているのであろうか。まず大学の教師が一般的にいて留学生に「無関心である」と否定的に評価する者は全体の2割弱(18.4%)であり、6割以上(64.3%)の者は、「無関心ではない」と肯定的に評価している。日本の大学教師は留学生にそれほど冷淡な印象を与えてはいないようである。ただ、地域別にみると、若干の差異がみられ、最も好意的反応(「無関心ではない」)を示しているのは漢字文化圏(台湾・中国、韓国、71.6%)の留学生で、欧米(67.2%)、東南・南アジア(50.0%)の順となっている。

次に、「日本人学生の留学生に対する勉学面での協力度」(Q-20)についてみると、全体の7割近く(69.8%)の者が「協力的である」と答えており、否定的回答は2割以下(18.4%)である。ところがこれを地域別にみると顕著な差がみられる。北米(アメリカ、カナダ)の場合94.1%の者が「協力的」とであると反応しているのに対し、韓国の場合は58.6%が「協力的」

（「非協力」 23.0 %）とみているにすぎず、日本人学生に対して最も厳しい見方をしているといえる。しかしながら、総じて大学教師も日本人学生も、留学生の眼にはかなり「協力的」とうつっているといえる。

7 日本留学の評価

最後に、留学生が自己の日本留学を全体としてどう評価しているかをみるため、「日本の大学院で学んだことが、帰国後役立つと思いますか」（Q-23）と質問した。これに対し、「大変役立つ」と答えた者 39.0 %、「役立つ」と答えた者 51.2 %であり、両者を合わせると 9 割以上（90.2 %）の者が日本留学に高い評価を与えている。「それほど役立たない」と否定的な回答を寄せた者は 4.3 %にすぎない。「役立つ」中身については明らかではないが、「帰国後の計画」（Q-22）に対する回答をみると、「前職に復帰する」（37.1 %）、「新しい職場を見つける」（31.2 %）「大学生として勉学を続ける」（3.5 %）、「決めていない」（14.1 %）、「帰国するつもりはない」（3.9 %）、その他（10.2 %）となっていることから、新旧の「職場」において留学の成果を生かそうとしていることが伺われる。

こうした日本留学に対する評価を別の角度からみるため、「知人に日本留学を積極的にすすめるか」（Q-20）という質問への回答をみると、「すすめる」 50.4 %、「すすめない」 27.8 %となっている。自己の留学体験をふまえて日本留学を知人にも大いにすすめようとする者は約半数であり、否定的な回答を寄せた者が 3 割近くもあることは、留学生が日本留学に必ずしも全面的に好意をもっているとはいえない事実を示しているといえる。この「日本留学のすすめ」を専攻分野別にみると、保健（63.8 %） 教育（63.2 %） 人文（59.4 %） 理学（58.1 %）の分野が「すすめる」と好意的に評価しているのに対し、農学（39.7 %） 工学（41.2 %） 社会（48.1 %）の分野は 5 割を割っている。後者は「すすめない」と否定的な回答を寄せた者が 3 割以上いる。これを地域別にみると（第30表）、最も「すすめる」比率の高いのは中近東・アフリカ・中南米地域（64.7 %）であり、続いて欧米（56.9 %）、東南・南アジア（47.2 %）、漢字文化圏（台湾・中国、韓国 45.7 %）となっている。日本留学への好意度は日本との距離に反比例しているといえる。逆に「すすめない」と日本留学に厳しい見方をする比率は、日本との距離に比例して

第30表 日本留学のすすめ

	地 域 別			
	漢 字 文 化 圏	東 南 ・ 南 ア ジ ア	欧 米	そ の 他 (中近東・アフリカ・中南米)
すすめる	45.7 %	47.2 %	56.9 %	64.7 %
すすめない	37.7	25.5	13.8	10.3
わからない	15.8	22.7	29.3	20.6
N. A.	0.8	4.5	0.0	4.4

おり、漢字文化圏の場合 37.7 %の者が「すすめない」と否定的評価をしている。なかでも留学生の最も多い台湾の場合は 46.9 %の者が「すすめない」と回答しており、「すすめる」（41.3 %）とする肯定的回答を上まわっている。

以上にみられる日本留学を知人にすすめるにあたっての抵抗感が何に由来するかについては、本調査の範囲を越える問題ではあるが、Ⅱ-1-(2)においてみた第1志望率と関係がなくはないであろう。「留学終了後の計画」(Q-21)への回答として、「すぐに帰国する」(60.4%)、「できれば日本にとどまる」(11.6%)とならんで、「日本以外の国に留学する」と答えたものが2割近く(19.6%)もあり、そのうち再度留学したい「日本以外の国」についてみると、彼らの61.5%は「アメリカ」と答えているのである。

いずれにしても留学生は、すでにみたように日本の大学の学術水準や教育の実際さらには教授や学生の彼らに対する態度などをかなり高く評価しながらも、全体として日本留学を評価することになると、かなりの抵抗があるようであり、必ずしも好意的とばかりはいえないようである。

Ⅲ 授業の理解度と大学院生活への満足度の規定要因

これまでは主としてクロス分析により、各テーマごとに各質問項目をいくつかの側面から個別に考察してきた。そのなかで、外国人留学生が日本の大学院の授業をどの程度理解しており、また、どの程度日本の大学院に満足しているか、についても多方面から検討されてきた。ここでは、それらをさらにすすめて、大学院授業の理解度と大学院への満足度の2つに絞って、これを規定する大きな要因にはどのようなものがあり、またそれはどの程度であるか、をより全体的かつ客観的に分析・考察してゆくことにする。

(1) 外国人留学生の授業の理解度の規定要因

大学院の授業に対する留学生の理解度については質問12で、講義、演習、実験という3つの授業形態のそれぞれについて、留学生に授業の理解度を自己評価させている。その結果は既にⅡ-4-(4)で示されているように、回答者全体では授業の80%以上が理解できると答えている者は、講義で45.9%、演習で43.1%、実験で45.5%にものぼり、理解度が50%に満たないと回答した者の割合は、講義、演習、実験いずれも10%程度であるにすぎない。全体として見れば、留学生の自己評価による回答であるために主観的なバイアスがかかり、実際以上の数値になっているとしても、我々の予想を上回る数値である。ところが、これを留学生の出身地域別、専攻分野別などとクロスさせてみると、数値はかなりの程度のばらつきをもって分布していることがわかる。そこで、できるだけ多くの変数を同時に視野に入れつつ、このばらつきの源になっているような要因をみつけ、その大きさを知るために、いいかえれば授業の理解度の要因となる変数を知り、その影響の大きさを知るために、林の数量化理論Ⅰ類による分析を行なうことにする。¹⁾

質問項目にあるように、留学生の授業の理解度は、講義、演習、実験の3つの側面から回答を求められた。ここでは、そのうち、授業の最も基本的な形態であり、文科系、理科系のいずれにも共通して存在する「講義」をとりあげ、講義の理解度の規定要因を分析することにする。説明変数としては、第31表にあるような合計12の変数を採用した。これは内容的にみると、①日本語能力に関するもの（授業を聞く力Q8b、論文を読む力Q8c）、②学問研究上の能力（大学院入試での英語による専攻科目のテストQ7d、最終取得学位）、③生得的属性（年令、性、出身地域）、④学問上のキャリア（専攻分野、留学前の職業、現在所属する大学院の威信²⁾、日本政府奨学金取得の有無）の4つに大別される。以上の変数に関する完全回答サンプルの数は402であった。分析結果は表31にある通りである。重相関係数は0.732とそれほど低くはない。留学生の講義の理解度を規定する要因として最も大きいものは、留学生の日本語の能力である。授業を聞く力はレンジ1.338、偏相関係数0.492、論文を読む力はレンジ0.624、偏相関係数0.262となっており、この2つが要因の第1位と第2位を占めている。これに次いで専攻分野、留学前の職業、課程など留学生のアカデミック・キャリアに関する変数が大きな要因になっている。人文・

注1) 以下分析は全て広島大学・情報処理センターのHITAC M-180でPPSSプログラムパッケージ(Program Packages for Social Sciences)を使用して行なった。

注2) 大学の分類は、東大、京大を国立大学Ⅰ、筑波大、東工大、東京水産大、阪大、神戸大、広島大、九大の国立大学を国立大学Ⅱ、慶応大、明治大、国際キリスト教大、早稲田大、同志社大を私立大学グループとした。

第31表 授業の理解度の規定要因

アイテム	カテゴリー	スコア	レンジ	偏相関係数
日 本 語 能 力 (授業をきく力)	大変よくできる	0.648	1.338	0.493
	一応できる	0.061		
	あまりよくできない	-0.690		
	できない	-0.485		
日 本 語 能 力 (論文を読む力)	大変よくできる	0.088	0.624	0.262
	一応できる	0.113		
	あまりよくできない	-0.003		
	できない	-0.511		
大 学 院 入 試 (英語による専攻科目のテスト)	大変難しかった	-0.113	0.129	0.050
	かなり難しかった	-0.062		
	それほど難しくなかった	0.014		
	試験はなかった	0.016		
大学院の 課 程	修士課程	-0.088	0.408	0.214
	博士課程	0.229		
	研究生その他	-0.179		
留学前に取得した最終学位	学 士	-0.001	0.363	0.150
	修 士	-0.129		
	博 士	-0.018		
	その他	0.235		
年 令	35才以下	-0.012	0.026	0.016
	36才～40才	0.014		
	41才以上	-0.007		
性	男	0.019	0.119	0.061
	女	-0.100		
出 身 地 域	漢字文化圏	0.009	0.286	0.099
	東南・南アジア	-0.055		
	ヨーロッパ	0.171		
	その他の地域	-0.115		
専 攻 分 野	人文科学	0.349	0.591	0.221
	社会科学	0.121		
	理・工・農学	-0.074		
	保 健	-0.242		
	教 育	-0.057		
留学前の職業	無 職	0.040	0.418	0.181
	学 生	-0.215		
	大学・研究職	0.079		
	初等・中等学校教員	0.203		
	公務員	0.048		
	会社員	-0.037		
	その他	0.139		
所 属 大 学 院	国立大学Ⅰ	0.070	0.265	0.135
	国立大学Ⅱ	-0.084		
	私立大学	0.182		
日本政府奨学金	もらっている	-0.020	0.042	0.027
	もらっていない	0.022		
	重相関係数	(ケース数 402)		0.732

社会科学系のより高度な課程で学ぶ者の方が授業に対する理解度が高いようである。これに反して、年齢や性のような純粋に生得的な変数や、日本政府奨学金取得の有無は要因としての影響力は小さい。また、大学院入試での英語による専攻科目のテストも影響力は小さい。

このように、留学生の日本語の能力が講義の理解度の最大要因であることが明らかになったが、因みに、日本語能力に関する2変数（授業を聞く力と論文を読む力）だけで講義の理解度を予測してみると、これだけで重相関係数は0.688となった。これはこの2変数だけでかなりの程度、講義の理解度を説明することができることを示しており、改めて留学生の日本語能力の重要性が認識される。つまり、大学院の授業を外国人留学生がどの程度理解できるかどうかは、授業の内容や方法よりも、どの程度日本語を理解できるかに大きくかかっているといえる。Ⅱ-4-(5)「授業の難しい理由」でも明らかのように、授業を聞くことが「大変できる」と回答している者でもなお、「自己の基礎学力の不足や授業内容の水準が高すぎる」と等をはるかに上回って、「日本語の理解力が不足している」ことを授業が難しい理由の最大のものとして挙げている。たしかに、留学生にとって外国語としての日本語を完全に理解することは極めて大変なことであろう。それにしても、日本語をよくきくことのできる彼らでさえ授業はむづかしいのである。このようにみると、外国人留学生の授業の理解に関する問題は、コトバの問題に集約できそうである。

(2) 外国人留学生の日本の大学院への満足度の規定要因

回答者全体をみる限り、外国人留学生は概して日本での大学院生活に満足しているようである。全体の42.0%が「大変満足」、33.9%が「満足している」と答えている。両者を合すると実に75.9%にもものぼっている。しかし、その数値は回答者の属性によって少なからず異なっている。以下では、外国人留学生の満足度の規定要因を探ってゆくことにする。日本での大学院生活に対する満足度の変数としては、質問項目Q5「あなたは一般的にいって、どの程度現在の大学院に満足していますか。」を採用し、この外的規準変数を第32表にある合計17の説明変数で林の数量化理論Ⅱ類を用いて分析する。

Q5は5つの選択肢のうち一つを選んで回答するようになっているが、そのうち、1.大変満足している、と2.満足している、を合併して新カテゴリーをつくり、残る3.どちらでもない、4.不満である、5.わからない、を合併してもう一つの新カテゴリーをつくり、外的規準変数は2分類のカテゴリーをもつようにした。説明変数の方も、それぞれN・Aを含めてなるべくカテゴリー数が均一になるように合併した。（その結果は第32表参照）。完全回答サンプルは、305になった。

分析の結果は第32表に示す通りである。相関比は0.253と高くないが、レンジ及び偏相関係数によって各要因の大きさをみると、際立って大きな大きな影響力をもつものはみられず、数個の変数がかなり大きな要因として並んでいる。それは、研究テーマの決定方法（レンジ101.43, 偏相関係数0.211, 以下同順）、出身地域（54.16, 0.205）・留学前職業（55.81, 0.189）、日本が留学第一志望国（29.65, 0.199）、指導教授との年間面会数（48.28, 0.202）、日本政府奨学金取得の有無（37.25, 0.243）などであり、これに日本語能力などがつづいている。これらのうち、研究テーマの決定（レンジ101.43, 偏相関係数0.211）、日本が留学希望国であるか否か（レンジ29.65, 偏相関係数0.199）は、アカデミックな研究や学位の問題に関連している。研究テーマの決定は大学院に学ぶすべての学生にとって大きな問題であるが、研究テーマ未決定の外国人留学生のスコアは-81.72と極めて低く、彼らのフラストレーションが高いことを示している。日本が留学第一志望国であるか否かは、学位の問題と直接関連していると

第32表 大学院への満足度の規定要因

アイ テ ム	カ テ ゴ リ ー	ス コ ア	レ ン ジ	偏 相 関 係 数
年 令	35 才以下	13.57	28.83	0.165
	36 才～40 才	6.82		
	41 才以上	-15.26		
性	男	-1.41	8.77	0.047
	女	7.36		
出 身 地 域	漢字文化圏	2.61	54.16	0.205
	東南・南アジア	-29.20		
	ヨーロッパ	24.96		
	その他の地域	3.97		
日 本 語 能 力 (授業をきく力)	大変よくできる	7.65	53.00	0.150
	一応できる	0.48		
	あまりよくできない	0.96		
	できない	-45.35		
滞 日 期 間	1 年未満	5.75	10.44	0.055
	2 年未満	-4.69		
	3 年未満	-1.47		
	5 年未満	4.05		
	5 年以上	-1.48		
専 攻	人文科学	-11.10	32.58	0.137
	社会科学	-16.34		
	理・工・農学	3.78		
	保 健	16.24		
	教 育	10.17		
留 学 前 の 職 業	無 職	13.67	55.81	0.189
	学 生	6.32		
	大学・研究職	-7.54		
	初等・中等学校教員	40.16		
	公務員	-2.75		
	会社員	-15.65		
	その他	-0.06		
日 本 が 第一志望の国	は い	10.79	29.65	0.199
	い い え	-18.86		
現所属大学院を 知っていた	は い	7.86	18.74	0.133
	い い え	-10.87		
研究テーマの 決 定 方 法	自己の学問上の関心	3.52	101.4	0.211
	指導教授の助言	1.22		
	母国政府や大学の要請	19.71		
	未決定	-81.72		
	その他	-19.79		
博士学位取得の 困 難 さ	は い (むずかしい)	-1.77	22.99	0.098
	い い え (むずかしくない)	-10.42		
	わからない	12.57		
母国での日本 学 位 の 評 価	高く評価されている	9.23	32.10	0.141
	ある程度評価されている	2.74		
	それほど評価されていない	-22.87		
	わからない	-6.83		
所 属 大 学 院	国立大学Ⅰ	-5.87	18.02	0.080
	国立大学Ⅱ	-0.36		
	私立大学	12.16		
講義の理解度	40 %以下	2.42	34.94	0.206
	60 %以下	12.27		
	80 %以下	9.17		
	100 %以下	-22.67		
指 導 教 授 と の 面会数 (年間)	10 回以下	-13.00	48.28	0.202
	20 回以下	-6.21		
	50 回以下	8.12		
	100 回以下	35.28		
	101 回以上	3.79		
課 程	修士課程	1.18	15.27	0.077
	博士課程	3.93		
	研究生その他	-11.34		
日本政府奨学金	もらっている	18.08	37.25	0.242
	もらっていない	-19.18		
	相関比	(ケース数 305)		0.253

考えられる。一般に、開発途上国からの留学生は、留学先としてアメリカを希望することが多いが、このことはこれまでアメリカ留学者の数が多く本国でアメリカ帰りの留学生が重要な地位を占めているという事実のほかに、アメリカの Ph.D は比較的短期間に取得できるからでもある。日本では博士号は特に人文・社会科学の領域では大家の域に達しなければ取得できないほど取得が困難であり、日本独特の特異な報賞システムを形成している。そのため欧米の学位授与基準に基づいて給与や昇進システムがつくられている開発途上国からの留学生にとって、日本に留学して学位がとれるかどうかは重大問題となっている。また、指導教授との面会数（レンジ 48.28 偏相関係数 0.202）と授業の理解度（レンジ 34.94, レンジ 0.206）は外国人留学生にたいする研究指導・教育の問題と関係する。指導教授との面会数が多いほど留学生の不満は減少するようである。授業の理解度は日本語能力と直接関連するが、満足度の大きな要因の一つであることは我々の実感からも十分納得できるところである。しかし、逆に、日本語能力の規定力（レンジ 53.00 偏相関係数 0.150）の大きさは、我々の予想より小さい。大学院への満足度についてみるかぎり、留学生の日本語能力は想像するほど決定的な要因とはなっていないようである。彼らにとっては、日本語があまりよくできないことは、否定的な要因の一つであるにすぎない。次に、日本政府奨学金取得の有無が外国人留学生の満足度の規定要因の主要な一つとなっている（レンジ 37.25, 偏相関係数 0.242）のは逆の意味で興味深い。というのは、現在の日本政府の奨学金は他の先進欧米諸国の奨学金よりも高額で、かつ日本で生活するには十分な額であり、このような経済的要因の与える影響力の大きさが伺われるのである。最後に出身地域も満足度を規定する主要な要因である（レンジ 54.16, 偏相関係数 0.205）。欧米からの留学生のスコアが高いのに対して、とくに東南・南アジアからの留学生のスコアが低い。経済的、社会的、文化的、それに教育そのものの面でもこれらの国との関係が深まってゆくであろうことを考えると、この結果は深い問題を内包しているように思える。

Ⅳ 留学生の自由記述意見集

ま え が き

「日本の大学院教育に関する留学生の意見調査」では、調査項目とは別に、それぞれの回答者の自由な意見を聞くため、とくに欄を設けて、次のように、意見や提言の記述を求めた。

「留学生として日本の大学院で学んだ経験にもとづき、日本の大学教育、大学教授、大学行政、日本人学生等について、あなたのご意見・提案を自由にお書き下さい。（中国語、英語、フランス語、ドイツ語、日本語、韓国語、スペイン語のいずれかでお書き下さい）」。

この依頼に対して、調査表回答者の全体のうち62%にあたる303名が、さまざまな意見、提案、所感を寄せてくれた。きわめて熱心に応えてくれたとみることができる。記述にあたって使われた言語の内訳は、英語126名、日本語110名、中国語34名、韓国語21名、スペイン語11名、フランス語1名である。さまざまな言語によって述べられた中味もまた、じつに多岐にわたる。

日本の教育文化の対外交流、留学生受け入れの現在の実像を把握し、未来の姿を模索する手だての一つとして、調査表の項目ごとの統計的な吟味とともに、これら留学生たちのなまの声を聞き、検討することも、貴重な材料となり方途となる。そのため、この報告書では、寄せられた留学生たちの意見の約55%にあたる168点をここに収録することにした。

日本語による記述の分は、日本語学習の成果の程度もあわせてうかがう意味で、原則として修正を施すことなく、原文のまま掲げることにした。なお、日本語以外の言語による記述の分も含めて、かつて教育を受け、あるいは現に教育を受けつつある所属学校名を挙げているものも少なからずあるが、ここに収めるにあたっては、原則として、それぞれの大学名は省略した。

同一人の記述の文章のなかでは、当然、さまざまに異なった種類の問題にも及ぶ場合が多いので、全体をすっきりと分類することはむずかしいし、あまり意味もない。だが、この意見集を参看するにあたっての便宜を考え、それぞれの記述文のなかで、最も重点的に触れられていると思われる問題ごとに分け、全体を、かりに五つに分類して配列してみた。もちろん、これは一応のごく大まかなめやすでしかない。分類相互のあいだで、部分的に重なりあったり、はっきりと区分けしきれない問題もあることはいうまでもない。

分類は次のとおりである。

- I 留学生の受け入れについて（留学生に対する日本および日本人の対応、日本の教育文化交流、国際化への可能性、民族差別と日本人の対外観、ほか）
- II 留学に関する情報提供の問題について（来日前および滞日中の情報・PRなど）
- III 日本語および日本語学習について（外国語教育の問題も含む）
- IV 日本の大学、教育、教員、学生について（学校制度、教育の方法、施設・設備、学位、ほか）
- V 留学生からの提言（留学生への施策、制度組織上の改善、学費、大学への配置、住まい、ほか）

なお、それぞれの分類のなかでの配列は順不同である。また、末尾のカッコ内に、記述者の所属する国立・私立大学の別、年齢、性別、国籍の地域名、専攻分野などを注記した。

（文責・石附 実）

1 留学生の受け入れについて

- 〔1〕私は自分の研究テーマにきわめて満足しており、学科のメンバーみんなとたいへん仲良くなることができた。また、日本の人びとや日本文化から多くのことを学ぶこともできた。（原文＝英語）

（国立，20代，男，中南米 2年）

- 〔2〕それぞれの国は、長年にわたる試行を重ねて、その社会にふさわしい教育の制度を作りあげてきており、その制度は当の社会に影響を及ぼすすべての要因を内包しているものである。日本の教育制度は、わが国のそれや大多数の国の場合と非常に異なるものである。その違いは、社会の下部構造にあるというよりも、社会を構成する人びとの社会関係にあり、その社会関係は、全体としての社会的営為のひとつの反映にほかならない。だから、制度を変えるということは容易ではなく、実際のでもない。我々の提案は自分達の経験に基づく「偏見」をもったものであろうし、また、自分たちにとって最も都合のよいものとなるであろうから。我々は何か提案をする立場にはない。留学生問題に対しても、示唆することはできない。日本はこの調査結果などから独自に最善の努力を尽すべきである。留学生の好みにあわせて、その教育制度を変える必要はない。そうではなくて我々の方こそが日本の教育制度に合わせなければならないのである。けっきょく我々は「ガイジン」なのだから。（原文＝英語）

（国立，20代，女，東南・南アジア，工学 1年）

- 〔3〕国際化とは、決して大量の留学生を送りだしておみやげみたいに学位を与えることではない。けれどもハンディをつけるために国立大学（学費がやすいので）の入学試験を簡易化するのは必要ではないかという気がします。勿論、簡易化に伴って卒業生のレベルが下がらないようにすることも大事だと思います。現行のいわゆる研究生制度の下で、郷里を離れたばかりの留学生が新しい環境に慣れてないうちに、また翌年の入学試験を心配することは、本当に精神面の圧力は言うまでもなく、海外生活体験をもっている先生方にはよくわかるでしょう。

日本の学位は母国に評価されていると言っても、学校によって評価の差がかなり異って来ます。認められていない学校の学位もあります。勿論、アメリカの場合にも同じですが、真面目な学生はどんどん欧米の厳しい学校へ流れこんでしまったのは事実であります。

発展途上国から先進国へ留学してる私としては、日本を愛する気持ちで、これから、日本の高等教育が理想主義の国際化の道を歩むべきだと思います。（原文＝日本語）

（私立，20代，男，台湾，中国，工学 2年）

- 〔4〕親日の気持ちで、特に東南アジア諸国からやって来た諸留学生は、日本での留学生生活を経た後には本国へ帰り、それぞれの分野で活躍するエリートたちばかりと思われるだけに、日本政府としては優遇すべき所は優遇し、厳格にすべき所は厳しくし、できるだけ優れた勉学の環境を与えれば、例え祖国から離れたさびしさと不便を感じても一生懸命勉強に専念し、留学中も沢山の日本人の友達を持ち、より一層の文化交流ができ、本当の意味の留学目的が達成されると思います。日本にとっても、いろんな面においてプラスになります。しかし今まで留学生の例をみても、その殆どが親日の気持ちで来日するにもかかわらず、帰国する際は反日の気持ちを持つ人が大多数と思われる。（原文＝日本語）

(私立, 20代, 男, 台湾, 社会 5年)

〔5〕 1 教育施設, 研究資料などに富んでいますから, 研究をするのにはなんの不便もない実情である。

2 大学の教育は学生自身が実験を遂行し, ここで得られた結果をもって先生と討論するのがまことの大学教育だとおもいます。さすが現在べんきょうしている大学でも, こんなふうに研究させていますから, たいへん気に入ります。

3 大学教授なら文字どおりしょうらいの研究者をそだてるひとですから, まず教授自身の品位, 研究実績が重要なのです。うちの教授はよるおそくまで研究をやるのをみて, 私は日本の発展は外在的, 地理的条件にあるんじゃない, 内在的な労力による結果だとおもいます。

4 日本の学生は自分のことに対しては, せっせと研究したりはたいたりするが, よその人に対しては排他的な傾向が強いとおもいます。それもそれなりの長所はあるが, ちょっとほしいのは, なさけある人間性である。

5 べんきょう以外にまなんだことは, 今日の日本人は自分の仕事に熱中するひとだといえますね。また韓国人に対する態度もきいたことほどきびしくないのです。この事実は十年たったら解消(対韓・対日感情)されるきざしをもっているとおもいます。とにかくわるいめんよりよい面がおおいのが今日の日本です。(原文=日本語)

(国立, 30代, 男, 韓国, 農学 1年)

〔6〕 私は約6年前留学にまいり, 研究生1年, 修士課程2年, 博士課程3年を終えてまもなく帰国しようとするものであります。特に, 日本文部省の奨学生でありましたので経済的支障はまったくありませんでしたし, 研究もいま考えてみればかなり順調じゃなかったかと, かつてに思っております。ふりかえってみれば, 留學生活の初期, 私個人にかぎると思いますが, 文化的衝撃といいますか, とにかく環境のちがいで精神的にまいりました。また, 日本留学のため国でいくつかの試験を経て, これからはおちついて勉強と研究ができると思って日本にきたら, まず1年間修士の入試勉強をやりなさいということでした。試験科目に第2外国語(私の場合ドイツ語)も勉強しなければならないし, 専門科目も学部で授業をうけたことがないものもありました。充分レベルの高い広範囲の講義を受けることができるぐらいなら, なぜ日本に留学にくるのでしょうか? もちろん日本の大学側からみれば, 留学生自身に問題があり選別しなければならないといった考えでしょう。入試試験準備にくるしいからとにかく入れてくれということだけではありません。すこしでも留学生の立場と留学生の教育という見地からみれば, 入試なしに入学させて, 国でならわなかったいろんな授業を充分受けるようにしたらよいと思います。修士の期間は3年ぐらいでもよいでしょう。

学生をせめて, はっぱかけることだけが留学生教育の全部ではないように思っております。むしろ, 文化的なショックなどを自分自身が吸収して自信をもてるまで, いろんな環境を作ってくれることを私はお願いする次第であります。もちろん, 留学生と接する日本の方は忍耐が必要になるでしょう。(原文=日本語)

(国立, 30代, 男, 韓国, 工学 6年)

〔7〕 日本の大学教育は概して「きびしさ」に欠けるという印象を受けた。試験やレポート提出の頻度を増やしてはどうか。大学教授については, ユニークな人物が多くて興味深い。ただもう少し学生とじかにふれ合う機会が多ければ, と思った。助教授, 講師, 助手等の教官の方々とは常に接することが多く, 公私にわたって御世話になっている方もいる。外国の教官に比べて面倒見が良いと言えよう。日本の学生は一般的におとなしく, 仲間以外の人間と容易にうちと

けることが難しい、という者が多いのではないかという気がする。留学生に対して一種の「遠慮」みたいなものがあるようだ。私の場合日本語に不自由しないので、日本人学生との交流はスムーズに行っていたが、それでも何か気をつかわれ過ぎているな、という感じがした。留学生を研究室の「窓際族」にしないような配慮を関係者の方々に望む。（原文＝日本語）

（国立，30代，男，中南米，工学 3年）

- 〔8〕日本での留学生活は私にとっては、物質的な問題はないですけれども、精神の面にはいろいろな問題があります。たとえば、教授そして日本人学生とのつきあいは、常に私を悩ませました。教授というのは、文字通りに学問上の指導しかしてくれないのですが、私が接している日本人の先生たちが殆ど積極的に指導してくれなかったのです。留学生にとっては、やっぱり熱心に指導してくれる先生が一番ほしいのだと思います。それに日本人の友達を沢山つくりたいと思っていたのに、なかなか難しい問題となってがっかりしました。日本人学生はあまり外人を信用してくれないらしいですね。いくらかつき合っても、親しくしてくれない状態にあります。以上の二つの原因で、私はさびしい、悲しいと感じております。（原文＝日本語）

（国立，20代，女，台湾・中国，人文 1年）

- 〔9〕先づ大学側の受け入れ体制がととのっていないことです。入学する前に一応の日本語の能力テストは行われていますが、入学後の専門科目に則した補充教育が考慮されていないことです。私の場合はそんな心配の無い程、日本語には自信がありますが、一般の留学生は相当に困惑を感じているようです。

大学において教授と学生の間は大抵うまくいっていますが行政方面でも初めて新しい国、新しい環境に入ってくる外国人に対して、細かい配慮があってもよいと思う。例えば学則や環境等について、話し合いの時間がほしいと思う。（原文＝日本語）

（国立，50代，男，台湾・中国，人文 4年）

- 〔10〕個人的になんらの意見を書くことはない。と言う事は、研究室の全ての人から良くされているからである。唯、日本人は外国人留学生を甘やかしすぎるのがみられる。日本人の大学院生と同じように留学生をあつかうべきと思う。日本へ留学しに来るのであるからそれくらいに“もまれて”も耐えるだけの心がまえを留学生はもっていると思う。（原文＝日本語）

（国立，40代，男，ヨーロッパ，保健 4年）

- 〔11〕母国にくらべて、実験・施設等の、研究に必要な設備が大変良い事と、参考文献等の資料がどこでも得られる事等、研究し易いふんいきです。その上、世界的な学者達が多くて非常に参考になります。

ただ、私の経験から判断して見るとほとんどが別々に研究を行って、互いの協力（同じ分野或はちょっとちがう分野を含む）があんまり行なわれていないので、アメリカ或はヨーロッパに比べてちょっと損（学問上）ではないかという気がします。

又、留学生としての願いでは、まだ留学生を受け入れた歴史の浅さから来るのか分かりませんが、学校の関係者は勿論のこと、一般市民達の留学生に対する理解心と協力がもうちょっとあってほしいなあと感じることが時々あります。（原文＝日本語）

（国立，30代，男，韓国，工学 6年）

- 〔12〕こういうことを書く機会をくださってどうもありがとうございます。私は先進国日本に来て学校の専攻ばかりじゃなくて、すぐれている日本の長所も学んでいます。何よりもいろいろ似てる点があまりにも多いから、ある側面から見れば顔色がちがう西洋に留学して差別感を感じることよりは、日本が何倍かよいと思います。学校へ行っても教授や職員や学生達は親切です。

たまには疎外感をあじわう時もありますけど、その時は、逆に私の方からもっと積極的に集団の中にはいりこむんですから、心配することはないんです。

（特に韓国と日本について）

日本の学生達は今でもどう思っているかはっきりしないんですけど、私は、日本と韓国は地理的にも歴史的にもあらゆる面から密接な関係がありますから、もっと関心を持って学ぶべきであります。（原文＝日本語）

（私立、30代、男、韓国、人文 3年）

〔13〕卒直に言うと、日本人にとっては外人とは白人であって、絶対に黄色人種でないと言う感じを受ける。白人に対して身を低くし、白くない発展途上国の人達に対しては反対である。いい設備、いい環境だからありがたく思えという雰囲気、東南アジアなどの留学生はほとんどみんな感じる。このような感情が、大学院に入っても感じられるのは、全く残念である。

要するに私たちは、一人の人間として扱われたい次第です。差別なき環境がほしいのです。生活する上では、経済的な問題は重要だが、節約して、三万五千円あれば一ヶ月食べていけます。住む問題ありません。私たちがほしいのは、金よりむしろみなさんの心なのです。

具体的に言えば、外国との親善、友好の正しいやり方をみんな一緒に考えなおす必要があるかのように見えます。多額の国費奨学金は、問題の解決にはならないのです。助手の先生の給料、大学院育英会奨学金を考えると、この面も大きな差別が存在するように思われる。

心をもって、差別をなくしましょう！（原文＝日本語）

（国立、20代、男、ヨーロッパ、工学 6年）

〔14〕日本人の教授は、言語の問題のため、外国人留学生と接するのを恐れている。ひとたび言葉の問題がなくなると、彼らは大変親切である（しばしば、日本人の学生に対してよりも親切すぎる）。

日本の学問の質が海外に知られていないのは、私の考えでは、次のような理由による。言語の問題（英語力の欠如）、文部省の海外渡航許可制限、海外の学界との接触（手紙、データ交換）の少なさ、など。

また、教授は自分の研究室を卒業する学生のため、職をさがそうとすると、外国企業との個人的コンタクトを欠いているように思われる。（原文＝英語）

（国立、20代、男、ヨーロッパ、工学 3年）

〔15〕1 日本の大学は、全ての外人留学生を収容しうる寮を建設すべきである。

2 日本人学生は、自己中心的で利己主義である。彼らは、お互いどうしても、また留学生に対しても、もっと協力的であるべきだ。

3 日本人学生は、外国について、きわめて乏しい知識しかもちあわせていない。彼らは、外国について、もっともっと教えられるべきである。

4 日本人は、西洋人には劣等感を、東洋人には優越感を抱いている。この態度は改められるべきである。国際的なことからにおいては、全ての人間が平等に取り扱われるべきである。

5 日本人は、外国語とくに英語を勉強すべきである。（原文＝英語）

（国立、30代、男、東南・南アジア、理学 4年）

〔16〕1 大学のカリキュラムは各学年毎に、詳しく説明されるべきである。オリエンテーションの時間が無意味なこともしばしばで、学生は何をなすべきかわからない。

2 社会科学の博士学位は外国人留学生にはあまりにも閉じられている。博士課程は単なる最低限の必要条件（単位）の獲得だけでなく、「学位」の獲得をも含むものでなければならない

い。

3 初めて日本に来た留学生にとって重要と思うのは、第一には率直な会話が常に交わされること、第二は少なくとも大学くらいは、「本音」と「建前」を使いわけないことである。集まって酒の力を借りなくても、本来的な人間の交流はできるはずである。(原文＝英語)

(国立、40代、男、東南・南アジア、教育 5年)

[17]いつも気になるのは、外国人留学生、とくに東南アジアから来た学生に対する日本人の馬鹿げた態度である。日本の人びとが読んでいる東南アジアに関する書物・情報は、間違ったものが多いようである。日本人のほとんどは、東南アジアの人びとがまだジャングルの掘立小屋に住んでいると思っている。また、ヨーロッパ人がその地域を占領し植民地化するまで、石器時代の生活水準にあったと思っている人もいる。こんなことはもう沢山である。

私は、日本人指導教官の私に対する賢明な指導に関する限り、日本人が好きである。また、クラスメートも好きである。しかし、私に無知な質問をする連中は別である。(原文＝英語)

(国立、30代、男、東南・南アジア、理学 6年)

[18]現在、私の学科のあらゆる点に満足している。でも一つだけいいたいことは、日本人の学生や教授と自由に話したいということである。われわれ留学生は、いつもホームシックの状態にあり、お互いに暖かい気持をかよわせたいと願っている。一般に、日本人は外国人と話すとき、壁を作って話しているように思われる。(原文＝英語)

(国立、20代、女、台湾・中国 2年)

[19]① 発展途上国(とくにアジア)からの留学生は、日本人から見くだされているか、よくて無視されているという感じを受ける。欧米人に対するのとは逆である。こういうことが、国際理解という点で有害な結果をもたらす。これは日本人・外国人双方の責任であり、おそらく、文化や歴史についての相互理解が不足しているために起っている。互いにもっと寛容になるべきである。

② 日本の官僚は余りにも柔軟性に欠けているのではないか。たとえば、大学を変える必要がある時など、彼らはあまりにも感情的である。

③ この大学の諸設備全般には満足している。ただ留学前により多くの情報が与えられるべきであり、そうすれば私たちは自分の研究のために大学を選ぶにあたって役に立つだろう。日本の大学について無知な多くの学生は、一定の学部や指導教官にしばられ、所属を変更することは殆ど不可能なのではないだろうか。

④ 学問的な水準において、日本は多くの分野ですぐれていると思う。留学生だからといって水準を下げて教えられることを私は望まない。また、言語の問題が留学生から取り除かれるよう、もっと多くの便宜が与えられることを希望する。(原文＝英語)

(国立、30代、女、東南・南アジア、人文 1年)

[20]1 日本の大学の事務職員は、学生を劣等者として待遇する傾向がある。私は外国人なので、このひどい扱いのいくらかは避けうるけれども、そう感じる。大学の管理者側がすべての決定権を握り、学生たちは受身で、大学行政には無関心である。管理者や事務職員は、自分たちがあたかも社会的に高い地位にいるような先入観をもち、時に高慢で、学生に対する態度も威圧的なことがしばしばだ。

2 私は、すばらしい器量をもつこの大学の学生を賞賛したい。ただ授業中の討議は、率直に意見を交換しあう 開放的なものではない。学生たちは、教授に対してあからさまに意見も言わない。新しい考えや考え方が大学という環境の中で養われるべきものである。とするなら

ば、このことは、重大な欠点であると思う。(原文=英語)

(私立, 20代, 男, 北米, 人文 3年)

- [21]日本の大学では、留学生を区別・差別しないで遇するという努力がない。大学の教員にも職員にも学生達にも、そうした努力がみられない。恐らく今後もそれは不可能なことであろう。本当に親密な日本人の友人をもつことさえ困難である。一般的に、日本人は、われわれをあくまでガイジン扱いにする。公共の場(駅、電車など)でのガイジン扱いが、不幸にも、大学でも、みられるのである。ガイジンのすることは奇妙か「おもしろい」と見るばかりで、まじめにそれ自体の評価をしようとはしてくれない。

留学生を受け入れることは、とくにこの大学でも **TATEMAE** みたいなものであって、決して **HONNE** ではない。(原文=英語)

(国立, 30代, 男, 中南米, 社会 3年)

- [22]外国人留学生は、日本社会で孤独感を味わっている。ガイジンという言葉は、私たちの気分を害する。とくに、子どもたちが、ガイジン、ガイジンと言う時には、ひどい気持ちになる。私は、母国の政府の期待通り、日本で研究を続け、学位を取らなければならない。

私は、親切で「国際化された」教授に会えて、非常に幸運である。(数少ない幸せに恵まれた外国人留学生の1人)。もし私が、1人の友人もおらず、教授陣とのコミュニケーションもなく、学問的な充足感もなかったら、自分の日本滞在をひどいものと述べていただろう。(原文=英語)

(国立, 20代, 女, 東南・南アジア, 社会 3年)

- [23]私のような発展途上国からの留学生は、学位をとるという個人的な目標ではなく、母国の役に立つ勉強をしたいという責任感を持って日本へやってきている。もし、日本での教育が私たちの志に役立たないとわかれば、不満もまた大きい。この点は、今後の方向を見きわめる上から、慎重に考えられるべき問題だと思う。教授陣や事務職員たちは、日本の社会を反映するものである。私がなぜそんなことを言い出したか、だいたいお察しいただけるかと思う。(原文=英語)

(国立, 30代, 男, アフリカ, 農学 4年)

- [24]私は回教徒である。自分以外にも回教国あるいは発展途上国の回教徒の少数民族から日本に来ている大学院生もたくさん知っている。

私の経験によれば、教授や担当教官たちとの会やパーティーでも、日本人とは非常に異なる私たち自身の性格や、生活様式は、無視される。たとえば、アルコール類を飲むこと、ダンスをすること、禁止された肉を食べることなどは、他の国からの留学生の場合には受け入れられても、回教徒の学生には、受け入れられない。それに、最近の出来事や社会問題について話合っている時、教授、学生、研究助手は、私たち回教国の主義や文明に基づく考え方を無視する一方、他の国の留学生とくにアメリカ人の留学生に対しては、多大の関心と敬意を払う。私は、開発途上国とか先進国とかの基準によって扱われるのに同意できない。どんな国でも「歴史的に」異なった条件をもっている。互いの問題を解決するため協力すべきだと信じる。(原文=英語)

(国立, 30代, 男, アフリカ, 工学 4年)

- [25]私の意見は、日本の教育に非常に批判的であり、それにもかかわらず、当地で学ぶことを継続したいと思うという点で矛盾するように思えるかもしれない。というのは、私は大学の外で、より多くのことを学べるということを発見したからである。

文部省の奨学金計画は、日本の国際関係を改善するのが目的であるが、たいていその結果は

日本への不評に終っている。金銭面だけはすばらしいが、他の点では我々（外人留学生）は、文部省によって無視されている。O大学は適切な日本語教育をやっていない。文部省は、O大学における日本語教育の水準について、継続的にチェックすべきであり、日本語を学ぶのにより適した他の教育機関をえらべるチャンスを与えるべきである。学生寮は、学生自身が居住環境を改善するために、団結するほど、実にひどいものだった。諸大学の水準と環境には大きな差があるが、文部省は、教官連によるひどい取り扱いや冷淡な態度に悩まされているかもしれない学生に、金の面をのぞいては何の援助もしていない。どの教授に学生を割り当てるかという点では、もっとずっと大きな柔軟性が必要である。すべてのレベルに応じた特別の日本語教育が全ての大学でなされるべきである。（私の大学のように、上級だけというのではなく。）文部省は、省内に、学生がアドヴァイスをうけたり、所属する大学当局に知られる心配もなしに苦情を申し立てたりできる場所を作るべきである。文部省は、奨学金を受ける学生が在学する大学の水準と活動内容について、もっと詳しい調査をし続けるべきである。学生を不適切に取り扱っていることがわかった教授に対しては、それ以上学生を割り当てることも、（それから、当然、それにともなう、文部省の研究資金も）停止されるべきである。もし、これらの条件が、改善されたならば、どうやってでも他の人にも、当地で学ぶことをすすめるであろう。（原文＝英語）

（国立、20代、女、オセアニア、理学 3年）

〔26〕日本の大学の水準は、多くの先進国とくらべて高いと思う。しかし、国際化はあまり進んでいない。専攻の課題よりも言語の方に気をとられて、知識があまり身につかず、不必要な時間とお金が使われることとなる。同時にこのことが、留学生の間に誤解や悪感情をうむことになる。

教授や他のティーチングスタッフは、一般に学問的にも社会的にもレベルが高いが、発展途上国に対する理解は限られ、狭いものである。とくに事務局の人びと（留学生担当の事務員は別として）は、親切であるけれども外国に対する正しい理解をほとんどもっていない。だから彼らの態度は無意識のうちに留学生の感情を刺激することになるのである。

留学生にとっては、次のような方法がとられるとありがたい。

① 博士号を得るための期間を、学問的水準を落とさないようにして、短かくするか、統一してほしい。（他の発展途上国の大学の状況に応じて） ② 発展途上国からきている学生に教育をし、学位を与える際、それらの国の本当の状況を考慮してほしい。 ③ 日本の大学（大学内の人々を含む）の雰囲気と環境の国際化をはかること。（原文＝英語）

（国立、30代、男、東南・南アジア、農学 3年）

〔27〕1) 日本の大学院は世界でももっとも進んでいて、活発な活動を展開している。実用的な問題と重要な相互協力をおこなっている。日本の大学院制度は非常に効率のよいすぐれたものである。 2) 自然科学の分野のスタッフは、一般的にその分野のトップレベルにあり、権威者である。 3) 事務スタッフも非常に有能で親切である。 4) 学生や同僚は、気むずかしい性格で通常あまり友好的でない。しかし、他の大学での私の経験からいえば、どの国でも有名大学の学生は似たようなものである。そうしたもののだろう。

個人的な意見であるが、この大学（東京の国立有名大学）の留学生の国別分布を分析してみると、何かが間違っていることがわかる。日本の高等教育の未来のために、また長いサイクルでみた場合の西欧諸国との経済的ならびに政治的関係にとって、思わしくないものがあると、我々はある。アジアからの非常に多くの学生数（その中の半分以上は韓国と台湾からきている）

と、西欧社会からのごく少数の学生数との間にアンバランスがある。そろそろ教育関係当局は、この問題を深く分析し、優秀な西欧の学生をひきつけるよう、努力しなければならない。（原文＝英語）

（国立，30代，男，中南米，工学 3年）

〔28〕日本という国は他国との貿易によって、たくさんお金をもうけており、その貿易相手国から貿易の不均衡について、多くの苦情を聞かされるようになってきている。日本政府は、これ以上の苦情をもちこまれないよう、日本で学ぶ留学生をたくさん受け入れることによってそれを押さえようと意図してきた。このことは、留学生が日本について学び、そしてまたなぜ日本が貿易を拡大し、国内経済を発展させることに成功してきたかを理解するという点では良いことである。

しかし、この目的に見あった十分な教育計画が用意されていない。そのため、留学生は次のような点で失望することになる。日本語の訓練不足、英語や日本語の書物、英語の雑誌が十分に手にはいらない等々……。

日本へ来る前、文部省への提出書類に書いた研究課題と非常に異なる専門分野を専攻する教授を、なぜ文部省が自分の指導教官として選んだのかも疑問に思っている。

留学生を指導をする教授は、英語をマスターしているのが望ましいと思う。日本での研究生活の最初のころは、英語でコミュニケーションできることが必要とされる。もし教授たちが英語を話せなかったら、留学生とどのようにして意志を疎通しあえるというのだろうか。より良い、ひんぱんなコミュニケーションこそが、良い人間関係を生み出す条件となる。

私はこの国が好きだし、この国の人びとも好きだ。一般的に言って、彼らは信頼できる。しかし、私の学問活動においては失望し、満足しえないことが多い。私は母国の人びとに、日本や日本人のことを学問的な見地から伝えたいと思う。しかし私の国はまだ発展途上国として扱われているので、日本人が我が国の諸問題を「先進国」の指導的な立場からではなく、お互いの国についてのより積極的な理解を築くという観点から理解に努めるよう望みたい。（原文＝英語）

（国立，30代，男，東南・南アジア，社会 3年）

〔29〕大学の内外で、「物珍しい風変わりなやつ」というふうに日本人からみられるのをいらだたしく思うことがある。国立大学に学ばいわゆる“エリート”から、そのように扱われると、そのいらだちは一層大きくなる。数年前日本で「国際人たれ」というスローガンがはやったが、そのとおりである。この国では、みんなが国際的なセンスをもつことが大切である。このことを教育者（そして学生）から始めるべきである。最善の文化交流は、お互いの国のユニークさの強調よりも、類似性の中から始まるということを忘れないでおきたい。（原文＝英語）

（国立，30代，男，北米，人文 2年）

〔30〕私にとって主な、そして唯一の問題は、言語である。留学生がこの重荷から解放され、本来の学問的探求により専念できるよう、何らかの方策がとられるべきである。言葉の問題ゆえに私の研究の能率はずっと60%くらいにおちていた。言いかえると、私は日本語という障壁と、個人的な努力の不足のために、自分の考えを自由に言いあらわすことに不自由を感じている。そのため、指導教授に私の価値や能力をよく知らせることができないでいる。

実験室では、研究をする際の標準的な方法というものがない——いつも、どうすればよいかを誰かに聞かなければならない。

現在の状況はもっと検討する必要がある。現行制度は、学部外国人教師がいないなど、非

国際的で、日本的な制度だといえる。(原文=英語)

(国立, 30代, 男, 東南・南アジア, 工学 2年)

- [31]① T大学, K大学では学生の質が高く, 教授も教育熱心である。しかし, その他の大学の教育課程については, 私はあまりはっきりしないけれども, 学生の教育水準は私の母国に及ばないようだ。② 教授の研究上の指導や助言は親切でしっかりしており, 私は心から感謝している。③ 事務職員も親切といえる。④ 日本人学生は大体において大変親切だし, よく手助けしてくれる(例外もあるが)。⑤ 日本人は白人を崇拝し, 反対に, 東南アジア諸国(黄色人種)の人間に対して, わずかながら軽視する感じがあるようだ。⑥ 学校の実験設備は大変りっぱである。多くのものは, 以前私の母国の大学では購入できなかったものだ。

(原文=中国語)

(国立, 30代, 男, 台湾, 工学 4年)

- [32]留学生は祖国を離れ日本にやって来て, 食べ物や住まいの不便ばかりでなく, 言葉の障害にも堪えねばならず, 心身両面で不利な状態におかれている。しかも, 来日後には大変な失望感を味わうことが多い。すなわち, 教授は大変忙しく, 学生と意見を交わす時間もなく, 助教授もまったく無関心といった具合である。また, レポートを書く時など, 日本人の学生ですすんで援助してくれる者もなかった。「東京の人間はつめたい」と聞かすが, これは大体あたっているようであり, まったく無関心どころか, 台湾あるいは韓国からの留学生に対しては差別感がある。

私はもともとT大学の女子学生用の寮に引っ越したいと思っていたのだが, 寮のある日本人学生はそれが日本国民の税金を使って建てられたものであり, 留学生は税金を払っていないのだから住まわせるべきではないと考えている, という。こんな考えがまかり通るなら, 日本政府は留学生を受け入れない方がよかろう。私はかつて台湾の大学で学んでいた時も大学の女子寮に住んでいて, 8人の学友が1室にいた。私たちのルームメイトの中にはフィンランドから来ていた人がいたが, みんな仲よく交際し, 本では学べない多くのことを学ぶこともできた。日本は島国だが, 台湾はもっと小さな島国である。しかし, 当時われわれは外国人学生を排斥する気持はまったくなかった。

要するに日本政府は留学生を控え目に受け入れ, 留学生を「国際的な友好親善」の心をそなえた大学あるいは研究室に分配し, 留学生が留学後に反日感情をもつようなことにならないよう, 留意すべきことを願う。(原文=中国語)

(国立, 30代, 女, 台湾・中国, 農学 4年)

- [33]1) 日本人は, 一般に, 欧米人に対する態度とアジア人あるいは黒人に対する態度が同じではない。白人は宴会でも大いに語り, その場の主人公となり, 人びとはみな彼の美しい英語にうっとりとして聴き入る。しかし, 黄色人種や黒人の場合にはどうであろうか。けっして宴会の中心にはならないであろうし, 他の人たちもすすんで彼に接近することはない。これは白人の「人気」であろうが, 差別感も多く含まれている。日本人の西洋人崇拝の気持は一般によく見かけられる。

2) 教科書は大部分英語で書かれており, 英語の勉強には良かろう。しかし, われわれは国を離れて「世界的に有名な」ジャパンに来たことを分っていただきたい。その目的は日本文化, 日本語, 風俗を知るためであるが, 結果的に見れば失望する点もあった。なぜなら, 日本人が重視するのは英語, 英語であり, 英語のレベルが高ければ, 「レベルが高い」ということになるからである。日本で英語を学んでも根本的に進歩は遅く, また発音もよく分らないし, 倍の

努力をしても半分の効果しかない。それからまた、日本語の進歩も遅い。英語を学ぶならアメリカへ行けばよい。なにも苦勞して日本に来ることはない。われわれが研究したいのは、母国と地理的に接近している日本のことであるということを知って欲しい。私は来日前、留学の第一希望国は日本であった。しかし、日本に来てからは、日本が西洋崇拜であることを見るにつけ、アメリカに行かなかったことを後悔するようになった。あなた方日本人が自らの文化を大切に思わないなら、なぜわれわれも多くの苦勞をして日本に来て研究する必要があるのか。昔の言葉の中に「君ミズカラヲ重ンズレバ、人必ズ之ヲ重ンズ、君ミズカラを悔レバ、人必ズ之ヲ悔ル」とあるが、道理はこの中に言い表わされている。

以上書いて来たけれども、私はやはり日本人の精神力、民族の団結、あらゆる事を努力して克服する力は非常に大きな潜在力の1つであると考えており、感服している。あなた方がこの精神的力を永遠に持ち続け、西洋崇拜の気持ちに流されることのないよう希望し、日本が世界の大国となるよう祈っている。(原文=中国語)

(国立、20代、女、台湾、教育 4年)

[34]日本人は、一般的に言って、礼儀正しいがかなり排外的である。また、日本語そのものが意味が不明確で、使い方の複雑なところが多い(外国人にとって)、だから、外国人留学生はいつも、たいへん多くの礼儀上言語上の誤まりをおかしており、なんとなく日本人に悪い印象を与えながら、自分自身では気付かず、誤解やみぞをつくっているのかもしれない。

日本の大学では研究活動が積極的に進められ、どんどん発展している。しかし、しばしば欧米崇拜のかたよった考え方が見いだされる。日本はすでに、物的にも人的等にも、すぐれた条件を備えており、すぐれた研究を行なうことが出来るのであって、欧米が日本よりすぐれていると考えることは誤りである。

大学教授は、大学の管理運営や学外との関係に多く時間をとりすぎ、研究活動や学生・後進の指導は手薄になっている。

日本人学生の大部分の人は親切であるが、なかには、留学生に対して、初め好奇心を抱きながら、その後、何かを競う場面ではきわめて排斥的な気持ちを表わす人もいる。(原文=中国語)

(国立、30代、男、台湾・中国、保健 2ヶ月)

[35]留学の目的は単に専門知識を獲得することだけではないと思う。日本人の生活様式や行動様式などは、単に教科書や書物の上からだけでは知ることが出来ず、実際に広く日本人と接触したのちに、自分の体験を通じて獲得しなければなるまい。だから、私は、日頃日本人とさまざまなつき合いをすることが、学校での専門知識のやりとり以上に、大切だと思う。学校で学ばきまりきった知識は、たとえ留学しなくとも本さえあれば、自分の家でも国内でも獲得しうるものである。

しかし、現在の留学政策はむしろ、もっぱら学術交流や専門知識の伝播を強調し、国を異にする人間の心の交流を基本的に無視したり、あるいは意図的に軽視したりしている。このような異民族間の心の交流や疎通を欠いているため、多くの留日学生は一旦学業を修めて帰国すれば、すぐに正真正銘の反日派になってしまうのであり、このことは本来の留学目的とは大いに趣きを異にするものである。したがって、私がここで心から訴えたいことは、お互いにこのような道理にかなわない先入観を棄て、胸襟を開いて交流し、そこから真の理解を生み、人類の平和のための種を播こうということです。(原文=中国語)

(国立、20代、男、台湾・中国、社会 1年)

[36]1 英語など西洋語以外にも、例えば、中国語、韓国語、インドの言語など、日本が経済、

文化の上できわめて大きな影響を与えている国々に言葉の教育を強化されたい。一般に、日本人学生は西洋崇拜の気持が強く、またテレビの影響を受けすぎて自己を失っている。

2 片かなが多すぎるが、これは日本人が外来の文化（技術）を受容する上で、自らの文化に消化することなく、単にすべて模倣していることを示すものである。（原文＝中国語）

（私立、30代、男、台湾、工学 4年）

[37]日本の大学教育については、派閥が多く、学生と大学との間の距離も非常にへだたっているようで、1人の留学生としては、その中に入り込めないのを感じる。

若い教授は好んでわざと授業中に英語を使いたがる。もし教室にアメリカ人学生でも居ようものなら、授業はまるでアメリカ人学生だけのためにあるようになり、それ以外の学生も授業を受けていることが完全に軽視されてしまう。実に行き過ぎた「外国に媚び、外国を崇拜する」態度である（東南アジアに対しては優越感－虚像に過ぎないが－をもち、西洋人には劣等感をもっている）。教授は授業よりも会議に出る回数や時間の方がずっと多い。

日本人学生は気位が高く、容易に交際できない。とりわけ東南アジアの学生にとってはそうである。一方、西洋の金髪碧眼の学生に対してはまるで祖先にでも対するかのようであり、従って、西洋人は東南アジアの学生よりも容易に生活圏に入ることが出来る。

最後に、私は日本に留学したことを深く後悔して、帰国の日を待っているのであり、日本留学を希望する友達や学友に日本留学を決して勧めない。日本の学位は取るのに時間が長くなり、滞日中には一部の日本人に蔑視され、帰国後の評価もアメリカやヨーロッパ各国への留学に比べて低いとなれば、なんのために苦しみに来なければならないことがあろう。また、同じ1か月分の生活費で日本で暮せる日数は短かいが、アメリカであれば同額で少なくとも1か月以上は暮せる。

政治的な立場でもって留学生の各種の権利、例えば、国民保険への加入、国費留学生への申請等を制限し、政治が学術に口を出すことの決してないよう、文部省にお伝え下さい。（原文＝中国語）

（国立、30代、男、台湾・中国、人文 2年）

[38]日本の大学教授は尊敬されており、その学問に対する態度や研究に対する精神は学ぶに値する。一般的に、教師と学生とのつきあいは実にうまく行っており、距離もなく、非常によい現象である。

また、日本は比較的自由な国だが、平素、授業のおりに目にするのは、教師が壇上で講義している時に、学生が後の出口から悠々と外に出て行くことである。また、教師が一生懸命に教えているのに、学生はお互いにおしゃべりをしていることもある。こうしたことは、私の国では少ない現象である。しかし、概して言えば、学生は勤勉で努力して勉強している。

日本はすでに学問的には自立しているが、一部には依然としてアメリカを主流と見る向きがあるようだ。これは日本にやって来て驚いたことであつた。いいかえれば、われわれは日本に来てアメリカの事を学んでいるような気になることがある。

聞くとところによれば、一部の大学教授は留学生に対して甚だ寛大であり、それは留学生が卒業後に日本で就職しないからだという。まことに残念なことだ。一般に留学生も日本人学生も同様に待遇し、指導し、訓練して頂くよう願うものである。（原文＝中国語）

（私立、30代、女、台湾・中国、工学 1年）

2 留学に関する情報提供の問題について

[39]留学生にとって経済的問題はたいへん重要である。日本に留学するため留学生が自国においてとれる奨学金は日本政府の奨学金だけでありながら、奨学金を得るための方法・資格等くわしい事は留学をしたいと思う一般の学生たちにはあまり知らされていないようであり、結果的にはいつもかぎられた人達だけに（学校・研究所）あたえられるような結果になる。たとえば、日本大使館でも日本公報館でもくわしい事（試験科目、資格等）をすることはできなく、ただ何月ごろか各大学等に応募要項をたずねなさいというぐらいのへんじである。またその何月かというのがはっきりしていないために、知らないうちにすぎてしまうこともおおいし、たとえしまったとしても試験準備・書類作成などでまにあわないことがおおく、一年くらいはすぐすぎてしまうことがおおい。私個人の場合はいまだにくわしいことは知らなくて資格があったかなかったか、応募さえすることができなかったことが非常にざんねんである。そこでいつたずねてもわかるよう、かんたんな案内書でも用意しておいてほしい。（大使館か公報館に）また応募の時期はその国の大きな新聞にだしてほしいと思った事があります。また、日本国内選抜の日本政府の奨学金でもほぼ同じことがいえる。たとえかしだしの奨学金でもあったらいいなと思ったことがあります。またせっかくの学校の行事（旅行）などには留学生の家族（夫婦）くらいは参加できるといいと思います。大学の個人個人はたいへん親切で無事に大学生活をおくることができたのではかんしゃしている。（原文＝日本語）

（私立、30代、男、韓国、工学 4年）

[40]日本の大学教育は一般的に高く評価されているし、大学教授も学問的な深さがあると思われます。このような教授の下に新しい学問を学んだことは、一生に一回くらいの機会だと思って勉強しております。特に、立派な実験実習機械を利用して高い水準の研究を行っていることは私にとって幸福だと思われます。留学前には、日本の大学や専攻分野等を紹介する大学案内書などがなかったんですから、今後、海外駐在日本文化院および駐在大使館を通じて日本の大学に関する情報や留学希望者が誰でも参考に来るようにしてほしいと思います。大学行政に関しては、ヨーロッパやアメリカ合衆国のように、前学期・後学期共に入学出来るならば幸いだと思われます。同じ研究室の日本人学生達はみんな親切で、やさしい人ばかりいるんですから、文句は御座いません。（原文＝日本語）

（国立、40代、男、韓国、理学 4年）

[41]1 留学生は日本にくるまえに、研究計画について、日本の教授と、文通によって、意見を交換する機会が与えられるべきである。

2 博士課程の3年間は、短かすぎる。もし学生の研究の進行具合が満足すべきものであるなら、奨学金は研究完成まで、延長されるべきである。

3 日本人学生は、学生の交換プログラムが行なわれている理由、及び、その意義について、十分に知らされるべきである。というのは、彼らは、我々留学生が彼らの政府によって、特別高額の資金援助を受けていることに対して、一種の強いねたみの気持ちをいだいているからである。（原文＝英語）

（国立、30代、男、東南・南アジア、理学 2年）

[42]それぞれの大学への入学許可システムに一貫性がなく、これが非常な混乱をまねいている。

もし適切な情報が、大学の入学に先立って得られれば有益であろう。(原文=英語)

(国立, 30代, 男, 東南アジア, 理学 2年)

[43](1) 学問的レベルは、大学によって大きな違いがあるのに、外国人留学生は、日本に来るまで、彼等が将来学ぶことになる大学について、適切な情報が得られない。

(2) アメリカの大学と比べて、博士号を得るのが難しすぎる。(原文=英語)

(国立, 30代, 男, 台湾・中国, 社会 4年)

[44]日本の教育制度は他の国のそれとは非常に異なっているので、来日前に留学生にこの違いを説明しておくことが望ましい。

日本語をコミュニケーションの手段とするには、6ヶ月間の日本語講習が重要な意味を持つ。この講習は徹底的で、かつ真剣なものでなければならない。私の場合、この講習前の夏休みの2か月間に、もっと勉強しておくべきだったと痛感した。(原文=英語)

(国立, 20代, 女, 東南・南アジア 3年)

[45]博士課程の学生の受け入れ方は、まったく安定していない。どこの大学でも受け入れには冷淡である。修士号をもっている留学生にとって、こうした日本の実情は理解しがたい。原因のひとつは明解な情報が知らされていないためである。少なくとも高等教育に関する情報が、在外日本大使館を通じて、もっと留学志願者に提供されるべきである。(原文=英語)

(国立, 30代, 女, 東南・南アジア, 工学 5年)

[46]どの大学も、詳しい説明書を作ってほしい。なお、あわせて、英語の対訳もつけてほしい。学生および研究室の人びとは、皆感じがよく、親切なので、感謝している。(原文=英語)

(国立, 30代, 男, 東南・南アジア, 農学 2年)

[47]日本へ来るまで、私は日本の大学のシステムに関して、たいして知らなかった。今思うに、日本の大学、とくに大学院においては、極めて限られた研究分野しか、それぞれの大学院では開設されていない。日本へ研究に来ることを希望する外国人学生は、自分の望む分野が確実に研究できる場所を選ぶべきである。実際、我々外人留学生の多くは、そのようなことに関する情報を受け取っていなかった。何人かの外人留学生は、文部省のすすめた研究機関を変更せざるを得なかったそうである。ともかく、以上のような理由で、私は、日本政府は、外人留学生が日本へ来るまでに、十分な情報を与えていただきたいと思います。(原文=英語)

(国立, 30代, 男, 東南アジア, 農学 2年)

[48]① 文部省は留学生を教育し導くための特別のカリキュラムを作るべきであり、そのカリキュラムを留学生受け入れの大学や教授たちに通達すべきである。

② 日本語の学習、とくに日本語の読み書きは非常にむづかしいので6~12か月では、日本語を自由にあやつれない。留学生を受け入れる教授は英語にたん能であるべきである。

③ ほとんどの留学生は、教育制度が日本と非常に異なる発展途上国から来ているので、留学生が研究や計画をなしとげるまで、ていねいな指導が続けられねばならない。できれば、英語でなされる特別コースもあるとよい。

④ 帰国に際しては、修士号か博士号の取得が非常に大切なので合格レベルを認定するため、特別の試験が実施されるべきである。また、必要な場合には短期間のうちに追試験を受けることができるという。(原文=英語)

(国立, 30代, 男, 東南・南アジア, 保健 4年)

[49]外国からの留学生は、来日する以前に、日本の大学とその教育のあり方、学問の状況、日本の生活などについて、しかるべきオリエンテーションを受けて来るべきである。

最初の6か月の日本語教育は、近代的ですぐれた教育がなされるところで学ばれるべきである。不幸にもこの大学はそういう所ではない。そこでは日本語を書くという重要な教育があまりなされていないからである。なお、住の問題だが、私の場合には研究しようとする者にとって適当でないような学生寮に住んでいる。(原文＝スペイン語)

(国立, 20代, 男, 中南米, 理学 1年)

- [50]貴国政府が3年間にわたって御援助下さったことに感謝したい。私は修士課程を無事了えるとともに、貴国の風俗、文化、科学技術の面に一層深い理解をもつことが出来た。

不都合だった点はあまりないが、私自身の経験を述べて、貴国の大学行政の参考になればと思う。

言葉の障害のために、授業科目の選択で若干の困難があった。私は冬学期にあるセミナーを選択したが、学期の半ばになってはじめて、大学の教務掛から通知があり、そのセミナーは全学の共通科目であって、もし選択したければ夏学期に聴講カードを提出しなければならないとのことだった。ために、私が各学期に行なった選択はけっきょく無効になってしまった。

非は私の方にあり、学則をよく知っていなかったことにあるわけだが、学則をよく知るには日本語に精通していなければならない。このような諸規定については、留学生が入学試験に合格した後で、日本語、英語、中国語(もちろんわれわれ中国人にとっては中国語が広く使われることが有難いけれども)で各種の注意事項を印刷し、新入生に注意してほしい。(原文＝中国語)

(国立, 30代, 男, 中国, 理学 3年)

- [51]私の国で文学、歴史を研究している学生や教師はみな日本国内で出版された各種の学術紀要、刊行物、雑誌を大変重視しているが、手に入れて読むことは容易ではない。私は台北の国立中央図書館の日本語・韓国語文献室でわずか10数種類の日本国内の紀要類を見ることしか出来ない。研究に関係のあるものは全部コピーするが、それでも十分とは思えない。この大学にやって来て、さらに多くの国際的レベルの紀要類、例えば、東洋文庫、史学雑誌、仏教美術等々、国内で見ることが出来なかったものがあることを知った。

そこで私は、貴センターを通じて日本の学術界に1つの提案をしたい。それは、学術刊行物を台北の国立中央図書館に寄贈していただきたいということである。そうすれば台湾の文学、歴史の研究者も日本の学者の研究物に目を通し、相互に比較することが出来るだろう。学術刊行物の寄贈には当然のことながら経費がかかるが、日本交流協会からの補助金を使えばよいと思う。奨学金は1人の人間に学習させるだけだが、もし学術刊行物の寄贈に利用されれば、もっと多くの者が学ぶ機会を得ることが出来る。これは中日両国の学術・文化交流という点から言って、奨学金を与えること以上に意義は大きい。刊行物の寄贈は実に「百益あって一害なし」だと思う。

実際、東洋文学、史学の方面では、日本の学者は欧米の学者よりすぐれています。しかし、日本の学者の著作はたいてい見ることが少ないので、一般の人びとは欧米の方がすぐれていると考えがちだ。だから、日本の学術、とりわけ東洋文学、史学の著作および資料を広く台湾や東南アジア各国に紹介し、提供すべきだと思う。少なくとも各国の中央図書館に一部づつは置くべきではないか。(原文＝中国語)

(国立, 30代, 男, 台湾・中国, 人文 4年)

3 日本語および日本語教育について

[52]日本に来てから二年半あまりになりましたが日本語があまり上手ではないです。これは一番残念な事と思っています。私の大学に留学生のための日本語講義があるけれど、講義が終わったら日本語を話す機会は本当に少なかったです。これは自分がしゃべらないからでしょうが日本の学生さんはいつも留学生をお客さんにして遠慮すぎるため自由に話してくれなかったのも原因の一つです。留学生の日本語学習のために、もっと良い環境を作って教育してほしいと思います。(原文=日本語)

(国立, 30代, 男, 台湾・中国, 工学 3年)

[53]私は全てがうまく行っていると心から思う。最大の問題は言葉の障害だがこれはまあ仕方がない。(原文=英語)

(国立, 20代, 男, ヨーロッパ, 1年)

[54]私の経験から言えば、「研究生」コースは留学生にあまり多くのものをもたらさない。研究生として1年間、時間を空費するよりも、日本語講習を徹底的に受けた方がよいと思う。げんに、日本語の修得が不十分なため、大学院の授業についていけない学生が出ている。

アジアからの学部留学生が比較的満足しているのに対して、欧米からの学生の殆どは不満をもっている。国籍その他によって留学生それぞれの要求や来日目的が多様であることに、もっと注意を向けるべきではなかろうか。(原文=英語)

(私立, 20代, 男, ヨーロッパ, 社会 3年)

[55]日本語を教える期間を1年間に延長し、それぞれの専攻科目に関する日本語の表現や基礎を教えることにもっと注意を払うべきだ。

研究が個人の枠にとらわれすぎないように、留学生も研究室の共同研究グループに加えられることが望ましい。(原文=英語)

(国立, 30代, 男, アフリカ, 農学 4年)

[56]日本が高等教育機関とくに大学院留学生の増大を通じて国際交流を推進していくために、文部省は言語教育の問題を真剣に考慮すべきである。われわれは、日本人の一般学生と違い、言葉を修得する時間が少ない。しかもわずか6か月の訓練で日本語を修得することは、実際不可能だ。授業はたいてい日本語で行なわれるので、教授の講義のほとんどは理解できず、失望を感じる。日本の学者が書いた論文を読みたいが、不幸にも我々は日本語では、まさに文盲で、日本の学者の考えを取りいれることができない。もっと翻訳がなされるといい。来日前に日本語を学んだことのない者にとって、日本語で学術論文を書くことは困難である。

ゼミナーで、数少ない日本の学生との交流はあるが、彼らの殆どが政治・経済・社会の問題に余り関心を示さないため、日本語の修得にもまったく役立たない。(原文=英語)

(国立, 20代, 男, アフリカ, 社会 2年)

[57]O大での日本語集中コースは有益だが、日本語の授業について行くには不十分である。したがって、日本語教育の期間が1年間に延長されることを願う。他の点では、だいたい満足している。(原文=英語)

(国立, 30代, 男, 東南・南アジア, 社会 1年)

[58] 1 文部省は留学生を、英語を話せない日本人教授に、割り当てるべきではない。

2 文部省は、以下のどのような外国人学生も日本に来るのをみとめるべきではない。a)まったく日本語が話せないもの、b)日本の文化と日本の教育について、今までに何らのイントロダクションを受けたことのないもの、c)学部を卒業しだてのものか、就業経験のまったくないもの。及び、d)神経症傾向、もしくは自殺傾向のあるもの。

3 文部省は、留学生に対する、あまりにも、迎合的な、刺激にとぼしい、非競争的な、教育政策を改めるべきでもある。

4 教授も、大学当局も、留学生を、ふつうの日本人学生と同じようにみるべきである。

5 いかなる留学生も、直接、当該大学へ、行くべきではなく、2年間は日本語だけを学ぶべきである。1年間は充分ではなく、6か月では、まるで、九州か札幌への楽しい旅行のようなものにすぎない。(原文=英語)

(国立、30代、男、東南・南アジア、工学 5年)

[59]もし講義が、英語か少なくとも日本語と英語の併用であれば、もっと多く学べたであろう。

また、大学が、我々留学生に、ドイツ語、フランス語など他の言語を、日本語と同様に少なくとも、一学期かそこらの短い期間学ばせてくれたら有益であつたろうと思われる。

概して言えば、日本人学生や、他の日本の人びとは、外人留学生に常に援助の手をさしのべてくれる。(原文=英語)

(国立、30代、男、東南・南アジア、農学 2年)

[60] 1 6カ月の日本語コースは、たいへん肝要なものであり、外国人留学生にとって、よいものだと思う。

2 1年間、ないしは6か月間の研究生としての期間は不必要な期間であると感じる。特に、我々、開発途上国から、来たものにとっては、時間はきわめて、重要である。

3 工場実習は6か月前後に、また修士課程は1年半位に、短縮することを提案する。

4 私は、もっともっと、日本語を話すことを学ぶべきではあるが、自分の理解する、言語で自分の専門が学べないというのは、まったくの時間のむだであるし、また欲求不満も高める。

5 日本語のコースは、語学学校を出たあとも、続けられるべきである。

6 留学生の住居も、問題が山積しておりこの調査が、問題を緩和することを希望する。

7 交通費が、エネルギー価格上昇にともない値上りしているので、これの改定をおねがいする。

8 教官が、留学生の諸問題、たとえば、研究プロジェクトに関する不満とか、言語の壁にともなう孤独感等を緩和し、またその必要の度合いが大きいときには、留学生が母国を訪れるための、財政的な支援などのため、留学生を援助することを、希望する。(原文=英語)

(国立、30代、男、アフリカ、理学 1年)

[61]日本で研究をしている間、私はそれほど多くの問題や困難を感じなかった。これまで、すべてのことはうまく運び、問題が表面化すると、すぐに解決されてきた。その問題は主に事務上の問題であったが、うまく解決された。指導教授や事務当局が、私に注意を払ってくれ、いつも問題解決に助力してくれている。日本の学生やすべてのメンバーも同様である。

現在、私は修士学位取得のための必要単位を満たすべく講義をうける一方、論文のための研究をおこなっている。ここでの主な問題は、日本語の問題である。とくに授業で説明する順番が、私にまわってきたとき、その説明は日本語でしなければならない。私は、自分の研究の時間をさいて、すべての時間を日本語の準備に費やさねばならない。日本の学生が、私が言っ

たり説明したりしたことを、私の文の構造や組み立て方が悪いために、理解できないとしても、私は雑誌や教科書の一部分を、理解できる日本語に訳すために貴重な時間を費してきたと思う。

英語でおこなわれる授業があると、留学生にはありがたい。日本人と一緒に授業をうける場合には、日本語ではなくて英語で説明できるといいと思う。

また、学部の事務室や図書館の名前や連絡事項は、留学生が理解できるように、英語で書くべきである。とくに日本に来たばかりの留学生のために…。(原文=英語)

(国立, 30代, 男, 東南・南アジア, 理学 1年)

[62]私は、自分が学んでいる大学のあり方に賛成であるし非常に満足している。日本語の問題以外にはほとんど問題となることはない。だから、文部省が認めるなら、留学生に、6か月ではなく少なくとも1年日本語を勉強させてくれると良いと思う。主たる問題は日本語である。

(原文=英語)

(国立, 20代, 男, 中近東, 理学 1年)

[63]私は、母国での仕事に関連したことがらや日本の社会、文化その他あらゆることを知るために日本にやってきた。しかし、私にとっての障害は、日本語を理解できないということである。だから、研究生である間、日本語を集中的に学ぶことが必要であろう。これは教授陣によって厳しく指導されねばならない。日本語の授業がもっと効果的で集中的であることが望ましい。また、単に手助けするだけでなく責任を持った特別のチューターも必要だと思う。

情報は充分に得られるし、友達や職員は親切である。これらは、友人たちは多ければ多いほど望ましい。

我々を指導する際の効果的な計画も用意してほしい。(原文=英語)

(国立, 30代, 男, 東南・南アジア, 教育 2年)

[64]① 我々は日本で勉強するのであるから、専門分野を日本語で研究せねばならないのは当然のように思われるであろう。しかし、我々が理解できないときは、誰かが英語で説明してもらいたい。たとえ10年間日本語を勉強していても、日本語だけで研究することはできない。私の希望としては、日本の教授は英語で話せるようになってもらいたい。

② 日本の教授と学生は、西欧社会の研究にのみ興味を示し、アジア諸国には無関心であるが、あらゆる国を研究すべきだと思う。(原文=英語)

(国立, 30代, 男, 東南・南アジア, 教育 3年)

[65]外国人留学生のための日本の教育システムは、とても有益だと思う。大学の教授やスタッフはとても親切である。ただ私のコメントとして1つつけ加えたいことは、研究の場に留学生が入る前に、日本語に関してきびしい訓練を受け、高いレベルの力を持っているべきであるということである。なぜなら、研究において、ただ一つの問題は、言語のむずかしさであるから。

(原文=英語)

(国立, 30代, 男, 中近東, 2年)

[66]日本と台湾は地理的に非常に近く、どちらも東洋人であることもあって、生活習慣、風俗民情は同じではないけれども、外国に居るという感じはそれほどしない。もちろん、われわれは多くの点で日本人の友達と意思を疎通させることは出来ない。この主な原因は言葉の問題だと私は思う。読むことはそれほど問題がない(いろいろな辞典を使えば)、しかし、聞いたり話したりすることは難しい。日本に来て1年ちかくなり、あと2か年あるが、言葉の面で費す時間は非常に多く要すると思う。したがって、われわれは、日本人の大学院生と同じように思

うままに様々な本を読むことは出来ない。一冊の本を読むのにも、われわれは日本人よりも長い時間かかる。

私の大学では留学生のことを大変配慮してくれるし、また日本人との人間関係も非常にうまく行っており、不愉快な思いをしたことはない。しかし、われわれの友達は多くないので、日本人ともっと深いつき合いがしたいと思うことがしばしばある。

やっと10か月たったところで、まだよくわからないことも多い。しかし、現在学んでいるこの大学の環境は私の勉強に非常に適していると思う。私はこの大学に対してとても好感をもっている。他の大学には行ったことがないのでよくわからないが。（原文＝中国語）

（国立，20代，女，台湾・中国，社会 1年）

4 日本の大学、教育、教員、学生について

(1) 全般的論評

[67]第1に、私は、日本で学ぶ機会をもてたことをうれしく思う。私にとって、この地で、最も大切なことは、まったく異なった文化の中で、生活することを試してみることである。私は、6歳のころから、極東、とくに日本を夢みてきた。第2に、私は、多くの人と会うことが、好きであり、学生の交流は、世界に平和をつくりだすためにも、よい方法だと思う。国と国との間の、多くの問題が、お互いについての知識の、欠如によって、引き起こされている。第3に、私の専攻の海洋生物学では、日本は世界の最高水準にある国であり、私は、なんらかの新しい情報を、母国のデンマークへもたらすことができる。さらに、生物学者にとっては、世界の、いろいろな生態系を見ることは、重要である。批判を試みるとすれば、O大の日本語のコースは悪すぎる。／会話が、もっともっと、必要である。(私は、あの大学で、どうやって、日本語コースのための教官をえらんでいるのか不思議でならない)。

日本の大学院で、私にとって、奇妙に思えるのは、大学間の非常なちがいである。来たるべき将来において、私は、日本は、あの制度、すなわち、東大が1番で、京大が2番で云々というシステムを、変えねばならないと思う。この制度は、多くのものに、悪影響を与えており、とりわけ、高校生の生活を、難しいものにしている。デンマークにおいては、そのような、大学間のちがいはない。

その他の点については、私は、日本の教育レベルの高さにおどろいている。とくに、海洋生物学の分野における、私の同僚たちの、高水準に、驚嘆している。(原文＝英語)

(国立、30代、男、ヨーロッパ、理学 1年)

[68]。日本の大学教育に関しては、非常に良いふんいきであると思います。他の大学に対しては良くわかりませんが、私の大学ではまず第一に研究内容に対して、先生と相談できる機会が多いです。第二に指導教授の下に学生の人数が少ないですから、先生と学生がお互いによくわかっています。(例えば生活面、性格、趣味など)

。大学教授に関しては、先生はとても親切でよく指導してくれるし、よく留学生のことを理解してくれると思います。

。日本人学生は考え方がちょっとせまいと思います。(例えば先生に対する態度も先生の前とうしろにおいてちがう面があります。先生のわる口を人に言っている学生もいますが、私には理解できません。)

。日本人学生と本当の友達になるのはむずかしいと思います。(表面的にわらっていても、内心ではなにを考えているのかよくわからない時もあります) (原文＝日本語)

(私立、30代、男、韓国、社会 3年)

[69]日本の教育制度は私の国と同じであります。学問を研究し、知的、道徳的及び応用面の能力を展開させることにおいては十分であったと思います。(原文＝日本語)

(私立、30代、男、韓国、工学 5年)

[70]日本へ留学して10か月、この間研究室の先生(教授)をはじめ友だちになった教室員、それと学校の役人、一般市民、みなさんのご親切に感謝します。いままでなにも不便なことなしに思うとおりに一生懸命研究に専念していますが、やはり日本の学術面の水準と研究熱、それに

いろんな設備、システム、研究者（学生）の熱心さなどおどろくべきで、習っていくべきことばかりです。

だがいくつか提案したいこともあります。まず博士課程の学生にとっても **Course Work** によって、留学生の質をはやめに日本学生の水準まで向上させてほしいことです。語学の問題点はあまりなくて問題になる点はやっぱり専攻ですが、日本の大学院（修士課程）の講義の質は高いのでこれに基づいて行なわれる実験はなかなかむずかしいです。自分でペンキょうしたり適当な講義をさがして聞いたりすることは、実験に時間をとられあまり出来ません。1年ぐらいでもいいから **Course Work** としてやらせることがいいと思う。

つぎは留学生活に一番問題になる点は宿舍で、これはできるだけ学校からちかいところで便利で、かつ安い宿舍があったらいい。だから、このためには学校の寮などをもっとふやして全員そこで生活できるようにしてほしいものです。（原文＝日本語）

（国立，30代，男，韓国，保健 1年）

[71]私は留学生として日本へ参りましてちょうど一年五か月たちました。私が現在学んでいる水産海洋学の分野は、私の国においては全く展開されていない学問領域の一つである。今後、私の国の水産業が長く維持され、発展していくためには、この研究領域は不可欠の領域であると思います。それ故、私は日本に滞在する期間に学習向上のため、一生懸命に勉強しなければなりません。幸いに、いま勉強している学校の設備、参考文献、実習場、練習船および教授などのレベルが留学前のイメージより高くなっています。

とくに学校教育の方針が正しく、例えば漁場環境学の講義を聞くばかりでなく理論的な学問と実際の経験を合せるため、学生達が定期的に大学の練習船に乗って近海域でいろいろな海洋観測を行う。そしてデータを集めて解析し、その海域の海況を理解することが重要である。それから海況を理解し、それと漁場の形成とがどのような関連があるかという問題を探究しなければならない。それを解明するためにいろいろな文献を参考にして自分の考え方を得るようにする。机の上の学問、本を読んだだけの知識、それだけでは実際には役に立たない。やはり、体験こそは、何年たっても忘れない知識となります。即ち、手の動作を通じて学んだ学問はその印象が深く定着するものである。

さらに、週一回のゼミに理解できなかった事について質問を出して先生達と一緒に討論する、そのような完璧な教育システムは私の国の学ぶべき所だと思います。

先生達も文献を読んだり、実験をやったり著書を出したりしますので、学問の向上、高いレベルを持つのは少しも不思議でない。中国語で言えば「教学相長」と言われている。

大学院における日本人の学生達も夜おそくまで読書に耽けり、しかも留学生に対する理解できない質問を親切に繰り返して説明してくれます。

とにかく、私は今、この大学でとても良い学習の環境の下で勉強できるということは私の生涯にとってどんな幸福なことであり、どんなにすばらしいことでしょう。（原文＝日本語）

（国立，30代，男，台湾，理学 2年）

[72]。日本の大学院教育；概して活発で、私の国より自由さがある。翻訳書も多く、欧米の新しい知識を非常に速く吸収し、学術の発展が促進されている。

。大学教授；いずれもよくその職責に堪え、各種の資料を提供し、学生の研究を指導している。

。日本人学生；日本社会は、人と人との間に一定の距離があって容易に入り込めないが、同級の学友の間では比較的容易につき合うことが出来る。

。大学管理；外国人留学生に対して出来るだけの協力や援助を与えてくれ、われわれのさまざまな問題を解決してくれている。（原文＝中国語）

（——，30代，男，台湾・中国，社会 1年）

〔73〕日本はすでに先進国の列に入りました。経済の面だけにとどまらぬあらゆる面の発展はアジアにおいてリードしています。だから、同種同文のわれわれは日本を一つのパターンとして学ぶべきである。日本の近代化を成功させた原因は色々ありますけれども、最も重要な一つは教育です。つまり人的資源にあることは、よく知られています。その多くの人材を造り出した場所は、勿論数多くの優れた教育機関である。日本はもともと教育熱心な民族であるから、全国においてかぞえ切れない程の学校が分布しており、しかも程度が高い。学問を求めたい人々に絶好の勉強の環境がある事は、言うまでもない。この故、私は日本へ留学を決めました。そして、私の希望通りに成し遂げた。

私の大学の先生達は留学生達に対して、良く関心を払っています。大変お世話になり、心から感謝しています。（原文＝日本語）

（私立，20代，男，台湾・中国，社会 5年）

〔74〕研究室の雰囲気は友好的で、コンピューター設備も整っており、満足している。

（原文＝英語）

（国立，30代，男，ヨーロッパ，工学 1年）

〔75〕いつも私に暖かい注意を向けてくれ、困った時には手を貸してくれる、在学中の私の大学の指導の先生方、事務職員や同級生たちに深く感謝している。（原文＝英語）

（私立，40代，男，東南・南アジア，社会 5年）

〔76〕日本の高等教育は非常によい。教授のほとんどは専門分野に関して完全な知識をもっているから。（原文＝英語）

（国立，20代，男，中南米，工学 2年）

〔77〕一般的に言って、日本の教授、研究者や学生は、外国人留学生に親切で、協力的である。そして日本の大学のレベルは、国際的な水準に達しているので、この国で研究を続けることにとても満足している。（原文＝英語）

（国立，30代，男，東南・南アジア，理学 1年）

〔78〕私は、海産物の利用の分野における日本の研究と知識が世界でも高水準にあるということで、やってきた。そしてこの国で、水産資源に関して多くのことを学べたことに、非常に感謝している。知識のうちのある部分は、教授からさずかったものである。私の所属する大学は、確固たる名声をもった高いレベルの大学であると思う。学部の良い環境のもとで、私は自分の研究をし、教授陣、学友、職員との好ましい関係を結ぶことができた。これらのことはすべて、私の日本での研究に大いに貢献してくれたので、決して忘れることはないだろう。

（原文＝英語）

（国立，20代，男，中南米，理学 2年）

〔79〕私の専門や研究の観点からもとても留学生活に満足している。この大学の学問水準はかなり高く、国際的評価も高まりつつある。私は、日本政府および大学の方がたに、自分の研究の向上のために機会を与えて下さったことを、心から感謝したい。（原文＝スペイン語）

（国立，20代，男，中南米，社会 3年）

(2) 日本の学生についての論評

[80]日本は余り開放的な国ではなく、多くの面で依然として保守的、排外的な気風をもっている。このため、留学生との友情の多くは儀礼的なものとなり、留学生の方が援助を得ようと思えば大いに口に出して要求しなければならない。日本人学生は手伝ってはくれるが、それに対してお返しがあること（たとえば、外国語が上手になるとかの）を願っている。日本人の学生は、一般的に言ってかなり現実的であり、何も得るものがなければ外国人学生のために時間をさいて手助けしてくれるような人は非常に稀れである。（原文＝中国語）

（私立、20代、女、中国・台湾、社会 2年）

[81]①日本の大学教育——私が在学する大学の教師と学生は、素質もよく、努力もしている。とくに、皆たいへんじっくりと学問研究を行なっている。しかし、新しい学説や発見という面では、概して「創造」が足りないと思う。二流・三流大学の水準はかなり低い。

②大学教授——名声の高い一流教授が行なう授業は多くない。たいていは理想的な制度の下、すばらしい研究環境で安心して研究に従事している。このことはもちろん良いことであるが、学生との間にかかなり距離があり、直接教えるのは助教授や助手である。二流、三流大学の二流、三流教授は授業もかけもちでやり、研究上の進歩にもあまり見るべきところがない。

③日本人学生——多くは西洋崇拜である。だが、外国語の能力は一般にすぐれていない。勤勉かどうかは学校の良し悪しによる。国家が安定した発展をしているので、誰も民族的な責任といった意識はなく、すべて個人的利益のために目標を追求している。二流・三流大学の学生は比較的活発である。（原文＝中国語）

（国立、30代、男、台湾、工学 3年）

[82]1 一般的に言って、日本人学生は東南アジアからの留学生に対してあまり親切でない。経済大国のつもりか、日本の学生はうぬぼれている。日本の学生は、授業のとき発言（あるいは質問）をあまりしない。ゼミナールの討論でも積極的ではない。

2 留学生の奨学金が少なすぎる。勉強に専念できる環境がよくない。また、留学生の卒業後の就職問題に対しても、大学は無関心である。（原文＝中国語）

（私立、30代、男、台湾、工学 3年）

[83]今年3月で、日本に来てからちょうど1年になる。この1年間、授業や実験を含めて、教授や研究室の友達は大変に私のことを配慮してくれ、本当に感激している。参考までにここで2つの意見を書いておきたい。

1) 日本の学生はしばしば授業に遅れてくる。「ぶちこわす」とまでは言わないまでも、少なくとも他人の勉強の邪魔だし、教える先生にも邪魔になるだろう。

2) 授業で使われる資料は、一般に、大変豊富といえる。しかし、学生の多くはただノートをとるだけで、自主的に勉強する能力に欠け、その結果、生き生きとした授業風景というものが生まれにくくなっている。（原文＝中国語）

（国立、30代、男、台湾・中国、工学 1年）

[84]大学教育の力点が、非常に専門化された分野の膨大な知識体系の獲得におかれているので、しばしば次のような2つの欠陥をまねいている。①学生が教官の言うことを無条件に受け入れる。だから、物事を客観的に見る能力を失ってしまう。②日本の学生は、自己の専門化された学問分野にのみ走り、学問の一般的な問題とか社会・政治問題について話しあう雰囲気欠けている。

社会全体がこのようなエリートによって支配されるのは非常に危険なことといえる。専門知

識がそのまま知性であるかのように日本の学生は誤解している。政治的に保守的な教官から専門的すぎる知識を無批判的に受け入れても、それは知性でもなければ精神的解放でもない。

（原文＝英語）

（国立，20代，男，オセアニア，人文 2年）

〔85〕教育に関して；日本人は非常にまじめでよく働くけれども，基礎的な探究心に欠けるところがある。日本の教授は，学生の新しい考えにおける創造性を認めたがらず，学位を与える際の規定を細かく定めている。もしそうでなくて彼らが大胆な主題の選択を許し，学位を勇気をもって与えれば，結果としてすぐれた理論も生まれてくるだろう。現在のところ，ほとんどの実験や結果は，ヨーロッパやアメリカの研究の複製か継続になってしまっている。学部事務局の人々は非常に有能である。

日本の学生に関して；日本の学生は大学で何かプレッシャーを感じているように思える。何も生みだすことなく，彼らは時々大学で時間をむだにすごしている。彼らは大学に行くことを一種の「義務」だと感じている。義務感のかわりに大学は時間の創造的利用をする場所であるという考えを持たねばならない。勉学の意欲をなくしても（そうしたことは当然あり得ることだが），それでもかれらはなお大学にとどまっている。そうするかわりにかれらは大学の外に出てリラックスすべきである。そうすることが良い研究をうむ助けとなるかもしれない。よい研究というものは自由に思考する時間を多く必要とする。熱心に働けばそれだけ考える時間が少なくなる。工場ではこの態度もよいが，大学では，考える時間が充分に必要なのである。このことが，工場での生産性の高さと，大学での真の研究が少ないことの背景となっていると思う。（原文＝英語）

（国立，30代，男，東南・南アジア，工学 5年）

〔86〕日本人学生について

同僚日本人学生達は親切だし，すべていいが，もっと心を広げて，外人とも外人という意識を持たずに深い友達関係になってほしいのである。（原文＝日本語）

（国立，20代，男，韓国，人文 1年）

〔87〕一、日本の大学生活について

原書中心の考え方には再考する必要があると思います。即ち，日本的な学問の進め方を求めるべきだと思います。

一、大学教授

- 学者的な良識が不足。（考え方の公平さから見て）
- 世俗的な处世術で学問の世界で生活する先生が多い。
- 著書の中で，学者として言うてはいけないことを平気で書く先生も多い。

一、大学行政

若干，官僚的（特に国立大学の中では）。（職員達が文部省の職員＝公務員＝ではありますが）。

一、日本人学生

非常に親切ですが，信義をわかちあえる友人になれるかどうかについては，結論を出すのが難しい。（原文＝日本語）

（私立，40代，男，——，社会 7年）

〔88〕日本の大学について，問題点であると思われるいくつかを述べたいと思う。

1 甘やかしの大学の生活

大学入試が選抜試験として厳しいことに比べて、入学後、学究生活はもちろん、卒業基準があまりにもやさしすぎる。

2 適切な大学進学指導の欠如

高校の進学指導の不十分による大学生活の不適應の問題が深刻である。これは大学への『不本意入学』の問題と関係があると思われる。

3 大学院生が多過ぎる

何を研究するという目的もはっきりせずに大学院に入ってくる院生が多い。つまり「研究室セラトリウム人間」が多い。

4 学位の意味の再検討が必要

「博士」という学位は学者として必要である、素養を備えているということを証明するライセンスである。しかし、日本の風土においては、「学位」はある特定の分野での山の頂きを示し、優れた業績をあげたということを証明することになる。もちろん、制度上、現在の新制度の大学院の博士には「欠陥性」が見られない。理工科だけでなく、文化系統にも学位に対し新しい検討が必要であろう。（原文＝日本語）

（国立、30代、男、韓国、人文 4年）

[89]私の場合は大体好条件がそろって、さいわいあまり問題はありませんが、次のことを述べさせてもらいます。

a) 一般的に講義では、学生はあまりにも「受け身的」である。従って Discussion が少ない。一般に輪読方式で進められたら良いと思う。

b) 教授は、メーカーと大いに接し（あるいは海外でも）、充分応用的な指導が出ることが望ましい。

c) 日本人の学生は一般に、留学生とは話合わない。留学生に対してはできるだけ日本語を使ってもらって学びたいのに、この点で日本人学生の態度は好ましくないと思う。外国人も仲間入りさせようという気持ちをもっとあってほしい。（原文＝日本語）

（国立、30代、男、中南米、工学 1年）

[90]1 厳しい学校の学生は勉強しすぎる位頑張っているが、甘い学校の学生はバイトばかりを生活の重心にしていることは、目下日本の大学において一般的な現象といっても良いだろう。なんとかしてその差を縮められないか。

2 よく勉強する学生にしろ勉強しない学生にしろ、個人の教養（躰）を更に強めれば日本の国民は世界一流の国民と言われてもはずかしくないと思う。（原文＝日本語）

（国立、30代、男、台湾・中国、農学 4年）

[91]① 日本の大学で水準の低いものの一つは、外国語能力の水準、また外国、特にヨーロッパにおける現在の社会的発展又社会科学的な議論についての知識が少ない。

② 一般的について批判能力が少ない。よく文献を勉強します。しかし、有名な本になれば弱点があっても批判しません。日本の大学では教えすぎ、批判的に話し合うことが少ないし、できません。特に学生の批判力を伸ばしていません。

③ 大学院学生は私の母国の学生より協力的ではありません。たとえば、ゼミでの Team Work は少ない。

④ 日本の大学では実証研究が盛んですので、フィールドワークがよくされます。これはドイツの大学とくらべてよいことだと思います。（原文＝日本語）

（国立、女、30代、ヨーロッパ、教育 4年）

(3) 大学の教員、教育方法、学位制度、施設・設備などに関する論評

[92]① 日本の大学は、一般的にいて「教育」より、「研究」に重点を置いているようだ。

② 自然科学の学生といえども、大学院教育を日本で受ける以上、日本語の習得、日本文化の理解の機会を十分に持つ必要があるのではなかろうか。一般的にいて、自然科学系の学生は日本語より英語に接する機会の方が多いようである。(原文＝韓国語)

(国立, 30代, 男, 韓国, 農学 6年)

[93]大学院の授業方法について愚見を述べる。参考にしていれば幸いである。これまで授業を受けた科目の中のかなりのものが英語のプリントを教材に使い、学生が順番に翻訳するかたちのものだった。英語の論文を教材にすることは、最新の科学技術の知識・情報について学ぶ、最も良い方法であって非難されるべきものではないと思う。だが問題は、学生が順番に翻訳していくことは、あまりに時間を食いすぎるのではないか。聞いている者が全部吸収できるかどうか問題だ。私の考えでは、それは単に翻訳能力の訓練にしかすぎず、皆の時間をむだに使うことであり、また、学生の訳す文章を直すだけでは本当にもったいないと思う。

むしろ、各授業時間の前に、それぞれの学生がその日討論すべき範囲の必要な報告(翻訳ではない)を提出し、教授が重要な点を指摘して説明したり、あるいはまた、学生同志が討論したりする方が良いと思う。こういう方法なら、理解や吸収の効率もおそらくかなり高くなるはずである。また、大学院生の各方面の知識の水準も相当に高まると確信する。

もうひとつの私の意見は、外国人留学生に支給されている奨学金の支給定員を増加することです。日本と各国間の科学技術、文化の交流および人びとの感情の交流という点から言って、これは非常によい方法であると思う。日本の教育政策がこのような考え方に立つかどうかは知らない。現在日本政府は毎年世界各国の学生を一定の数だけ国費留学生としているが、この定員はかなり少なく、とりわけアメリカの各大学が毎年世界各国に提供している奨学生の定員と比べると非常に少ない。現在日本は各方面(経済、科学技術等)で国際的に高い地位にランクされるようになったのであるから、さらに多くの留学生を受け入れることは可能だろうし、またそうすべきだと思う。(原文＝中国語)

(国立, 20代, 男, 台湾, 工学 1年)

[94]授業では全体の討論が軽視されており、学生が意見を交換し、いっそう広範な知識を吸収することが出来ない。教授は学生が研究上で感じたことに対して、適当な意見や参考となるものを与えていない。(原文＝中国語)

(私立, 20代, 女, 台湾, 社会 2年)

[95]外国人留学生に対し「自分のことは自分で解決せよ」と、日本人学生と同等な教育方法をとっていることは無理からぬことである。ところがこうした日本の教育体制を理解した上で自己のテーマを決めるまでには、2年程度の貴重な時間を浪費せざるをえず、折角の留学が意味のないものとなる恐れがある。

少なくとも教授自身の研究チームの一員に加えるとか、日本の研究動向(傾向)について詳細な説明がほしいものである。自分のことを自分で解決できるくらいの実力があるのなら、なにも留学などする必要はないということを強く申しあげたい。但し、日本人学生に対しては、こうした教育方法が独創力を養成することになると思うので良いと思う。(原文＝韓国語)

(国立, 30代, 男, 韓国, 農学 3年)

[96]1 論文の作成過程で、その専門分野における専門家と直接接する機会がない。留学生のテーマに通じた、批判的能力をもった人がいなければならない。テーマの選択に関する決定は、

教授の希望によってなされることが多い。執筆者の資質に応じて自由に選択させるべきものである。

2 学生と教授の関係があまりにも密着しすぎるようである。学生たちは卒業後も、また、教授が退官した後でさえ、教授に仕える義務がある。(原文=英語)

(国立, 30代, 男, 東南・南アジア, 理学 4年)

[97]最初は、学生、とくに上級の学生たちの中に閉鎖社会的雰囲気があるように思われた。彼らは自分の研究を守ろうとする傾向があって、意見を広く交換しようとはしなかった。学部を出たばかりの、若い大学院生は力になってくれ、ノートを見せてくれたり、いろいろ積極的に助けてくれた。教授たちも、援助しようとしてくれたが、資料の解読や研究についてのアドバイスは充分ではなかった。というのは教授たちは、大学院の学生ともなれば、すでに研究能力をもっていると考えていたからである。私たちの日本語能力に対する要求水準がきわめて高く、留学生がその能力に欠けている場合、重荷になる。一般的にいて、ひとりですべての資料をカバーしようとする時間のロスをなくすために、チームによる研究活動や個人指導を奨励する努力が、もっとなされるべきであると思う。(原文=英語)

(私立, 30代, 女, 北米, 人文 5年)

[98]いくたの野心的な意図をいだいて、外国人学生は日本にくるのだが、日本の教授によって、台無しにされる。強調されるのは学生が、その学部ですごした、時間数であって、全体的な結果や、知性や、学問上の資格や、研究能力などではない。もうすでに、一人前の科学者であり、多くの中から選ばれてきた、外国人留学生にとっては、どの国の平均よりも、知的能力が高いのは、ごくあたりまえのことである。そのようなひとは、考えを自由に述べるのを許されるべきである。日本の教授連は、彼をはげまして、よい研究をさせるようにしむけるべきである。この国の制度は、まったく、反対である。

はげましのないことは、別にしても、日本の教授たちは、留学生の知的な能力を、自分たちの利己的な目的のために最大限に搾取しようとする。規制は、外国人にばかりきびしいが、彼らにこそ柔軟であるべきである。この状況は、外国人に、その最大の力を出させるアメリカのシステムと好対照をなす。私が今、学んでいるところは、真の知的自由も環境も欠いており、それこそ、強調されるべきである。(原文=英語)

(国立, 20代, 男, 東南・南アジア, 理学 2年)

[99]一般に教授陣は非常に親切であり、また親切でありたいと思っているようだ。明らかに日本では有能な人材が適所に配置されている。だが残念ながら、これらの人びとの多くにとって、大学での地位は生計を支えるほんの一手段にすぎず、多くの場合、学外の機関と深く関わりすぎるため、講義や演習の準備をする暇がなく、そのために、授業がつまらないものになっている。また全体としての明確な計画がなく、授業の展開方法もお粗末である。

演習には学生全体が出席することがないようだ(とくに日本人学生の欠席が目立つ)。もし毎時間、学生がペーパーを準備し、関連文献のリストとともに前もって他の者に渡していれば、もっと意味のある討論が行なわれるであろう。大学院になっても依然として学部のレベル(すなわち「質問-回答」式の)である。大学院の学生はもっと自分自身の理論を創り出すべきであり、また自己の見解の正当性を主張することが出来なければならない。

多くの日本人の教授は、学生が理論的に正しい見解を示すことをうとましく考えているようだ(おそらく「親分-子分」といった文化的理由から)。この結果、不幸なことに、学生は、大学院での勉学の最低必要条件である「同格者」としての扱いではなく、子どもとして扱われ

るようになる。教授は、学生を「教える」というより、自ら発展していくよう「導びく」べきである。(原文＝英語)

(国立, 30代, 男, オセアニア, 社会 3年)

[100] 一般的に、日本人の教授たちの側における、外国人留学生の受け入れ態勢は十分とは言えない。というのは、教授や助手たち自身、私たちをどのように教え、何をすべきかを知らないからである。だから、もし文部省が、彼らにはっきりした指示を与えれば、彼らにも、指導のやり方が明確になり、問題は解決されるのではないだろうか。

アメリカ、カナダ、ヨーロッパの国々には、学位取得者、医学生、エンジニアなどには、「上級試験」を合格すれば、免許証が授与される。日本でも、外国人のために、英語での特別試験が行なわれたら、実に都合が良いと思う。なお、その実施と指示は、文部省が行なうべきである。(原文＝英語)

(国立, 30代, 男, 東南・南アジア, 保健 1年)

[101] もし私が日本人の友人たちや指導教授ともしっかりとした関係を保つことが出来ていたら、勉強の方もうまく運ぶことが出来ただろう。だが、実際には、最後までやり遂げることが出来ず、途中でやめることになってしまった。残念なことだ。(原文＝日本語)

(国立, 30代, 男, 東南・南アジア, 工学 11年)

[102] 留学生をとりまく日本の状況は非常に遅れている。大学の教授たちは、全面的に日本人学生を対象とした教育を行ない、1クラスに1～2人の留学生にかまっているひまはないようだ。

(原文＝英語)

(国立, 30代, 男, 東南・南アジア, —, 10年)

[103] 現在までのところ、最大の問題は講義時間の長さだ。ヨーロッパの大学では、原則として1コマ45分を越えないことになっている。アジアなどからの学生も同意見だった。

(原文＝英語)

(私立, 20代, 男, ヨーロッパ, 人文 5年)

[104] 教官はあまり休講すべきではない。彼らは日本人学生にも留学生にも、もっと時間をさくべきである。留学生は日本人学生より往々にして年上であるが、もっと活発に、勇気をもって、留学生に近づいて欲しい。日本の学生にとって、重要な「先輩—後輩」関係や「内—外」関係は、留学生には必要ない。(原文＝英語)

(国立, 30代, 男, 中国, 人文 3年)

[105] 東京にある大きな大学の留学生は、地方の大学にいる学生よりも、あまり指導を受けていないようだ。私はW大学で、文部省研究生として2年間過した。しかし、専門分野での指導をまったく受けることができず、非常に不満である。それに加えて、私の日本語能力では大学院の授業について行けない。この大学では、修士論文の個人指導さえあまり受けていない。私は、それを後悔している。学問の自由を保ちながらも、専門分野に関して、教授からもっと指導してもらうことを望んでいる。

修士課程を終えたらアメリカへ行って研究したいと思っている。けれども、日本へ来て、日本人のものの考え方や文学を知ることができ、留学先としてこの国を選んだことを悔んではない。(原文＝英語)

(国立, 20代, 女, オセアニア, 社会 4年)

[106] 現在の週1回より、もっとたびたび指導教授に会えれば、留学生にとっては大変助かる。

(原文＝英語)

（国立，30代，男，ヨーロッパ，理学 2年）

〔107〕私は、日本文学を専攻しているので、日本の大学で国文学の研究をするのは、価値ある経験だと思う。いま、自分の研究の進展にも非常に満足している。しかしながら日本の修士号が、将来の私の職業にどれだけ有効か、また日本以外の大学でどのように評価されるか、疑問をいだいている。

一般的に言って、日本の大学前の教育は、狂気のさたである。私はそんな経験がなかったことを喜んでいる。また、大学が、よい職業につくためのものとししか見られていないのは恥ずべきことだ。大学院の学生はともかく、学部生は、まったく勉強もせず、私が期待していたよりも、ずっとレベルが低い。（原文＝英語）

（私立，20代，男，ヨーロッパ，人文 4年）

〔108〕教授，行政担当者の中には，学生を完全に統制し，学生の品行面まで詳細に，把握しようとする者がいるようである。

授業において，幾人かの教授は，留学生に対して教授方法上の工夫をみせなかった。講義で黒板に日本語を書くという教育方法は，日本人学生のみを対象として教えているにすぎない。

（原文＝英語）

（国立，30代，男，中近東，教育 3年）

〔109〕日本の博士課程は論文中心のため，せまい範囲ではすぐれているが総合的な面でたりない面が多い。両方をそろえることはむずかしいかも知れないが，博士課程後期においても，単位制を取り入れることを検討すべきだと思う。（原文＝英語）

（国立，30代，男，東南・南アジア，農学 5年）

〔110〕今まで日本に滞在してわかったことは，大学院のゼミナールやコースで，学生にはほとんど何も要求されていないということ。学生たちは，本を読むことをほとんど要求されていないし，出席率も低い。また教授の授業も退屈で，学生たちをあまり動機づけることもなく，学生たちが欠席するのも当然のことに思える。教授たちは，授業をもっと興味あるものにすべきだ。大学院のレベルで成しとげられる研究成果は，学生自身の関心や努力の結果であって，けっして教授たちの名誉に帰せられるものではない。

私は研究者として，文部省からの援助に非常に感謝している。しかし，この援助も，細部についてみると問題がある。私の大学の図書館では，研究生には3冊の本しか貸し出しをしない。大学の設備の中で研究生には使用が禁止されているものもある。なお，通学用の列車やバスの学割の資格も研究生にはない。もし，これらのいくつかの点が是正されれば，日本における勉学の経験はすばらしいものとなると思う。（原文＝英語）

（国立，20代，女，北米，人文 15年）

〔111〕私の大学での経験には否定的・肯定的な両方の面がある。肯定的な面では，私の研究分野において研究に役立ち，研究を進めるに有益な学生との交流を發展させることができたことである。また，この大学の留学生担当部局の人のびとは，非常に有能であり，私たち留学生の生活を豊かなものにする，様々な企画を立て実施してくれた。

否定的な面では以下の3点があげられる。(1)私の研究上の指導助言者は，私の研究にはわずかな関心しかもっていなかった。文部省は指導教官についてもっと配慮すべきである。とくに学位論文を書こうとする学生の場合には，その学生の研究に，興味と関心をもち，研究上の必要に応じて喜んで尽くしてくれる指導教官をみつけて欲しい。(2)私の大学は，国際的なアカデミックな協同体の形成を目標としているようだが，実際の現実はこの理想からかなりへだたって

いるという感じを私は受けた。パーティ、レセプションに多大な費用が費され、留学生が招待される。しかし学生、留学生、大学側の間には、アカデミックな話題についても他のどんな話題に関しても、率直でオープンな対話の機会は殆どないのである。その結果私たち留学生は、人質（pawns）か見世物（show piecer）として扱われているような印象をもった。(3)留学生（とくに欧米からの）はただ英語で話しかけられるために日本に来たのではないことを、日本人の学生に対して、理解させるべきである。私たちの多くは、能力の許す限り、日本語で大学生活を送ろうとしている。多くの日本人学生は外国人との交流を英語でしなければならないと感じているために、外国人との率直な交流を恐れているようだ。もっとも、この問題は、おそらく、日本人学生が日本語を上手にあやつれる外国人と接触する機会がふえていくにつれて、徐々に改善されることだろう。（原文＝英語）

（国立，20代，男，北米，人文 1年）

〔112〕私は、私の大学の言語学研究についてしか言えないが、まず第1に、基礎的レベルのコースが何もないというのが、大きな欠点である。変形文法、意味論、音声学、音韻論など、将来の学問的準備に不可欠のコースが開講されていない。たぶん、教授たちは、学生が勤勉にやれば自から基礎的知識も学ぶことができると考えているのかもしれない。しかし、言語学のような分野では、そうすることは不可能だ。教授たちは、学生に基礎的な訓練を与えるよりも、自身の特別な研究テーマのみに従事している。私が出席しているコースでは、教授は、1つの小さなトピックだけに関わっていて、言語学全体にわたる文献やトピックスには、何も触れるところがない。教授のつくった参考文献も驚くほど貧弱である。教授は、自分だけが面白いと思う研究トピックスで学生を印象づけようとするのではなくて、全般的な教育（Teaching）をもっと熱心にやるべきだと思う。アメリカの一流大学と比べて、指導と研究のレベルは、きわめて低いと思う。（原文＝英語）

（国立，20代，女，北米，人文 2年）

〔113〕大学のシステム及び行政は、相当程度、留学生に対して、親切である。その心づかいとその意図に私は感謝している。

一般的に、年輩の教授たちと若手教員の間には、あるちがいがあある。55歳以上ぐらいの人々は、真剣で、上品で、理想主義的であり、古き良き時代をほうふつさせてくれるようにみえる。若手の方は、はるかに現実的である。彼らは長期の展望とか夢に欠け、いわば「一生ずっと年金待ち」とでもいうべき感じがする。

私が日本人の教授陣についてのぞむところを言わせてもらうならば、自信ということである。彼らは、自分たちの能力（の高さ）について自覚すべきであるし、そうできるように努力すべきである。私は教授陣から、なぜ日本のかわりにアメリカへ行かなかったかと何度も尋ねられたが、これには憤がいさせられた。（原文＝英語）

（国立，30代，男，台湾・中国，保健 4年）

〔114〕私が日本にきた時、私は自分の研究の目的をはっきりと定めていた。私の教授が、私が興味を持っている分野と同じ分野の研究をしていることを知っていたので、その教授から良い指導が得られ、修士課程を終えることができると思っていた。彼らは私の意向を聞き、まず入学試験に合格するよう言った。しかし私が試験にパスすると、その教授が多忙のため他の若い教授陣が我々の手助けをしてくれることになった。驚くべきことには、彼らのうちで、私が興味をもっている分野に興味を持つものは誰もいなかった。そして今、私は、最初の目的をたずさえて、主張し続けるかぎり援助を得られないため、何をしたらよいかわからない状態で途方に

くれている。

来日前、奨学金を得るため文部省が示した条件の一つは、はっきりした研究計画を持っているということであった。が、日本へやってきて、本当は、何も目的を持たずにやってきて何でも研究できるものを受け入れる方がいいとわかった。そうしないと挫折感が大きくなってしまおうだろう。(原文＝英語)

(国立、30代、男、中南米、工学 2年)

[115] 大学は、その国の一種のショーケースである。多くの意味に於て、大学は最上のものが集まるところであり、思想の交易場でもあり、職業訓練以上の何かであるべきである。

入試制度を始めとして、国立諸学校の教育の原則は全て誤りである。あまりにも試験を強調しすぎるあまり、思想と感情の両面で狭さを作り出している。「何を」ではなく、「いかにして」を、教えるべきである。多くの志願者の能力や将来性を決定しうる唯一の方法は、入試であるという人もいるが、これは馬鹿げている。日本の大学へ入る方が、アメリカの大学へ入るよりも、難しいという考えは、端的に言ってほんとうではない。アメリカの最高級の大学へ入るのは、日本より難しくないところではない。ある意味では、単にテストの結果のみが考慮されるのではないからもっとむずかしいとさえいえるだろう。コミュニティ活動、学校での成績、リーダーシップ、創造性、芸術と運動能力、及び性格、といったものが、アメリカの難しい大学が入学にあたって考慮に入れるものである。

このタイプの選抜は、財政的にみて、不可能であるように見えるかもしれない。しかし、通常、入試委員会は、効率のよいものである。日本の入試システムは非人間的なものであり、競争と、利己主義を創り出す。入学のプロセスは、キャンパスの雰囲気的确立のためにも、また、国家の生存のためにも、きわめて重要である。もっと、時間と労力をかけることは、そうする価値のあることであり、もっと人間的な、もっと利己的でない、入試システムを採用しなくてはならない。

大学は、創造の場であり、社会の問題に対して異なった見方や、その改革を実行しうる場である。私は、日本の大学に知的交流と、外国人スタッフが欠如していることに驚いている。私は公務員としての教授に対する、いろいろの規制というものはよく聞いている。しかし、外国人の教官の採用に対してきびしい姿勢を取り続けるかぎり、アメリカや、ヨーロッパの大学のレベルに達することはできないであろう。もし、国際主義というものがあるとすれば、それはどこにもましてまず、大学になければならない。(原文＝英語)

(国立、20代、男、北米、人文)

[116] まず大学院に進学する意味は将来研究者になるためであり、日本での留学後、日本対母国の技術移転のことにも役割を持つことである。そのために、1) 適切な高等の学問、研究環境 2) 学位(帰国後のため)が必要である。しかし現在、日本の大学では(私の知っている限り)次の問題点が挙げられると思う。(大学院以上)

1 研究テーマは不適當であって帰国後、新しいテーマを探さないといけない。(できれば国際機関(国連大学)でとり上げている母国の問題を対象としてテーマを決めたら、帰国後でも研究を続けられるだろうと思う。)

2 学問体系、研究にあたっていろいろな基礎的学問が必要であるが、しかし普通日本人の学生は自分で探し、自分で身につけることが多いが、留学生の場合(時間・言語)その体系を探すことは困難でもある。各分野の standard な体系ができたなら…(1年間コース)研究に必要な科目(時に英語の授業も必要である)を含むようなカリキュラムである。

3 学位に対する審査基準は不明確であること。精神的に不安感がある。(原文=日本語)
(所属不明)

〔117〕。大学院の講義内容が専門化しすぎる。従って関連が少ない科目は難しい(またはおもしろくない)。提案として、学部の講義内容を高度にしたような大学院の授業が行なわれることが望まれる。

◦実験の比重が、単位を取ることに以上に大きい。留学生として基礎学力が不足だった私にとっては、できればもっとバランスの取れた研究をやりたかった。(原文=日本語)

(国立, 30代, 男, 韓国, 工学 6年)

〔118〕一般的に言いますと、日本の高等教育、つまり大学や大学院の教育内容の水準は相対的に低いと思います。母国の大学と比較しますと、すぐ頭に浮ぶのは大学の設備の不足です。私の大学しか知りませんが、この古い伝統をもつ学校の多くの校舎・図書館の設備、事務的な手続きは時代遅れだという印象があります。

実際に、授業で教えている学部の科目の内容に関してはよく知らないから何とも言えませんが、せめて大学院(私の所属している研究科)の場合は、今出ているゼミナールや演習の内容は母国の大学院と比べたら、より良いか、より悪いかというよりも、その雰囲気や授業のやり方とその重点の置き方が違うということに気がつきました。試験は全然ないし、それ故にアメリカのように学生達は知識の取得のためではなくて、試験の成績に集中しないのでいいと思います。むしろ、発表や議論や論文や翻訳などのようなことをやっていて、同じ専攻の人はみんな一体となっているような感じです。私の大学の教授は皆、自分なりの専門分野について、とても学問的に優れた知力のある先生たちだと思います。私は、私の大学の教授を尊敬しています。私のまわりにいる大学院生は、ほんとうに真面目に研究をしていることはたしかです。

(原文=日本語)

(私立, 20代, 男, 北米, 人文 2年)

〔119〕日本の大学の水準ではかなり高い方ですが、きびしさがあんまり足りないと思います。大学院の水準については、アメリカや他の国のように修士課程と博士課程をはっきりわけているのが、あまり気にいっていません。大学院での理工系学生がとてもいそがしい(実験と勉強)のに対して、文学系や経済系の学生が非常にひまなのは、おかしいと思います。文科系の大学院はなんのために開いているのだらうと思うほど疑問をもっています。(原文=日本語)

(国立, —, 男, 東南・南アジア, 理学 8年)

〔120〕1 大学教育について

①学部、修士での授業はもっと先生と学生の間の **Communication** を作るほうが良い(例えば宿題などを通じて)

②学部での外国語教育はほとんど効果がない。もっと会話時間を増したほうが良いと思う。

2 大学教授について

先生は自分の指導する学生以外とは殆んど関係のない存在となっています。そのため、学生との理解は深いとは言えません。先生は授業等を通じて学生から **feed back** を求め、授業内容、教え方等を改良して欲しい。

3 日本人学生について

大学教育の影響もあるが、試験を重視した勉強のしかたをする人が多い。そのため、試験が終われば勉強したことが長く残らない。

4 大きな国立大学では設備がととのって良い環境ができていると思います。しかし平均的な

水準に関してはまだ疑問です。日本の大学に対する評価を高めるために、この水準をあげる必要があるのではないかと思います。（原文＝日本語）

（国立，20代，男，東南・南アジア，工学 9年）

〔121〕大学教育について

Manpower の利用をまだうまくしていないような気がします。たとえば一つの学科をいくらかの講座にわけています。一つ一つの講座の教授団（教授・助教授・講師・助手など）が独立しすぎる（研究上）ため、各先生担当の講義の内容は重なったり、或いは大事な部分を、時間の制約のため教えられていない現象があります。言い換えれば、教授の間に（全学部一体）学生に対して研究上の指導において、もっと協力的で計画的に考えたら、もっと楽で、もっといい結果が出るのではないかと思います。（原文＝日本語）

（国立，30代，男，台湾，工学 3年）

〔122〕① 大学院生に関してよく感じることは、研究することの意義、あるいは自分の人生にとっての研究の位置づけなどについて、あまり真剣に考えていないことである。あまりにも貧困問題についてのみ悩んでいる人が多いと思う。

② 人間関係と研究とを区別しないこと（教授，院生，学生）。まず初めに人間関係があり，それを中心に研究が行なわれている場合が非常に多い。私は，むしろ逆でなければならないと思う。そうでなければ，研究の本当の意味がわからなくなり，目的が曖昧になる可能性が生じると考えるからである。結果としては，

㊤研究の評価が情緒レベルで行なわれるようになる。

㊦研究活動が作業中心的になる。

㊧研究が手段化される。

㊨上下関係が厳しくなり，コミュニケーションが一方向的になる。互いに生産的な批判ができなくなり，目上の人がボス的存在になる。

㊩“なかよし”集団が形成される。

③ 非常に勝手なことを言わせてもらいましたが，すぐれた教授，研究者，学生が多くいらっしゃることは否定できない事実である。私自身もそのような方々のご指導をいただき，心から感謝しています。しかし，興味深いことは，上述したような方々は一般に批判的になっているような人々ばかりであることだ。（原文＝日本語）

（国立，30代，男，中南米，教育 4年）

〔123〕日本の大学教育は日本の社会構造のように「たて」構造である。あらゆる面にしても，団体的，グループ的な意識が個人よりも大切である。（原文＝日本語）

（国立，20代，男，台湾，工学 2年）

〔124〕日本は，留学生にとって住むには良い国だが，高等教育を受けるには難しい国である。世界の中でも最も高い教育水準を誇りながら，創造的で独創的な業績は生まれにくく，新しいアイデアや様式も受け入れられにくい。また講義は専門用語が不足しているためか，理解しがたい。西洋語を尊重し，ドイツ語，英語，フランス語から借りた言葉をそのまましばしば片仮名で使用するためよけい理解が難しい。その上，それらを日本の漢字で表わそうとしても，元の専門用語と一致するものがなかったり，新しい専門用語に当てはまる日本の学術語が欠如したりしているのである。日本の学生もこのような問題に直面しているのではなからうか。

日本の教授，行政者，学生は非常にすばらしい。問題は制度そのものにある。また，外国では日本の大学についての情報が不足している。それらの情報を伝達するのは文部省の役目であ

るが、不幸にも、文部省は、留学生への配慮が不十分であり、たとえば、留学生を不適切な大学や教官に割りあてて留学生の不満を増大させている。他の国のように、留学生を受け入れる専門的な機関が創設され、処理に当たるようになることが望ましい。このような機関ができれば、学生の勉学の便宜をはかり、様々な大学、授業内容、研究所等の詳細な情報を得ることもできる。（原文＝英語）

（国立，30代，女，中南米，理学 5年）

〔125〕大学院では勉強の雰囲気があって、いつもむずかしい問題に向っています。みんなはやっていることを楽しんでいるようです。この様子を見てみると、当然ながらそのような勉強のしかたが自分の習慣になります。それはよいと思います。

問題点としては、特に英語です。私が英語を分らないことが問題ではなくて、日本人が英語を分かると言う問題です。日本語を話す上で一番大きい障害は日本人です。日本人はどこでも英語で話したがりです。（病気みたい！）私は日本語を話していても、しかも相手は私がメキシコ人だと言うことを知っていても英語を話したがる。授業は日本語で言っても、内容の50％は英語です。いい感じだからですか、簡単だからですか、自慢したいからですか、よく分からない。結局、日本語で相当する単語を分かっている。その単語が物理の辞典に載っていても、あまり使いません。ときどき、日本人も日本語の言葉を知らない。困りますな。

（原文＝日本語）

（国立，20代，男，中南米，理学 2年）

（4）学位をめぐる

〔126〕日本の博士学位は一般に取得することが大変難しい。台湾では学位の有無が比較的重視されるため、台湾の学生はわりに取得の容易なアメリカへ行ってしまう。例えば、私は台湾の国立S大学の数学科で16年教えており、基礎もかなりしっかりしている。にもかかわらず私の在籍する大学では修士課程から始めなければならないばかりか、2年学んでやっと修士号が取得できるのである。私が他の大学で教えた学生は成績は普通であったがイギリスに行き、3年7か月で博士号を取得してきた。このような点を日本政府がよくよく考慮されるよう提案したい。

（原文＝中国語）

（国立，40代，男，台湾・中国，理学 2年）

〔127〕修士の学位を得るのに、2年間では、外国人にも日本人にも、短かすぎる。また、日本人が理学博士の学位をとるのはやさしいが、外国人には少しむずかしい。なぜなら、研究に関する情報はすべて日本語で書かれているし、我々は、2年の奨学期間をおえると文部省が何の理由もなく奨学金ストップするという不安にさらされているからである。

日本の大学の学生や事務当局に関しては言うことはないが、理学士、理学修士、理学博士の課程を履習している学生が論文を英語で書ければ、とても素晴らしいことだと思う。

（原文＝英語）

（国立，30代，男，アフリカ，工学 3年）

〔128〕日本の高等教育は確かに国際的な水準に達している。しかし、学位（とくに、社会科学における博士号）は、一般には、課程を終了した時には授与されない。なぜそうなのか、その理由は我々にはわからない。一定の学問研究の水準に到達したら、博士学位が授与されるような慣行を確立すべきだと思う。教授陣はとても協力的であり、力になってくれたが、我々外国人留学生と日本の学生との間の自由で率直な議論は、どういうわけかできなかった。

(原文=英語)

(国立, 30代, 男, 東南・南アジア, 社会 2年)

[129] 私にとって日本の修士号は, まったく不必要である。修士2年とその後続く博士課程3年は長すぎる。博士号は, 博士課程を履修することがなくても, それ相応の論文を書くことによって, 授与されるべきである。(原文=英語)

(国立, 30代, 男, ヨーロッパ, 工学 2ヶ月)

[130] 1 博士学位を獲得することに関して

博士学位取得の方法が西欧諸国と同じであるということは絶対に必要なことである。統計的にみて程度の低い学生のみが日本へやってくるというのは, ばかげている。米国, カナダ, 英国へ行くほとんどの学生は例外なく博士号を取得するが, 一方日本へ来る学生, とくに社会科学部門の学生は, 大部分, 博士学位を取得できない。西欧では, 博士号はその保持者が専門的研究活動に従事するという能力を証明するものであり, 一種の通行証である。これに対して日本では博士号は終生の研究活動の証しであるように思われる。日本の方法はある程度長所もあるであろう。そして, 確かに, 博士課程に入学して, 修了することは, 専門職に従事するのに充分であるから, この方法は日本の学生には問題はないであろう。しかし学位を持たず帰国する留学生にとっては致命的なものである。

2 図書館のシステム

a 少なくとも本1冊につき何部かのコピーは, 一般の図書館におかれるべきである。現在では, 本は教室室におかれており, 教官が自由に学生に貸し出すようになっている。けれども, たとえば異なるキャンパスの工学部で使われる本が, 経済学部 of 学生に必要な時もあるのである。b 閉架方式のかわりに, 本は学生が自由に出入りでき読むことのできるラックにおかれるべきである。本の紛失を防ぐ適切な方法は, 簡単に見つかるであろう。(原文=英語)

(国立, 30代, 男, 東南・南アジア, 社会 2年)

[131] 日本の大学は博士の学位をとることを非常にむずかしくしている。それで, 私の知る範囲では, スリランカ人で日本において博士号をとった人はひとりもないという結果となっている。私は, このことが, 日本の博士課程の評価を下げてきた要因であると思う。

(原文=英語)

(国立, 30代, 男, 東南・南アジア, 工学 3年)

[132] 文部省と大学は, いわゆる無意味な「お役所仕事」的なことがらのかわりに, 学生の学問的能力と学問的業績を, 第一義的に考慮するべきである。奨学金の貸与期間(文部省によって与えられる)や, 博士課程, 修士課程等への進学は, 明瞭で公開の原則を守るべきである。学生の死活の利益に関しての, 秘密主義や舞台裏の工作は, 廃止されるべきであり, そうすることで, 学生がいわゆる政治的な遊泳術に浮身をやつすかわりに, 学問的関心に精力を集中できるようにするべきである。

学位授与は「国籍に関係なく」なされるべきである。つまり, たとえば博士号のための形式と学問上の条件をすべて満たしている学生には, P h. D. が与えられるべきである。

(原文=英語)

(国立, 30代, 男, ヨーロッパ, 社会 2年)

[133] 学位の問題であるが, 日本の大学での学位取得があまりにも容易なものよくないが, むずかしすぎると困る。一般に, 日本の学位は取ることがたいへんむずかしすぎるといわれている。実力のある留学生であれば早く出してほしい。(原文=日本語)

(国立, 30代, 男, 台湾・中国, 社会 2年)

(5) その他

〔134〕留学生のための研究計画の立案と実現に際しては、留学生の将来の仕事との関連を充分に考慮にいてほしい。現在は日本の社会のみを念頭において計画が立てられているようである。

大学の事務局に、外国語のできる人を配置してほしい。そうすれば、日本へ来たばかりで、日本語で意志を伝えることができない留学生にとって有益である。(原文=英語)

(国立, 30代, 男, アフリカ, 工学 2年)

〔135〕日本語を上達させる機会をもっと与えてほしい。また日本の民族的慣習やその他の特質を理解するための機会も、もっと多く与えてほしい。

我々は家族を故国に残してきており、日本で孤独な生活を送っているのであるから、あなたがたの暖かい友情を必要としている。

日本で奨学金を得る機会をもっと与えてほしい。他の先進諸国にくらべて、そのチャンスが少ないように思われる。(原文=英語)

(国立, 20代, 男, 台湾, 工学 2年)

〔136〕① 図書館は書籍や雑誌を単に所蔵するだけのものではない。日本の図書館は蔵書量は多いが、そのシステムをみると発展途上国、(たとえばスリランカ)よりもよくない。真面目な学生にとって、大切な時間の多くを資料の所在探しに空費するのは無駄である。

② 授業とくにゼミナールでは学年を通じて、1冊の英語の本で行なわれる。英語で書かれた本を使用することは留学生には有利かもしれないが、これだけでは不十分であろう。本を1冊しか使わない(ときには1, 2章だけで終わることもある)のはまったく満足できない。大学院課程には授業の細目が示されていない。

③ 日本の大学は、学生に精一杯の勉強や幅広い読書を課していない。大学は単なる機構でしかないようだ。たとえばスリランカでは、文学士課程においてもさまざまな試験が課され、猛勉強が要求される。ところが日本では大学院生以外の一般学生は、勉強よりも課外活動に熱中している。そして発展途上国では考えられないようなすばらしい施設や設備があるにもかかわらず、あまり役立てられていない。

④ 社会科学系の留学生は、ただ大学の文化交流のためにのみ受け入れられているようだ。ところが実際はその国の文化、政治、教育制度には殆ど関心が示されていない。大学とは国際的な場であるが、私たちの大学はこの点では非常に遅れている。(原文=英語)

(国立, 30代, 男, 東南・南アジア, 教育 3年)

〔137〕日本の大学教育について、留学生である私にとって何より一番関心のあることは、やはり三年間(研究生一年間)の修士課程を終えて、母国に帰ってどれくらい日本で学んだものを発揮するか。会社員になるか、それとも先生になるか。前者の場合では別に問題が起こらないと思う。後者の場合、修士だけでは実力と学歴との面で物足らないと気がついている。あらゆる努力をして、先生になりたい留学生の実力と学歴との問題を解決してほしい。

(原文=日本語)

(国立, 30代, 男, 台湾, 社会 2年)

〔138〕私は大学院にはまだ入っていませんが、過去一年間研究生として大学生活を送り、以下のようなことを感じました。

日本の大学教育：レポートや発表があるから大変いいと思います。

大学教授：厳しくて、学生が勤勉に勉強します。

大学管理：大変便利で、学生のために役に立つと思います。

日本の大学生：いろいろのクラブがあるから友情がよく育つと思います。（原文＝日本語）

（国立，30代，男，東南・南アジア，教育 1年）

〔139〕 1) 日本の大学は外国人留学生を受け入れる用意ができていないような感じがします。少くとも人文・社会科学関係の場合，どのように指導するか，留学生が持っている学問上の問題点は何であるか全く無関心ないし分からないように見えます。

2) 大学管理は非常に形式的であるのではなかろうかと思います。

3) 回りにいる学生（院生）は皆，親切です。

4) 非常に閉じられた社会，日本という印象が，大学でますます強くなって行くのはなぜでしょうか。

5) 日本語が読める，書けるように日本語教育を強化すべきであると思います。すべての講義，レポート書きが日本語で行われている限り，現在の留学生の日本語の実力では留学生活が無意味になりがちであると考えられます。（原文＝日本語）

（国立，30代，男，韓国，教育 2年）

5 留学生からの提言

(留学生への施策、制度的な改変、学費、大学への配置、住まい、ほか)

〔140〕私の留学の目的は臨床研究を行うことである。大学病院の設備や技術は、いずれも私の国より新しく優れている。教授は非常に親切に学術的な指導をして下さるばかりでなく、生活面でも大いに援助して下さい、大変有難く思っている。研究室の日本人学生もすすんで手助けをしてくれ、言葉の障害を克服して臨床研究をすすめる上で大いに役立っている。また、外国人留学生に対し、大阪大学が生活上の配慮をし、完備された宿舎に生活させて下さることを感謝している。おかげで安心して学習や研究が出来る。(原文=中国語)

(国立、30代、男、台湾、保健、1年)

〔141〕私は1979年10月にこの大学に入学した。大学院の修士課程に進むつもりである。日本に来て最も深い印象を受けたのは、ゼミ制度の体験で、これは専門分野の勉学ではきわめて有効である。教授が学生個々人の専攻テーマに応じて教えてくれる。専門的な人材を育てる上ではこれは重要な方法である。

また、図書館の開架式(私の国ではわずかの大学が採用しているほかは、ほとんど閉架式)は、学生にとって強烈な知識欲を生み、書籍と接触することを通して、知らず知らずのうちに感化を受け、たいへんよいと思う。(原文=中国語)

(国立、20代、男、台湾・中国、社会、1年)

〔142〕①奨学金

日本政府からもらう奨学金は、私費留学生に比べては十分だが、日本の物価高を考えて見るとぎりぎりという状態である。

②日本学生

ある限られた学生は大変親切だが、ほとんど無関心である。自ら自分の心を開いてくれる余裕があってほしい。

③その他

大変満足。ならうべきことがたくさんあると思う。(原文=日本語)

(国立、20代、男、韓国、工学、1年)

〔143〕日本の生活費と学費は私の母国に比べると高すぎるので、奨学金を貰っていない私のような外国留学生にとって、経済的圧迫の下でひたすら勉強することはなかなか難しい。ですから出来れば、日本政府は留学生の為に もっと沢山奨学金を準備することが望まれます。(原文=日本語)

(国立、20代、男、台湾・中国、農学、1年)

〔144〕図書館の利用について、僕は二つの建議があります。

一 他の大学の図書館も簡単に利用できるようにしたい。

二 国会図書館のような所も図書を一週間ぐらい借り出せるようにしたい。

なぜならば、私達の読むスピードはそんなに速くないから、書物を家でゆっくり読むことがとても重要であると思います。(原文=日本語)

(私立、20代、男、台湾、社会、2年)

〔145〕1. 日本語の問題

学部の留学生は殆ど学友会の日本語学校に一年以上の日本語の勉強を受けますけど、大学院

に入学する留学生、あるいは研究生を対象とする日本語の訓練制度がありません。研究しながら、日本語の勉強もできる方法がありませんでしょうか。

2. すまいの問題

家賃の高い、また、礼金、敷金などを取られる世界唯一の下宿経営振りに本当にいうことがない。でも注意を払わなければならないのは、部屋の広さを拡大することです。人間の心の広さは、その住まいのスペースからよく影響を受けるものといえます。日本の狭い下宿に長期間暮らすと、心も狭くなるはずで。日本にとって、このように沢山の心の小さい留学生を造るのは、いいことではないと思わないでしょうか。

3. 指導教官の資格

日本の外に足を出すことのない先生は、留学生の指導教官を担当なさるのが不適當だと思います。いいかえれば、自ら、留学の苦しさ、寂しさを体験した先生が留学生の面倒を見るのは上手ですから。(原文＝日本語)

(国立、20代、男、台湾・中国、工学、3年)

[146] 留学生の場合、結婚して家族同伴の方(私は家族同伴)も多いと思われます。しかし、同伴家族に対する対策が別になので、この問題に対して考慮する価値があるのではないかと意見を申します。(原文＝日本語)

(国立、40代、男、韓国、農学、6年)

[147] 他のことはだいたいいいと思いますが、ただ次の一点だけが不満足です。

留学生の勉学を奨励するために、研究設備をもっと充実すべきです。たとえば、深夜まで(あるいは24時間)自由に使用できるような《経済学》研究室の設置などです。(原文＝日本語)

(国立、20代、男、東南・南アジア、社会、6年)

[148] (1)学問的水準に関して; ①授業でなぜ、学術書の逐語訳をするのだろうか。それは、価値のないことだ。英語、ドイツ語などの語学教育が本来の目的ではなくて、書物の中味がより重要なのである。書物や論文の実質な内容に目を向け、それについて討議すべきであろう。②外国人研究者にとって、英語を日本語に翻訳するのは意味がない。なぜなら、外国人の側は、日本語で十分な意思伝達ができないからである。③学問的な水準を上げるためには、もっと研究の方法が教えられるべきだ。④大学院生には、研究室が与えられるべきである。

(2)外国人留学生に関して; ①日本で生活し研究するために、日本語は基本的に重要であるから、日本語教育がなされるのは、非常に適切である。けれども、すべてのガイジンが日本語をマスターすべきであると期待するのは問題だ。未知の言語を学ぶのに、あまりにも年をとっている人もいるからである。②学位、とくに博士号に対する期待は高い。職業や昇進のためにそれが重要だからである。また、留学生が本国へ持ち帰る日本のイメージにとっても重要である。日本で4、5年過ごして信用のおける資格もなしに、帰国するというのは、屈辱的であり、到底納得できない。というのは、ほとんどの研究者は、業績に基づき選ばれて、やって来ているからだ。すべての人びとは、彼らの職業で成功したいと思っている。良い訓練と資格を与えて欲しい。③図書館のシステムは、現状のままでは非常に不便なので改善されるべきだ。④外国人留学生のためのカウンセラーが置かれるべきである。⑤もっと多種多様なコースが開設されるとよい。(原文＝英語)

(国立、30代、男、東南・南アジア、教育、4年)

[149] 日本の大学は、学生が外国のサマースクールに出席して得た単位も承認し、受容すべきである。私は昨年に、ロンドンの工芸学校のサマースクールに参加した。大学が掲示したポスタ

ーでこのサマースクールを知ったのである。サマースクールでディプロマを得、一定の評価を受けたのであるが、私の大学の経済学部は、それを私の修士課程の単位としては承認しようとしない。同じサマースクールに出席したアメリカの友人は、アメリカの大学での彼らのコースにサマースクールでの単位を加えることができ非常に幸運だったという。なぜ日本の大学は、アメリカの大学が単位を承認しているのにそうしないのか。日本の大学は、欧米の大学と競争するためには、このような古い体質を変えるべきである。(原文=英語)

(国立, 20代, 男, 東南・南アジア, 社会, 5年)

〔150〕修士課程や博士課程では公式用語として英語を採用すること。そうすればコミュニケーションは容易になり、日本の教育制度ももっとよく理解されると思う。(原文=英語)

(国立, 20代, 女, 中南米, 保健, 1年)

〔151〕1. 私の大学での留学生のための日本語教育は十分ではない。その教育プログラムはもっと集中的、実践的なものにすべきで、休日を減らし、最低6～8か月(夏期休暇を除く)くらい充てるべきである。6か月間のプログラムでも、わずか2～3か月しかやられていない。

2. 外国経験のある大学教員は、ほかの人が保守的なのに比べ、留学生に多大の理解をもっている。

3. 日本の大学で学ぶ留学生も、ふつう、東京、大阪、京都などで開かれる学会に出席する必要がある。文部省はその旅費を支給して欲しいし、その額も、インフレなどを考慮してもらいたい。

4. 留学生には、その専攻分野での学習を深めるため、特別の訓練が与えられるべきである。

5. 留学生の中には、指導教室に使われすぎる者もいる。彼らはその教官のために過重な仕事を負わされているが、そのような不必要な仕事は与えられるべきではない。(原文=英語)

(国立, 30代, 男, 東南・南アジア, 農学, 5年)

〔152〕大学に到着して間もない学生のために、図書館、コンピューター・センター等、学内施設の利用案内を、留学生に最もわかりやすい言語で書いたものがほしい。

チューターは、何をすべきなのか、正確に把握していないように思われる。文部省留学生のためのチューターの役割を記した手引きを作ってはどうか。(原文=英語)

(国立, 20代, 男, 東南・南アジア, 工学, 3年)

〔153〕私の専攻分野では、資料の解釈ばかりが強調され、創造的な思考力をきたえることには十分な力点がおかれていない。日本の大学には、日本人学生にも留学生にも、カウンセラーが必要である。このカウンセラーは、学位を有するくらいの人で、実質的に学生を助ける力を持ち、行政の単なる代弁者とならないような身分が与えられるべきである。

留学生向きに、日本理解を助けるような本が出版されると良い。

心理学の分野にもっと多くの留学生が受け入れられるべきだ。

非英語圏の留学生で、(もし日本語ができないなら)英語をある程度話したり、書いたりできるようになるために、文部省はその方策を考慮すべきである。

私は言葉の問題のためにノイローゼになった学生を知っている。大阪外大での8か月の教育は必須である。

留学生問題についてはもっと心理学的な面からの調査研究もなされるべきであろう。(原文=英語)

(国立, 20代, 男, 北米, 人文, 2年)

〔154〕1. 奨学資金はアカデミックな側面を重視し、政治的なしんしゃくは避けるべきである。

2. 大学を選ぶ際、留学生自身にもしかるべき民主的な参加権を与えるべきである。
3. 日本の各大学への留学生の配置は、留学生がそれぞれの学問上の目的を達成しうるよう配慮すべきである。

4. 日本の高等教育の国際化に伴い、とくに博士号の獲得の場合には、その伝統的、制度的な障害が除々に取り除かれるべきである。(原文=英語)

(国立、40代、男、中近東、農学、6年)

- [155] 1. 住居がもっとたやすく見つかることを希望する。留学生が、公営住宅を借りられるようにするというのも、よいかもしれない。

2. この場でのべるのは、ややまとはずれであるかもしれないが、日本は本当に、美しい国だと思う。もし私が、旅行して鑑賞することができればの話であるが。この国の美を、留学生がもっとやすい費用で鑑賞することができるようにするための計画はないだろうか。

3. 研究テーマが提案されるたびに、たびたびもんちゃくが発生する。しばしば指導教官がテーマを決定する。研究者は、日本にくるまえに問題をいだいており、私の場合、そのような問題を追求したかった。指導教官の選択が、研究者のそれとちがうとき衝突が発生する。私の提案したいのは、研究テーマは、最終的な配属の前に決定されるべきであり、研究者は彼の期待するものを、また指導教官はその研究のための義務を、それぞれはっきりさせることができるよう、両者はなるべく早い時期から、連絡するということである。そうしないと、研究者は、自分の興味のない研究をするよう強いられたと感ずるだろうし、指導教官にしてみれば、自分の専門以外のことを、教えるという、重荷を背負わされることになるからである。(原文=英語)

(国立、30代、男、東南・南アジア、保健、3ヶ月)

- [156] 日本は、すくなくとも修士の学位をもっている人を招き、最新の技術レベルの中で、彼らを技術者として訓練すべきである。現在のところ日本は、学士、修士方取得のための学生を、主として招へいしているようであるが、それは日本のためにも、また発展途上国のためにも、何の役にもたたない。(原文=英語)

(国立、30代、男、東南・南アジア、保健、2年)

- [157] 1. 可能ならば、文部省の奨学金を得る外国人留学生は、どの大学で学ぶか、自分で自由に決めるチャンスが与えられるべきである。もしそれが不可能ならば、少なくとも三つ位の大学から選べるようにすべきである。

2. できれば、文部省の奨学生は、自分の学部について何もかも知った後に、つまり、ある特定の大学に入ってから、少なくとも三か月くらいたった後で、自分の指導教授と専攻を選べる機会を与えられるべきである。

3. 文部省は、合理的理由があるときは、学生が、ある程度の期間の後、転学を希望するときには、これを助けるべきである。(原文=英語)

(国立、30代、男、東南・南アジア、工学、4年)

- [158] 宿舎について述べたいことがある。留学生を日本人とは別の寄宿舍にに入れるのは、離れ島に住ませるのと同じで、日本人と留学生の相互理解を妨げる。また、宿舎内ではふつう英語が使われるので、日本語を使うことも制限されてしまう。(原文=英語)

(国立、20代、男、ヨーロッパ、工学、1年)

- [159] 学生の中のあるものは、独立して住みたがる。敷金、権利金というものは、外国人の気分を悪くさせるだけでなく、留学生が独立して住むことを、ほとんど不可能にさせる。大学は留

学生が余分な出費をすることなく、よい部屋や住居を見つけられるよう手助けをすべきであると思う。(原文=英語)

(20代, 男)

[160] 自国の大学で十分な学問的業績をあげてきた留学生は、日本ですぐに、大学院や、学位をとるための講義を選択できるようにすべきである。ヨーロッパやアメリカでは、留学生はたった20か月で大学院を終えることができる。専攻コースの重要なものの中から選択して、それを20か月で学習し終えるようにすれば良いと思う。(原文=英語)

(国立, 30代, 男, 東南・南アジア, 工学, 4ヶ月)

[161] 私は研究生として、日本にきた。来日以前には、大学院にはいるために、自分の研究をどのように続けたらよいかという情報は、まったく得られなかった。日本語がむずかしかった上に、日本政府(すなわち文部省と大学)は、日本でどのように学ばよいか、どのようにして修士や博士の学位をとるのかについて留学生にくわしく説明してくれる“特別のガイダンス”をしてくれなかった。私が、政府間ではなく、大学間のプログラムで来日したからであろう。研究生でいる間私は日本語の学習以外まったく何もしなかった。

日本では、大学を卒業して来日した留学生は「研究生」として扱われるが、この方法は変えるべきだと思う。大学を卒業してきた留学生にとって望ましいのは、研究生としてではなく、直接大学院の講義を受けられるようになることである。ヨーロッパやアメリカでは、わずか10~20か月でグラデュエイト・コースを終えることができる。日本では、修士課程でも最低24か月かかる。なお、共通言語として英語を使用する大学を一つ作ると良いと思う。(原文=英語)

(国立, 30代, 男, 東南・南アジア, 工学, 2年)

[162] 1) 私たちは、日本での研究を前提に奨学金に応募したのであるから、すでに研究プロジェクトや研究目的をもって来日している。だから文部省あるいは教授は、私たちをうけいれるさい、我々が何を研究したいと思っているのかを正確に知っているはずである。だが、割り当てられた大学に着いてみると、研究のプランがそこでは遂行できない場合がよくある。だから、大学への配置にはもっと注意を払ってもらいたいと思う。なお、私たちが前もって用意してきた計画を変更しなければならないときでも、受け入れてくれた教授陣には感謝している。

2) 奨学金をもらっている学生の間で共通している問題は日本語である。日本で勉強したいと思えばまず日本語を一生懸命に勉強せねばならないことは、十分よくわかっている。幸運にも私の場合、日本語の問題はそれほど厄介だとは感じなかったが、最初のうちは、セミナー(演習)や授業についていくのが非常にむずかしかった。だから少なくともいくつかのセミナーは英語でなされるのがよいと思う(私たちが日本に滞在する期間はそれほど長くないので、日本語の学習に多くの時間を費すことはできない)。

3) 修士課程での教授法はややトラディショナルである。私は先生と学生とが授業中もっと議論をする方が良いと思う。学生はただ受身であってはならない。

4) 事務局に関していえば、学生部の職員は非常に有能である。私自身の意見をのべると、彼らは非常によく私たちを助けてくれるのでとてもめぐまれていると思う。(原文=英語)

(国立, 30代, 女, 中南米, 理学, 3年)

[163] 日本での学費は相当に高く、生活も容易ではないから、日本政府は、奨学金を受けていない留学生に対して、学費の一部を補助すべきである。(原文=中国語)

(私立, 30代, 男, 台湾・中国, 社会, 3年)

[164] 昭和54年4月に来校以来、4月から6月末にかけて卒業後教育を受けた以外は、歯科医免

許がないという理由で、臨床経験を学ぶことが許されていない。医師免許がなければ患者を看ることが出来ないという理由による。私の場合、自国ですでに免許を取得し、しかも数年間の臨床経験もある。しかるに、日本では患者を看ることが出来ないで、臨床と理論を実際に結びつけることが出来ない。私個人について言えば、専門学校を卒業し、国家試験の前にまず予備試験に合格しなければならない。その後で1年間の実習をして、やっと国家試験を受けることが出来る。全てが順調に行っても3年はかかり、もし順調でなければ4～5年、さらにもっと長くかかるかもしれない。免許がないということだけで患者を看ることが出来ないとすれば、専門分野でのしっかりとした学問を身につけることは出来ない。

この問題について当局が少しでも寛大な扱いをされ、免許未取得の留学生在が実習医師のように、正規の医師の指導の下で臨床診察を行ない得るようになり、このような苦しみをかかえた留学生在が日本留学によって、専門の学問を十分に学ぶことが出来るようにしていただくことを希望する。(原文=中国語)

(国立, 30代, 男, 台湾・中国, 保健, 3年)

[165] 1) 第1年目の研究生の制度をやめ、直接大学院に入学する制度に改め、1年間という貴重な時間を浪費しないようにする。研究生制度のねらいは一体どこにあるのか。もし日本語能力が大学院課程に堪えうるかどうかを見るためであれば、アメリカにならって外国で行なうTOEFLのような方法を採用するか、当該国における日本語の留学試験証明書を採用すればよい。また、何もせずそのまま大学院に入学させたとしても、自然淘汰の法則により、能力不足の者は順調に学位を取得することはできず、年限を延ばさねばならなくなるであろう。要するに、これによって各人が1年という時間を浪費しないですむようになれば素晴らしいことである。物価がこんなに高い日本で1年間待つことは、自費留學生にとっていかに大変な負担か、また、この浪費が人生の花にもあたる青春時代における1年であるということを、あなた方はお分りにならないのだろうか。

2) 修士課程、博士課程は年限をもうけず、能力のある者は早く修了し、早く学位を取得できるようにすべきだ。

3) 第1年目の研究生につけられる「チューター」の制度は、環境に適応し、言葉の障害を除くようにという意図からで、これは素晴らしい。しかし、大学院生に担当させるということは検討に値する。私の場合は、所属する研究部門に大学院生がおらず(全員研究生)、規定にあてはまらない。私のチューターになった人とは平常ほとんど会うことはないし(彼は別の研究部門の人であるので)、なんの助けにもならない(彼も仕方なくチューターにさせられたので)。そんなわけで、チューター制度は意図は素晴らしいのだが、うまく機能しておらず、実際には役立っていないのは残念なことだ。研究生でもチューターになれないものだろうか。参考までに述べておきたい。(原文=中国語)

(国立, 30代, 男, 台湾, 保健, 1年)

[166] 日本人は、一般に、まじめで、物事を深く、完璧に行ない、発展途上国が学ぶに値する。しかし、働く時間が長すぎるため家庭生活が犠牲になっている。

日本の生活費は高く、なかでも家賃はとても高く、巨額の保証金まで必要である。幸い私の大学は国際交流会館があってこの問題は解決されており、他校の手本となるに値すると思われる。(原文=中国語)

(国立, 30代, 男, 台湾・中国, 工学, 3年)

[167] ① 母国での日本語留学試験に合格すれば大学院に直接入学することを許可すべきである。

② 修士あるいは博士学位取得の年限を上げ、弾力性をもたせるべきである。

② 留学生のために、単身者および既婚者用又両方を含む宿舍を建設し、来日時的一大問題を解決してもらいたい。

④ 留学生の申請があれば出来るだけ奨学金を出してほしい。(原文＝中国語)

(国立, 30代, 女, 台湾, 中国, 保健, 2年)

[168] 1. 大学の図書館を利用できる時間が短すぎる。研究室についても同様。利用時間が短いだけでなく、図書や参考資料も十分とは思えない。

2. 学生寮が少なすぎる。既婚者は宿舍がなく、独身者の寮も限りがある。

3. 文科系の博士学位の取得に要する時間を短縮すべきである。あるいは、2つの基準を設けて、留学生には適当な時間で学位を取得させるべきである。

4. 日本人の学生の生活は寂しくて、趣味ももたず単調すぎる。(原文＝中国語)

(国立, 30代, 男, 台湾, 中国, 人文, 3年)

V 要 約 と 結 論

1 要 約

研究の目的

この研究は、日本の大学に在籍している大学院レベルの外国人留学生を対象に、主としてその教育研究面を中心としたアンケート調査の結果の概要である。

本研究は、日本の大学教育に直接かかわっている外国人留学生を対象として、彼らの日本の大学観や大学生活に関する意識を分析し、日本の大学教育にたいする評価や日本の大学の国際的開放性の度合いを明らかにするとともに、日本の大学の国際化のための示唆を得ることを目的としたものである。調査対象を大学院レベルの外国人留学生に限定したのは、これまでの多くの留学生調査が学部学生中心か、学部・大学院レベルを区別しておらず、教育研究上の問題点が必ずしも明確にされていないこと、さらに日本の大学教育を比較の視点から分析・評価するためには、母国の大学教育を経験している大学院レベルの留学生の方が適当と考えたからである。

調査の方法

調査対象は、大学院レベルの外国人留学生を受け入れている日本の大学(約100校)のうち、相対的に多数の留学生を受け入れている国立大学9校、私立大学5校の計14大学の大学院課程に1979年5月現在在籍する外国人留学生1,145名(国立913名、私立232名)である。この数は全国の大学院留学生総数2,116名の54.1%にあたる。

調査対象大学は次の通りである。

国立大学 — 東京、東京工業、東京水産、筑波、京都、大阪、神戸、広島、九州の各大学

私立大学 — 早稲田、慶応義塾、明治、国際基督教、同志社の各大学

この1,145名の調査対象にたいして490通の有効回答があり、回収率は42.8%であった。(うち国立大学の留学生913人に対して408人の回答があり回収率は44.7%、私立大学留学生232人に対して71名の回答があり30.6%であった。)

回答者の属性

年齢は26~30才までが最も多く、全体の42.2%を占め、年齢が高くなるにつれ遞減するが、26~35才までの範囲に全体の76.5%が入っている。男性が圧倒的に多く全体の81.6%も占めており、大学院レベルの留学生は20代後半から30代前半の男性が大部分を占めていることになる。

留学生の出身国籍は多様をきわめ、わずか490人のなかで61カ国にもものぼっている。サンプル中留学生の最も多い国は台湾で152人、次いで韓国の87人であるが、三位以下は急激に減少し、インドネシアとタイの2か国が20人台、ブラジルなど4か国が10人から19人までの留学生を送り出している。以下、5人から9人までの国は6か国、4人の国が7か国、3人の国が10か国、2人の国が6か国、1人の国が25か国となっている。外国人留学生の70%以上がアジアから来ており、その中でも最も近い隣国であり、かつて植民地として日本統治下にあり、また日本と共通の漢字文化圏に属する台湾と韓国からの留学生が合わせて全体の約半数を占めている。

全体の56%が既婚であり、そのうち72.3%が家族同伴で来日している。滞日期間は留学生の約4割が2年以下で、累計すると5年以下の滞在者が全体の8割強を占めている。

回答者の所属大学は、国立大学85.2%(407人)、私立14.2%(71人)であるが、うち修士課程(=博士課程前期)が42.0%(206人)、博士課程(=博士課程後期)が33.9%(166人)、研究生

22.2% (109人), その他 (聴講生など) 1.0% (5人)であった。

専攻分野では工学系が最も多く 26.7% (131人), 次いで社会科学 16.5% (81人), 人文科学 14.1% (69人), 農学 13.9% (68人), 保健 (医学・歯学・薬学など) 11.8% (58人), 教育 7.8% (38人), 理学 6.3% (31人), その他 0.2% (1人) の順になっている (N.A. 2.7%)。これを文科系, 理科系に二分すると理科系が 62.5% を占める。このように, アジアの発展途上国からの留学生が多いせいか, 実学に比重がかかっている。欧米からの留学生 (オセアニアも含む) は人文科学専攻者の比率が高く, 日本研究のために来た者がその大部分を占めているものと想像される。

日本政府奨学金を取得して来日した留学生は 53.9% であった。うち国立大学の大学院に在籍する留学生は 60.4% が日本政府より奨学金を得ているのにたいし, 私立大学の大学院に在学する留学生は 15.5% しか日本政府奨学金を得ていない。

日本留学前の最終取得学位については, 学士が 54.5%, 修士が 26.7%, その他 9.8% で博士号取得者は 2.7% であった。留学前に修士以上の学位を取得している者の割合が多い分野は, 理学, 農学, 教育であった。また日本の大学院で修士課程に在学している者の 70.9% は留学前に学士課程を修了し, 博士課程に在学している者の 40.0% は留学前に修士号を取得している。博士課程に在学している留学生の 39.2% は, 留学前に母国で学士号までしか取得していない。

留学前の職業では, 大学・研究職 32.4%, 学生 24.7%, 会社員 10.6%, 公務員 9.8%, 初等・中等学校教員 5.5%, 無職 3.1%, その他 10.0% であった。

日本留学の選択

日本を留学先に選択した理由は, 「学問研究上の理由」 (66.7%) が最もつよく, ついで「日本の文化や社会への関心」 (35.7%), 「奨学金が得られたこと」 (35.7%) が挙げられている。他方, 「地理的な近さ」 (18.0%), 「母国に適切な大学院がない」 (17.8%), 「母国における日本留学の高い評価」 (12.4%) などはそれほど強い影響を日本留学選択には与えていない。要するに, 日本留学選択に影響を及ぼした最大の理由は, 大学院における「学問研究」であり, その背景に「日本の文化や社会への関心」があるといえる。但し国費留学生の場合は, 日本政府の奨学金を取得したことが, 「日本」選択の大きな理由となっている。

64.5% の留学生が, 日本が第1志望の留学先国であったと答えているが, 修士課程 (70.4%) にくらべて博士課程 (50.6%) の第1志望率はかなり低くなっている。地域別では, 中南米 (91.9%), 北米 (88.2%), オセアニア (85.7%), ヨーロッパ (82.4%) からの留学生の8割以上は日本を第1留学先国に選んでいるが, 発展途上諸国からの留学生の場合はがいして低く, 特にアフリカ, 韓国, 東南アジアの場合は5割前後にすぎなかった。

大学院留学生の7割以上を占めるアジア諸国の場合をみると, 日本留学の第一志望率の最も低い韓国の場合, アメリカを第一志望とする者が 86.7% にもたっし, 台湾・中国 (84.6%), 東南・南アジア (70.6%) の場合もアメリカ留学を希望する者が多い。これらアジア地域の留学生の場合, ヨーロッパを第一志望とする者の比率は10% 前後にすぎず, 圧倒的多数はアメリカを留学希望先としているのである。

第一志望率を専攻分野別の観点からみると, 人文 (85.5%), 社会 (75.3%) 系は概して高く, 保健 (50.0%), 理学 (51.6%), 農学 (58.8%), 工学 (60.3%) 等の自然科学系と教育系 (57.9%) は低い。これらについても, 日本を第一志望としなかった者の第一志望国は, 過半数が「アメリカ」と答えており, 特に保健 (89.7%), 教育 (81.3%), 農学 (78.6%), 工学 (74.5%) の分野のアメリカ

カ志向が顕著である。人文・社会系についても、日本が第一志望でなかった者の半数は、やはりアメリカを第一志望としており、約3割強の者がヨーロッパ諸国を第一志望としているのである。

現在所属している大学院にかんしては、全体の73.9%の者が、大学院に一応満足の意を表明している。「不満である」という否定的回答(4.7%)は5%以下である。満足度は私立より国立の方が、また私費生より国費生の方がやや高くなっている。

日本の大学(院)の選定

留学前に日本の大学(院)について或る程度の情報をもっていた者は57.3%にすぎなかった。私立大学の留学生の場合は、76.1%の者が事前に何らかの情報を得ているのにたいし、国立大学の留学生の場合、45.9%の者は全く情報を得ていない。地域別には、日本に地理的に近い台湾・中国(98.1%)の場合は多いが、東南アジア地域の場合は、7割近く(66.4%)が事前に何の情報も持たずに来日している。

具体的に日本の大学を選定した理由としては、「専攻分野にすぐれた教授がいるから」(38.0%)がトップで、国費留学生の場合は「文部省により決められたから」(38.3%)が挙げられている。しかし大多数の者(85.1%)は現在所属している大学院から転学したいという希望はもっていない。但し転学を希望する者も約10%前後いる。

大学院における教育と研究

留学生の日本語能力の自己診断では、「できる」と回答した者は、聞く力(68.4%)、読む力(66.9%)、話す力(64.5%)、書く力(50.1%)の順であった。地域別では留学生の日本語能力の認知は、かなりの格差がみられ、韓国・台湾・中国などの漢字圏からの留学生の場合、「できる」と回答した者の比率は、読む力93.1%、聞く力84.2%、話す力73.7%、書く力71.6%で、ほとんど日本語能力には問題がない。これにたいし欧米留学生の場合は、話す力(67.3%)や聞く力(65.6%)にそれほど問題がないにしても、読む力(46.5%)と書く力(34.5%)にはかなり困難を感じており、さらに東南・南アジアやその他の国の留学生の場合は日本語能力に大きな困難を感じている者の割合が大きい。

日本語能力と滞日年数との間には密接な関係があり、聞く力、書く力のいずれの場合にも、1年未満と1年以上の滞日者との間には大きな差がみられ、留学生の日本語能力は1年で急速に高まっているといえる。

全体の約半数(48.4%)の者が現在の研究テーマを「自分自身の学問の関心にもとづいて」決定し(自己決定型)、「指導教授の助言により」決定した者(指導助言型)が37.1%、「母国の政府や大学の要請により」決定した者(国家要請型)はわずか2.0%にすぎなかった。文科系には自己決定型が多く(68.6%)、理科系には指導助言型が多い(50.2%)。

大学院の授業の用語は、「日本語だけ」が用いられていると答えた者が63.7%、「英語(あるいは日本語以外の外国語)」と回答した者はわずか0.2%で、英語の授業は殆んど皆無にちかい。「日本語と英語」と回答した者は33.5%あった。

授業の理解度については、授業の80%以上を理解できると回答した者は、講義で45.8%、演習で43.5%、実験で45.5%であり、さらに50~70%は理解できると回答した者は、講義で34.3%、演習で38.1%、実験で16.5%であった。講義の理解度が低いと回答している者は全体の約1割強いるが、東南アジア(26.3%)とその他の地域(中近東・アフリカ・中南米=19.1%)に多い。漢字圏の留学生で授業の半分も理解できないと回答したものがわずか4.0%であることからみれば、

これらの地域の留学生が授業を理解できない最大の原因は日本語能力の不足によるものと思われる。事実、授業が難しい理由としては、全体で約60%の留学生が「日本語の理解力の不足」を挙げ、他の理由を大きくひきはなしている。なお日本語が「大変よくできる」留学生にとって、授業が難しいと感じられている理由は、「教授方法が系統的でない」(18.6%)、「基礎学力の不足」(16.5%)、「授業の水準が高すぎる」(11.3%)、「内容が不適切」(6.2%)という順でえられている。

研究のことで指導教授と年に何回会うかについては、1年に10回以下が28.8%で最も高く、ついで11~20回(18.2%)、41~100回(14.7%)、21~40回(14.1%)の順となっている。日本に1年以上滞在しているにもかかわらず、1回も指導教授と会わなかったと回答した者が0.8%いた。このような実態にもかかわらず、研究指導の充足度にかんしては十分な指導助言をうけていると回答した者は68.0%もあり、逆に十分な指導助言を得ていないと回答した者(18.9%)を大きく上まわっている。研究指導の充足度は漢字圏およびアジアの留学生が、欧米その他の留学生より高く、欧米の留学生の31%が十分な指導・助言を得ていないとして、批判的である。

学位の取得

大学院留学生にとって学位の取得は留学生の最大の目的であろう。全留学生全体の57.5%は修士学位取得の必要があるとし、とくに現在修士課程に在籍中の留学生は79.1%の者が必要だとしている。修士学位の必要度はアジア、アフリカなど発展途上国において最も高く、北米、ヨーロッパなど先進諸国からの留学生にとってはそれほど高いとはいえない。博士学位については全体の61.3%が必要としており、特に博士課程在籍者の場合は実に91.6%が博士学位を必要としている。但し、アフリカ、韓国、東南・南アジア、中近東などが発展途上国の留学生にとって博士学位の必要性がたかく意識されているのにたいし、北米、ヨーロッパの場合は修士学位よりその必要度は低くみられている。

学位取得の難易度については、修士学位の場合、取得が容易とする者が全体の53.3%であり、難しいとする者は2割に満たない。これにたいして博士学位の場合は、全体の60.0%の者が「難しい」と答えており、博士課程に在籍する留学生の7割近く(69.9%)が取得の困難さを指摘している。専攻分野別にみると、社会系、人文系、教育系の7割の留学生が学位取得の困難さを訴えており、逆に自然科学系では、学位取得の困難を訴えている者は5割前後であった。

留学生の母国において、留学生が最も高く評価されていると答えたのはアメリカの学位であり、「高く評価されている」は66.3%、「ある程度評価されている」は23.5%であった。これにつぐのがヨーロッパ諸国の学位で、「高く評価」が48.6%、「ある程度評価」が39.4%であった。これにたいして日本の学位が「高く評価」されていると回答した者は21.2%、「ある程度評価」が50.6%であった。つぎに留学生の母国の学位は、「高く評価」が17.6%、「ある程度評価」が42.0%、「それほど評価されていない」が28.6%にも達している。

日本の学位の効用(母国における就職、昇進、昇給などの面での有効性)については、「大変有利である」と回答した者は21.6%、「有利である」とする者49.2%で、「それほど有利でない」とする者11.8%を大きく上まわっている。

学位の効用についても地域差が顕著で、日本の学位の効用の高い地域としては、韓国、中南米、台湾・中国、東南・南アジアなどがあり、その効用があまり認められない地域としてオーストラリア・ニュージーランド、北米などが挙げられる。特に北米の場合、「それほど有利でない」とする比率が、「有利である」比率を上回っていることが注目される。

日本の学位は欧米の学位に比べて、必ずしも高い評価を得ているとはいえないが、アジアおよび中南米等の発展途上国では、学位を取得すればそれなりの効用があることを、この結果は示しているといえる。

日本の学位取得について改善すべき点があるか否かについて、「ある」と答えた者は全体の45.3%、「特にない」と答えた者は14.9%であった。改善の必要性は、とくに人文・社会・教育学の分野の留学生につよく意識されている。この点に関する留学生の自由記述意見から改善を要する点をあげると、つぎの4点に要約される。

- (1) 博士号とくに人文科学，社会科学系の学位を現在より取得容易なものにすべきである。
- (2) 日本における「博士学位」のありかたや観念を改めるべきである。
- (3) 学位の審査にあたって，学位の「水準」や評価の手順を明確化すべきである。
- (4) 博士課程における学位取得のための指導を改善すべきである。

日本の大学の評価

全体の63.5%の留学生が日本の大学が国際的な学術水準にたっていると肯定的にみており，否定的な見解は13.7%にすぎない。この評価は自然科学系の留学生が高く，人文社会科学系は低く評価する傾向がある。地域別にみると，アジア諸国の留学生が比較的高い評価をしているのに対し，北米・オセアニアの留学生の間では，否定的意見が肯定的意見を大幅に上回っている。

「日本の大学は発展途上国の問題に十分関心を払っている」に肯定的な回答をした留学生は全体の18.4%であり，否定的回答は51.2%であった。この傾向は専門分野別でも出身地域別でも同様で，日本の大学は発展途上国から眼をそらしていると留学生の目には映っているようである。

「日本の留学生のために英語による授業を開設すべきだ」という意見にたいし，全体では「必要なし」とする意見(56.5%)が肯定的意見(27.6%)を上まわっている。但し東南・南アジアおよびアフリカからの留学生は，英語による授業の開設を求める者が5割をこえている。

日本の大学教授の成績評価にたいしては，全体的に「甘い」31.4%，「厳しい」34.1%，「わからない」が33.5%と全くわかれていない。また大学の教師が留学生に無関心だと感じている者は全体の18.4%で，64.3%はむしろ肯定的に評価している。日本人学生にたいしては全体の7割近く(69.8%)が「勉強に協力的」と答え，否定的意見は18.4%にすぎなかった。

日本留学の評価 — 「日本の大学で学んだことが帰国後役立つと思いますか」という質問 — については，全体の90.2%が役立つと答えている。留学生の50.4%は知人に日本留学を積極的にすすめたいと答え，すすめないと答えた者は27.8%であった。

留学生の自由記述意見

この調査では留学生として日本の大学で学んだ経験にもとづき，日本の大学教育，大学教授，大学行政，日本人学生等について，自由な意見や提案を書いてくれるよう求めた。これに対して本調査回答者全体のうち62%にあたる303名が，さまざまな意見，提案，所感を熱心に寄せてくれた。記述にあたって使われた言語は，英語126名，日本語110名，中国語34名，韓国語21名，スペイン語11名，フランス語1名であった。これらの意見の内容は，多岐にわたっており，(Ⅰ)留学生の受け入れについて(留学生に対する日本および日本人の対応，日本の教育文化交流，国際化への可能性，民族差別と日本人の対外観ほか)，(Ⅱ)留学に関する情報提供の問題について(来日前および滞日中の情報・PRなど)，(Ⅲ)日本語および日本語学習について(外国語の問題も含む)，(Ⅳ)日本の大学，教育，教員，学生について(学校制度，教育の方法，施設・設備，学位，

ほか)、Ⅵ留学生からの提言(留学生への施策、制度上の改善、学費、大学への配置、住まい、ほか)などに大別される。

2 結 論

外国人留学生の日本の大学院教育にかんする意見調査の目的は、日本の留学生制度の改善や教育の国際交流の促進にあることは言うまでもないが、本質的には外国人の眼からみた大学(院)教育の評価を通じて、日本の大学(院)教育の改善をめざすことにある。そこでこれまでの数量データにあらわれたアンケート調査の結果をふまえ、さらに留学生の自由記述意見にもとづいて、われわれが緊急かつ重要と考えるいくつかの問題点や提言をつぎに列記して、結論に代えたいと思う。

大学(院)教育にたいする満足度

全般的に、すくなくともわれわれの調査サンプルの諸大学に在籍している留学生の多く(7割以上)は、所属の大学(院)に満足していると回答している。この満足度の相対的な高さは、①サンプル大学がいずれも、日本では知名度も高く、施設・設備も相対的に恵まれている国立・私立大学であること、②多人数教育が支配的な学部にくらべてはるかに少人数で恵まれた教育・研究条件にある大学院に所属する留学生たちの意見であること、③大学院に進学する留学生の多くは、本調査の場合、奨学金その他の点で相対的に条件のよい国費留学生であり、かつ母国において選ばれたエリートであるか、すでに安定した社会的地位に就いている者が多いという背景などが、相対的な満足度のたかさに影響を及ぼしていると思われる。

日本の大学(院)教育にたいする一般的な満足度は、このように数量的データにあらわれたかぎりではかなり高く、かつ自由記述意見のなかでも多くの留学生が教授の懇切な指導や大学の受入れ体制にしばしば感謝の意を表明している。しかしながら、そのことは日本の大学(院)教育が留学生にとって全く問題がないということを意味しない。自由記述意見をみると日本の大学院教育にたいするきびしい批判や注文はけっしてすくなくない。留学生の間では、現状の大学院教育にたいする満足と不満の落差はかなり大きく、一方で適切な指導教授や環境に非常に恵まれた留学者がおり、他方では自分の研究テーマとは全く不適合な教授や環境におかれたために、極度の不満と絶望におちいつている者もいる。留学生の日本の大学院教育にたいする評価は、かれらがおかれた環境や条件によって大きく左右されると思われるが、それにもかかわらず、留学生が共通にいただいているいくつかの問題点を指摘することができる。

授業と研究指導上の問題点

教授の指導や授業にかんしては、つぎのような点に批判や注文が集中している。

- ・日本の大学教師は教育よりも研究志向がつよく、学外活動に多忙で、授業には余り熱心でない人が多い。もっと Teaching を重視し、授業を興味おかいものにして欲しい。
- ・一般に授業では教授の一方的な講義や指導が主で、教師と学生間の討論、対話、率直な意見の交換が乏しい。演習やゼミでは外国語文献の逐語訳や解釈だけで、留学生にとっては殆んど無意味であり、授業が討論や創造的思考の場となっていない。
- ・カリキュラムの構造化や授業方針の決定について、教師の間で話し合いや調整が行なわれていない。教授は学生からのフィードバックを求めて、授業の改善に反映すべきである。また授

業内容については予め学生にもっと明確かつ詳細に知らさるべきだ。

- ・研究の内容だけではなく、研究の方法についても指導して欲しい。
- ・大学院ではもっとコースワークを重視してほしい。

研究テーマと大学配置の適合性

留学生にとって最大の問題点は、何といても自分の研究テーマに適した大学ないし指導教授にめぐりあえるかどうか、ということである。全般的には適切な教授と環境のもとにおかれているとの満足感がたかい一方で、個別にはきびしい批判や苦情も少なくない。たとえば「指導教授が自分の研究テーマに全く関心を示してくれない」「全く関係のないテーマの指導教官にわりあてられた」「せっかく試験を受けて入学したのに、指導教授は多忙のため指導してくれず、研究テーマの異なる助教授に任せられ、途方にくれている」「自分の研究テーマを教授に一方的に決められた」「指導教授とはめったに会えない」「授業は日本人学生中心で、少数の留学生には配慮してくれない」「全く英語を話せず、留学経験のない教授を留学生の指導教授に指定するのは困る」などの意見が、とくにつよく留学生から表明されている。

われわれの調査結果によれば、国費留学生のうちの大部分の者は、文部省の指定によって配置された大学や指導教授にそれほど不満はもっていないようである。しかしながら、自由記述意見のなかには、少なからぬ数の留学生が、配置された大学院に不満をもち、自分の研究テーマと一致しない指導教授にわりあてられたと、十分な指導をしてくれない教授との出会いに、きわめて強烈な不満を表明しているのである。留学生に大学や指導教授の選択権を認めていない以上、不幸にして留学生の研究目的に適合しない場合が出た場合には、なんらかの解決策が講じられるべきだと考える。

この問題についての留学生の提案はつぎのようなものである。

- ・文部省は留学前に自分の研究テーマをはっきりきめてくるよう指示しているが、そのテーマに合う指導教授に配置されないことがしばしばある。
- ・文部省は留学生の配置大学や指導教授を選定する場合には、留学生の意見をきくなど、できるだけ慎重な配慮を払って欲しい。
- ・配置された大学や指定された指導教授が自分の留学目的や研究テーマに適合しなかった場合には、転学の自由を認めて欲しい。
- ・留学生を英語の話せない教授に割当てないで欲しい。とくに留学経験のある教授に割当てよう配慮して欲しい。
- ・留学生にはどの大学で学ぶか、自分で自由に決定する機会が与えられるべきである。

いずれも留学生の注文としては充分理解できるものと思われる。文部省と大学との協力により、より柔軟な制度の運用が実現されることをつよく望みたい。

日本人学生

日本人学生にたいしては、大半の留学生は一方で「親切」「礼儀正しい」と肯定的に評価しながら、他方でかれらの閉鎖性や主体性の欠除ないしは偏狭性をするどく指摘している。

- ・日本人学生は一応親切だが、外人という意識をもって、信頼できる友人になってくれない。日本人学生とは率直な議論ができない。もっと留学生に心を開いてほしい。
- ・日本人学生には授業の欠席、遅刻、授業中の私語が多い。予習、復習なしに漫然と授業に出席し、ノートをとるだけで、自主的な学習意欲に欠ける者が多い。

- 日本人学生は自己の専門にのみとじこもって、学問全般や社会・政治問題に関心がうすい者が多い。自分の研究の意識や目的について不明確なモラトリウム学生が多い。
- 日本人学生は欧米の学問の研究にのみ興味を示し、アジアには無関心である。
- アジアの留学生に対する差別や偏見がいぜんとして強い。

日本の大学評価

留学生の日本の大学（院）評価についてみると、そのアカデミック・スタンダードや学位の価値や効用についても、欧米のそれにつぐ位置にランクづけられている、といってよいであろう。また日本の大学間の質的格差がきわめて大きいことも、留学生につよく意識されている。このような日本の大学評価の意識が、日本の大学の実態を正確に反映しているか否かは別として、日本の大学のレベルがアメリカやヨーロッパのそれよりも一段ひくいものとみなされているという社会的イメージの存在は、日本留学に多くの問題をもたらしているのである。たとえば、優れた資質をもつ学生の多くは、日本よりは欧米の留学を選択する傾向がつよくなろう。そうなれば、日本に留学してくる学生の多くは、欧米留学に失敗した者か、資質・能力において欧米留学者より劣った者になり、日本の大学は最もすぐれた質の留学生をひきつけることが困難になる。

このような状況をつくりだす原因としては、日本語習得や学位取得の困難さとともに、日本の大学にかんする絶対的な情報不足（ないしは不正確な情報の存在）があげられる。多くの留学生が指摘するように、留学前の母国においては、日本の大学にかんする情報は極度に限られ、殆んどないといっても過言ではない。たとえば大学や政府に多くの留学経験者を持ち、英語による情報を入手しやすいアメリカの大学とくらべるならば、英語による出版物も乏しく、留学経験者も少ない日本の大学について、正しく知ってもらうためには、まず何よりも正確な情報の提供に格段の努力を注ぐことが急務である。正しい情報の普及にともなって、日本の大学の社会的イメージは徐々に修正されていくものと考えられる。すぐれた研究者や学生を積極的に開発途上国に送り出し、日本の大学や学問を正しく理解してもらううえに、これからの大学の果たすべき役割はますます大きくなるであろう。

日本語の問題

漢字文化圏からの留学生や欧米からの日本研究志望留学生をのぞいて、多くの留学生にとって日本留学の最大難関は、何といっても日本語という言語バリアーの問題である。国際的通用性が限られ、習得にかなりの日時を要する日本語は、日本の大学の国際化にとって、つねにふるくて新しい問題であり、そのことはわれわれの調査結果からも、確認されている。たとえば留学生の授業の理解度を制約する最大の条件は日本語の能力だと、留学生自身が認めているのである。この言語バリアーをどう軽減するかという問題を避けては、日本の大学の国際化を実現することは不可能である。

留学生のこの問題にたいする提言は、はっきりとつぎの2つにわけられる。すなわち、

① 日本語教育の改善

② 大学教育に英語による授業の導入

①については、具体的にはつぎのような提言がみられる。

- 現在の留学生の日本語の実力では、日本での生活が無意味。日本語が読め書けるように日本語教育を強化して欲しい。
- 各大学に必ず日本語教育のコースを設けて欲しい。

- 現状の日本語教育は余りに不備である。もっと集中的、実用的なものにして欲しい。
- 現行の日本語教育の期間を延長して欲しい。6カ月の訓練で日本語をマスターすることは不可能。

②については、

- 大学院では授業に英語を採用して欲しい。
- 英語を公用語とする大学をひとつ設置して欲しい。
- 一部のセミナーなどは英語による授業にして欲しい。
- 英語によるレポート提出を認めて欲しい。

アンケート調査によれば、留学生の多くは、英語による一部または全部の授業開設よりは、むしろ日本語教育の改善をつよく求めている、といえる。つまり日本に留学した以上は、日本語も積極的に習得したいという意欲を示している。しかし同時に自由記述意見のなかには、大学教育の一部に英語による授業を開設して欲しいとの希望もつよく表明されている。また、留学生の指導教授は、すくなくとも或る程度は英語が話せるか、留学経験のある人が望ましいとの希望もつよい。

われわれは、なによりもまず①の日本語教育の制度・方法の改善が最も急務と考えるが、日本語のより効果的な教育方法が開発されるまでは、通常の授業科目の一部を英語で開設したり、試験の答案やレポートを英語で書くことを認めるなど、②の可能性も充分考慮に入れるべきだと考える。また、英語による講義を日本人の教授や学生が実践することは、自分の国際学会活動や留学にも有益であり、大学の国際化に貢献するものとなろう。

学位取得の問題

アジアの発展途上諸国からの留学生を多くかかえる日本においては、大学院レベルの留学生の最大の留学目的は日本の大学の学位を取得して帰国することである。しかしながらこれまでしばしば指摘されてきているように、留学生が博士学位を所定の留学期間内に取得することは、一般的にはきわめて困難であり、分野によっては殆んど不可能な場合が少なくない。ましてや、日本語による学位論文の提出しか認められていない学問領域では、留学生の学位取得は絶望的であろう。

こうした事情にたいして、多くの大学院レベルの留学生にとって、学位を取得できないままに帰国することは、しばしば母国で留学の失敗とみなされ、社会的地位の上昇を保証されぬばかりか、生活の不安定すら招きかねないほど深刻な問題なのである。

しかも日本の大学における学位の観念、制度、水準、学位審査の基準や手続きなどは、アメリカやヨーロッパの学位の観念に慣れている留学生にとって、きわめて不明確かつ異質で、非常に理解しがたいものである。そのことが留学生に不安やいらだちを及ぼし、反日感情を植えつけた、すぐれた人材を日本以外の国に留学させるといった、いくたの不幸な問題を生みだしてきた原因となっている。

学位の問題にたいして、留学生たちはつぎのような改善を求めている。

- 博士学位は特定の分野での頂点を示すような独創的な業績に授与されるのではなく、一定の学問研究の水準に到達したら取得できるような方向に改善されるべきである。
- 日本の学位の審査基準やプロセスをもっと明確かつ公明に示して欲しい。
- 博士学位の水準や取得の方法・手続きを欧米諸国のそれと類似のものにして欲しい。
- 大学院への進学、修士・博士課程への進学は、明瞭で公開の原則で行って欲しい。
- 分野によっては英語で学位論文を書くことを認めて欲しい。

学位の問題は一国の学術水準や学問の伝統や観念にかかわるものであるから、かんたんに解決できる性格のものではない。しかしながら、日本の大学が受けいれている留学生の主要な目的が学位取得にある以上、われわれ大学人は、かれらの目的にたいしてどう応えるべきかという問題をあいまいなままにしておくことは許されない。日本の学位の観念や水準をどうとらえるかという根本的な問題とともに、日本の大学は学位の国際化という重要な課題に真正面から取り組むべきである。

大学の役割

日本の留学生制度は、すくなくとも文部省の国費留学生の場合にかぎってみれば、経済的な条件整備の面ではここ10年間にめざましい発展ぶりを示し、欧米先進諸国をしのぐレベルにまで到達しつつある。これからの最大の課題は、条件整備や政治・行政上の改善もさることながら、むしろ政治やカネだけでは解決困難な問題にどう対応するかということではなかろうか。これまで挙げてきたような、大学院教育の改善（授業計画やカリキュラムの改革）、学位の水準や手続きの明確化、日本語教育の方法の開発、留学生の目的と適合した大学配置や教授の選定、さらには日本の大学についての情報の外国への普及などは、たんに政治・行政だけの努力ではなく、すぐれて大学側の自主的解決への努力に、大きく依存している領域であろう。日本の大学の国際化は、大学の自己革新なしには実現不可能なのである。

Ⅵ 附 録

日本の大学院教育に関する留学生の意見調査

A Survey of Opinion among Foreign Students
concerning Japanese Graduate Education

広島大学 大学教育研究センター
「大学の国際化」プロジェクト

Joint Research Project of the
Internationalization of Higher Education
Research Institute for Higher Education
Hiroshima University

調査についての問合せ先

〒730 広島市東千田町1-1-89

広島大学 大学教育研究センター

喜多村 和 之 (教授)

馬 越 徹 (助教授)

大 塚 豊 (助手)

(電話 0822-41-1221 内線 822/823/709

0822-43-7193 直通)

Staff concerned in this Project :

Kazuyuki KITAMURA (Professor)

Toru UMAKOSHI (Associate Professor)

Yutaka OTSUKA (Research Assistant)

Research Institute for Higher Education

Hiroshima University

1-1-89, Higashisenda-machi, Hiroshima City

(Tel. 0822-41-1221 Ext. 822/823/709 or

0822-43-7193)

調 査 の お 願 い

このたび、広島大学・大学教育研究センターでは、日本の大学院に在学中の留学生の皆さんを対象に、日本の大学院教育に関する意見調査をおこなうことにいたしました。

この調査は、日本の大学院における留学生教育の問題点や今後の改善方法を留学生の皆さんの意見を通じて発見しようとするものです。結果はすべて統計的にまとめますので、お答えいただいた皆さんに、個人的にご迷惑をおかけすることはいっさいありません。日本の大学院における留学生教育の改善のために、あなたの卒直な御意見をぜひおきかせ下さい。

なお、当研究センターは、日本で唯一の高等教育の学術研究を目的とする機関であり、調査結果は、センターの学術研究物として、まとめる予定です。

重ねて皆さんのご協力をお願い申し上げます。

1979 年 12 月

広島大学 大学教育研究センター教授
喜多村 和 之

なお、この調査の結果についてお知りになりたい場合には、調査がまとまった時点で報告書の要約をお送りしますので、御希望の方は、住所・氏名をお知らせ下さい。
あなたの住所、氏名は他には一切もらすようなことはありません。

Dear Sir or Madam:

We would like to ask your cooperation in filling out **A Survey of Opinion among Foreign Students concerning Japanese Graduate Education**, which is to be carried out by a joint research project group of the Research Institute for Higher Education, Hiroshima University.

The aim of this survey is to find out how foreign students, who are already studying in Japan feel about Japanese graduate education and studying conditions. Your views will be of the utmost assistance for the improvement of Japanese graduate education for foreign students.

We should like to assure you that your answers will be statistically processed and treated as strictly confidential. We hope that you will find the questionnaire interesting to answer, and we should be grateful if you would complete it and make your comments as frankly as possible.

Finally, the Research Institute for Higher Education is the only national center in Japan concentrating on the study of higher education, and the results of this survey will be published by the Institute.

In anticipation, we wish to thank you very much for your cooperation.

Yours sincerely,

Kazuyuki KITAMURA
Professor, R. I. H. E.

P. S. If you would like to know the findings of this survey, we will be glad to send you a summary report when it is available. Therefore please give us your name and address, so we can forward it to you. Your name and address will be treated strictly confidentially.

質問紙の答え方

1. 質問紙には日本語版と英語版があります。どちらかでお答え下さい。
2. 回答は、もっともふさわしい番号に○をつけて下さい。
3. _____部分には、英語か日本語（中国語、フランス語、ドイツ語、韓国語、スペイン語も可）でお書き下さい。
4. 調査は無記名で、結果はすべて統計的にまとめます。個人的なご迷惑をおかけすることは一切ございません。よろしくご協力をお願いいたします。
5. ご回答は、1980年 月 日までにご返送下さい。

How to complete the questionnaire

1. The questionnaire consists of **Japanese version and English version**. Please answer **either one** you like.
2. Where a choice of answers is given, please **circle the number** for the answer you consider closest to your view.
3. Where a line _____ is given for written answers, please use English or Japanese if possible. If this is not possible, we should be glad to receive answers in Chinese, French, German, Korean or Spanish.
4. You are not required to write your name and your answer will be processed statistically. We shall under no circumstances give you trouble. In anticipation, thank you very much for your cooperation.
5. Please complete the questionnaire and return it to us by _____ **1980.**

Q 1 あなたが日本留学（大学院）を決心する上で、つぎのそれぞれの理由はどの程度の影響力をもちましたか。

- | | 1. 非常に影響した | 2. いくぶん影響した | 3. 影響しない |
|--------------------------|------------|-------------|----------|
| a. 学問研究上の理由 | 1. | 2. | 3. |
| b. 日本の文化や社会への関心 | 1. | 2. | 3. |
| c. 母国に適当な大学院がないこと | 1. | 2. | 3. |
| d. 母国における日本留学の高い評価 | 1. | 2. | 3. |
| e. 奨学金が得られたこと | 1. | 2. | 3. |
| f. 地理的な近さ | 1. | 2. | 3. |
| g. 日本に住む親せきや知人の援助 | 1. | 2. | 3. |

Q 2 日本は留学先として**第一志望**の国でしたか。

1. はい
2. いいえ → では第一志望の国はどこでしたか _____

Q 3 あなたが現在所属する大学院を選ぶ上で、いちばん影響した理由は何ですか。（一つだけ選んで下さい。）

1. 地理的に適当な位置にあるから
2. 文部省により決められたから
3. 入学試験に合格したから
4. 大学院が有名だから
5. 専攻分野にすぐれた教授がいるから
6. その他 _____

Q 4 あなたは留学前に、現在所属する大学院についてある程度知っていましたか。

1. はい
2. いいえ

Q 5 あなたは一般的にいて、どの程度現在の大学院に満足していますか。

1. 大変満足している
2. 満足している
3. どちらでもない
4. 不満である
5. わからない

Q 1: How did each of the following reasons influence your coming to study at a Japanese graduate school (Daigakuin) ? Please indicate as follows. :

- | | 1. Greatly | 2. Some | 3. None |
|--|------------|---------|---------|
| a. Academic or professional reasons | 1. | 2. | 3. |
| b. Interest in Japanese culture and society | 1. | 2. | 3. |
| c. Difficulty of having appropriate graduate studies in home country | 1. | 2. | 3. |
| d. High evaluation of studying in Japan in home country | 1. | 2. | 3. |
| e. Success in obtaining a scholarship | 1. | 2. | 3. |
| f. Geographical closeness | 1. | 2. | 3. |
| g. Support by relatives or acquaintance living in Japan | 1. | 2. | 3. |

Q 2: Was Japan your **first choice** as a foreign place to study ?

1. Yes
2. No → Then which country ? _____

Q 3: What was the most influential reason for your choosing the graduate school to which you belong at present ? (Please choose one answer.)

1. Geographical or physical location
2. Decision by the Ministry of Education (Monbusho)
3. Success in entrance examination
4. Prestige of the school
5. Good professor in the major field
6. Other: _____

Q 4: Did you have any information about your present graduate school before coming to Japan ?

1. Yes
2. No

Q 5: In general, to what extent are you satisfied with your present graduate school ?

1. Very satisfied
2. Satisfied
3. Not so satisfied
4. Dissatisfied
5. Don't know

Q 6 あなたは、出来れば他の大学院にかわりたいと思いますか。

1. はい 2. いいえ

もし御意見があれば、具体的にお書き下さい。

Q 7 大学院 への入学試験は難しかったですか。

次のそれぞれの試験についてお答え下さい。

1. 大変難しかった
2. かなり難しかった
3.それほど難しくなかった
4. 試験はなかった

- | | | | | |
|-------------------------|----|----|----|----|
| a. 日本語テスト | 1. | 2. | 3. | 4. |
| b. 日本語以外の外国語テスト | 1. | 2. | 3. | 4. |
| c. 日本語による専攻科目のテスト | 1. | 2. | 3. | 4. |
| d. 英語による専攻科目のテスト | 1. | 2. | 3. | 4. |
| e. 面接テスト | 1. | 2. | 3. | 4. |

Q 8 あなたの日本語の能力はどの程度ですか。

1. 大変よくできる 2. 一応できる
3. あまりよくできない 4. できない

- | | | | | |
|----------------------|----|----|----|----|
| a. 授業の時に話す力 | 1. | 2. | 3. | 4. |
| b. 授業を聞く力 | 1. | 2. | 3. | 4. |
| c. 論文を読む力 | 1. | 2. | 3. | 4. |
| d. 論文やレポートを書く力 | 1. | 2. | 3. | 4. |

Q 9 あなたの研究テーマを具体的に書いて下さい。

Q 10 あなたは現在の研究テーマをどのようにして決めましたか。(一つだけ選んで下さい。)

1. 自分自身の学問の関心にもとづいて
2. 指導教授の助言により
3. 母国の政府や大学の要請により
4. まだ決めていない
5. その他 _____

Q 6: Do you want to transfer to **another graduate school**, if possible ?

1. Yes 2. No

If you have any comment, please give it freely:

Q 7: How difficult was entrance examination to the **present graduate school** for you?

Please indicate your impression about each of the following tests, as follows:

1. Very difficult

2. Rather difficult

3. Not so difficult

4. Not examined

- | | | | | |
|---|----|----|----|----|
| a. Japanese language test | 1. | 2. | 3. | 4. |
| b. Foreign language tests except for Japanese | 1. | 2. | 3. | 4. |
| c. Test in your major field in Japanese | 1. | 2. | 3. | 4. |
| d. Test in your major field in English | 1. | 2. | 3. | 4. |
| e. Interview test | 1. | 2. | 3. | 4. |

Q 8: Please describe your level of ability in Japanese:

1. Very good 2. Fairly good

3. Not so good 4. Poor

- | | | | | |
|------------------------------------|----|----|----|----|
| a. Speaking in class | 1. | 2. | 3. | 4. |
| b. Hearing lectures | 1. | 2. | 3. | 4. |
| c. Reading papers | 1. | 2. | 3. | 4. |
| d. Writing papers or reports | 1. | 2. | 3. | 4. |

Q 9: Please describe your present research theme concretely, if you have decided.

Q 10: How did you decide your present research theme? (Please choose one answer.)

1. Based on my own academic interest
2. Based on supervising professor's advice
3. Based on request of my country's government or university
4. Not yet decided
5. Other: _____

Q 11 あなたの大学院では、講義、演習、実験は主として何語で行われますか。

1. 日本語だけ
2. 日本語と英語（あるいは他の外国語）
3. 英語（あるいは日本語以外の外国語）
4. その他 _____

Q 12 あなたは講義、演習、実験の何パーセントぐらい理解できると思いますか。

適当な数字を○で囲んで下さい。

(例) 講義 0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 %

1. 講義 0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 %

2. 演習 0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 %

3. 実験 0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 %

Q 13 もし、授業が難しいとすれば、その主な原因は何だと思いますか。(一つだけ選んで下さい。)

1. 授業の水準が高すぎる
2. 日本語の理解力が不足
3. 教授法が系統的でない
4. 外国語、数学、物理などの基礎学力が不足
5. 教育内容が不適切

Q 14 (a) あなたは、研究上のことで指導教授と一年に何回ぐらい会いますか。

約 _____ 回

(b) あなたは、研究上十分な指導や助言を得ていると思いますか。

1. はい
2. いいえ
3. わからない

Q 15 一般に、留学生が日本の学位を取得するのは難しいと思いますか。

- | | | | |
|------------|-------|--------|----------|
| a. 修士学位の場合 | 1. はい | 2. いいえ | 3. わからない |
| b. 博士学位の場合 | 1. はい | 2. いいえ | 3. わからない |

Q 11: What language is mainly spoken in classes; lectures (kôgi), seminars (enshû) and laboratory instruction (jikken) at your graduate school ?

1. Japanese only
2. Both Japanese and English (or some other language)
3. English (or some other language except Japanese)
4. Other: _____

Q 12: About what percent of the lecture, seminar or laboratory instruction (if any) do you understand?

Please circle proper percent.

(Ex.) Lecture (Kôgi) 0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%

1. Lecture (Kôgi) 0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%

2. Seminar (Enshû) 0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%

3. Laboratory (Jikken) 0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100%

Q 13: If you feel classes difficult, what is the main cause for it? (Please choose one answer.)

1. Too high level of instruction
2. Lack of understanding of Japanese language
3. Unsystematic teaching method
4. Insufficient training in basic subject such as foreign language, mathematics, physics, etc.
5. Irrelevance of teaching contents

Q 14: (a) How often do you meet your supervising professor to discuss your study ?

About _____ times per year

(b) Do you think that sufficient advice and supervision is given in your study ?

1. Yes
2. No
3. Don't know

Q 15: In general, do you think it too difficult for a foreign student to obtain an Japanese academic degree ?

- | | | | |
|------------------|--------|-------|---------------|
| a. Master degree | 1. Yes | 2. No | 3. Don't know |
| b. Doctor degree | 1. Yes | 2. No | 3. Don't know |

Q 16 留学生が日本の学位を取得する上で、何か改善すべき点があると思いますか。

1. はい 2. いいえ 3. わからない

もし御意見があれば、具体的にお書き下さい。

Q 17 あなたにとって日本の学位はどの程度必要ですか。

- a. 修士学位の場合 {
- 1. 絶対に必要
 - 2. 必要
 - 3.それほど必要ではない
 - 4. まったく必要ではない
 - 5. わからない

- b. 博士学位の場合 {
- 1. 絶対に必要
 - 2. 必要
 - 3.それほど必要ではない
 - 4. まったく必要ではない
 - 5. わからない

Q 18 次の国々の学位（博士相当）は、あなたの母国の学界では、どのように評価されていますか。

- 1. 高く評価されている
- 2. ある程度評価されている
- 3.それほど評価されていない
- 4. わからない

- | | | | | |
|---------------------|----|----|----|----|
| a. 日本の学位 | 1. | 2. | 3. | 4. |
| b. ヨーロッパ諸国の学位 | 1. | 2. | 3. | 4. |
| c. アメリカ合衆国の学位 | 1. | 2. | 3. | 4. |
| d. 母国の学位 | 1. | 2. | 3. | 4. |

Q 16: Do you think that there is any problem to be solved in foreign students' obtaining an academic degree in Japan ?

1. Yes 2. No 3. Don't know

If you have any comment, please give it freely:

Q 17: To what extent do you need an academic degree in Japan ?

- a. Master degree { 1. Absolutely necessary
2. Necessary
3. Not so necessary
4. Not necessary at all
5. Don't know

- b. Doctor degree { 1. Absolutely necessary
2. Necessary
3. Not so necessary
4. Not necessary at all
5. Don't know

Q 18: How are the doctor degrees obtained in the following countries evaluated in the academic community in your home country? Please specify as follows:

1. Very prestigious
2. Rather prestigious
3. Not so prestigious
4. Don't know

- a. Japanese degrees 1. 2. 3. 4.
b. European degrees 1. 2. 3. 4.
c. American degrees 1. 2. 3. 4.
d. Home country's degrees 1. 2. 3. 4.

Q 19 あなたの母国では日本の学位が、就職、昇進、昇給などにどの程度有利ですか。

1. 大変有利である
2. 有利である
- 3.それほど有利でない
4. わからない

Q 20 つぎのような意見についてあなたは賛成ですか。

1. はい 2. いいえ 3. わからない

※ 日本の大学は一般的にいて、国際的な学術水準にたっている。

1. 2. 3.

※ 日本の大学は開発途上国の問題に十分な関心をはらっている。

1. 2. 3.

※ 日本の大学教授は、一般的にいて、留学生に無関心である。

1. 2. 3.

※ 日本の大学は留学生のために英語による授業を開設すべきである。

1. 2. 3.

※ 今後、滞在期間を延長して日本で勉強を続けたい。

1. 2. 3.

※ 知人に、日本留学を積極的にすすめたい。

1. 2. 3.

※ 私の所属する大学院の日本人学生は、留学生の勉学に協力的である。

1. 2. 3.

※ 日本の大学教授は、留学生に対する成績評価が甘い。(きびしくない)

1. 2. 3.

Q 21 あなたは留学終了後、どのような計画をもっていますか。

1. すぐに帰国する
2. できれば日本にとどまる
3. 日本以外の国に留学する → どの国ですか _____
4. その他 _____

Q 22 帰国後、どのような計画をもっていますか

1. 前職に復帰する
2. あたらしい職を見つける
3. 大学生として勉学をつづける
4. 決めていない
5. 帰国するつもりはない
6. その他 _____

Q 19: To what extent is a Japanese degree advantageous for employment, status or salary-increase in your home country ?

1. Very advantageous
2. Advantageous
3. Not so advantageous
4. Don't know

Q 20: Please indicate your agreement or disagreement with each of the following statements, as follows:

1. Yes 2. No 3. Don't know

- * In general, Japanese universities have reached to the international academic standards. 1. 2. 3.
- * Japanese universities are paying enough attention to the problems in developing countries. 1. 2. 3.
- * In general, Japanese professors are indifferent to foreign students. 1. 2. 3.
- * Japanese universities should provide foreign students with classes taught in English. 1. 2. 3.
- * I would be happy to continue studying in Japan for an extended period of time. 1. 2. 3.
- * I will positively recommend others to come to study in Japan. 1. 2. 3.
- * Japanese students at my graduate school are cooperative in my study. 1. 2. 3.
- * Japanese professors are generous (not strict) to foreign students in terms of evaluation. 1. 2. 3.

Q 21: What is your plan after completing your study in Japan ?

1. Return to home country immediately
2. Continue to stay in Japan, if possible
3. Go to another country to study → Which country ? _____
4. Other

Q 22: What is your plan after returning to your home country ?

1. Come back to former job
2. Find a new job
3. Continue to study as a student
4. Undecided
5. Not intend to go back home
6. Other: _____

Q 23 日本の大学院で学んだことが、帰国後に役立つと思いますか。

1. たいへん役立つ
2. 役立つ
- 3.それほど役立たない
4. わからない

最後に統計的処理に必要な事項についてお答え下さい。

1. 生年： _____
2. 性別： 1. 男 2. 女
3. 国籍： _____
4. 婚姻関係： 1. 未婚 2. 既婚
5. あなたは家族といっしょに日本で生活していますか。
 1. はい 2. いいえ
6. あなたはどのくらい日本に滞在していますか。
 約 _____ 年 _____ ケ月
7. あなたは、つぎのどの課程に所属していますか。
 1. 修士課程
 2. 博士課程
 3. 研究生
 4. その他 _____
8. あなたの所属大学についてお書き下さい。
 1. 大学名

 2. 研究科または学部名

 3. 専攻名

Q 23: Do you think what you have studied at the Japanese graduate school will be helpful after returning to your home country ?

1. Very helpful
2. helpful
3. Not so helpful
4. Don't know

Lastly, please answer the following items necessary for the statistical processing.

1. Year of birth: _____
2. Sex:
1. Male 2. Female
3. Name of your country: _____
4. Marital status:
1. Single 2. Married
5. Do you have your family with you in Japan ?
1. Yes 2. No
6. How long have you been staying in Japan ?
About _____ years _____ months
7. In what course are you studying ?
1. Master course
2. Doctor course
3. Research student (Kenkyūsei)
4. Other: _____
8. Institution where you are studying:
1. Name of institution (Daigaku)

2. Department (Kenkyūka or Gakubu)

3. Course (Senkō)

9. あなたは日本政府から奨学金を得ていますか。

1. はい
2. いいえ

10. あなたが留学前に取得した最終学位はつぎのどれですか。

1. 学 士
2. 修 士
3. 博 士
4. その他: _____

11. あなたの留学前の職業は何ですか

1. 無職
2. 学生
3. 大学・研究職
4. 初等・中等学校教員
5. 公務員
6. 会社員
7. その他 _____

→ 次頁へつづく

9: Are your study expenses paid by Japanese government ?

1. Yes
2. No

10: What is your degree obtained before coming to Japan ?

1. Bachelor degree
2. Master degree
3. Doctor degree
4. Other

11: What was your occupation before coming to Japan ?

1. Unemployed
2. Student
3. Academic profession (college and university related occupation)
4. Primary or secondary school teacher
5. Public service (government official)
6. Employee at a company
7. Other: _____

→ Continued to next page.

自由記述意見：

留学生として日本の大学院で学んだ経験にもとづき、日本の大学教育，大学教授，大学行政，日本人学生等について，あなたのご意見・提案を自由にお書き下さい。（中国語，英語，フランス語，ドイツ語，日本語，韓国語，スペイン語のいずれかでお書き下さい。）

御協力たいへんありがとうございました。

COMMENTS:

We should appreciate it if you would comment quite freely, and make any proposals you think valuable, on higher education, faculty members, administration and students in Japanese universities and colleges, on the basis of your experiences as a student here. (Please write in Chinese, English, French, German, Japanese, Korean or Spanish)

Please accept our thanks for your cooperation.

11/12/1917

Dear Mr. [Name] [Address] [City] [State] [Country]
[Text of letter]
[Text of letter]
[Text of letter]
[Text of letter]

Yours faithfully,
[Signature]

VII A Survey of Opinion among Foreign Students concerning Japanese Graduate Education

Purpose

The purpose of this study was to examine how foreign students feel about Japanese graduate education and conditions of study, to analyze their consciousness and evaluation of the academic quality of Japanese universities, and the degree of "internationalization" of Japanese higher education in comparative perspective.*

The reasons why we have confined to the graduate (post bacculaureate) students rather than undergraduates are:

- (1) No previous research concentrating solely on graduate students has ever appeared in Japan, although various surveys on undergraduate students or the mix of both graduates and undergraduates, have been conducted.
- (2) For the purpose of the analysis of academic aspects in Japanese university in comparative perspective, graduate students who have much more academic life experience both in Japan and in their own countries than undergraduates seem to be more appropriate sample for this survey.

Method

Our research population was 1,145 full-time foreign graduate students enrolled in 9 national universities (913 people) and 5 private universities (232 people) in May 1979.* These 14 universities were selected because they have relatively large numbers of foreign graduate students. Our sample of 1,145 students is 54.1 percent of all of the foreign full-time graduate students (2,116) enrolled in all Japanese universities in 1979, thus providing a very good overview of this population.

* The sample institutions are as follows:

National Universities - - Tokyo, Tokyo Kogyo (Tokyo Institute of Technology), Tokyo Suisan, Tsukuba, Kyoto, Osaka, Kobe, Hiroshima, Kyushu Daigakus.

Private Universities - - Waseda, Keio, Meiji, Kokusai Kirisutokyo (International Christian University), Doshisha Daigakus.

The questionnaire was sent at the end of December 1979.

490 students out of 1,145 in the samples population responded to the questionnaire for a response rate 44.7% (408 students or 44.7 percent of the students at national universities, 71 students or 30.6 percent of the students at private universities responded.)

The questions consisted of: 1) Basic demographic data (age, sex, nationality, course and institution, scholarship and degree); 2) main reasons for coming to Japan for study abroad; 3) reasons and problems in choosing a specific graduate school, 4) entrance examination and ability of Japanese language; 5) decision concerning

the research topic; 6) the level of understanding classes; 7) difficulties in obtaining academic degrees; 8) evaluation and general comments on Japanese higher education.

Demographic Information

42.2% of all the respondents are the biggest age group of 26-30 years old, and 76.5% are in the age group 26-35 years old. Male students accounted for 81.6 percent of all the respondents. Our sample came from 61 countries, including the diversity of national origins of foreign students in Japan. The largest number of students come from Taiwan (152 people) followed by Republic of Korea (87 people). The size of the groups then decrease dramatically with around 20 students coming from Indonesia and from Thailand, 10-19 students coming from four countries including Brazil. The rest of the student sample was scattered.

More than 70 per cent of all the foreign graduate students come from Asia. Students from two Japanese neighbours, Taiwan and Korea, were once under Japanese colonialism and have had common Kanji letter culture accounted for 50 per cent of the Asia total respondents.

(See Table 1)

(Table 1)

National Origin of Foreign Graduate Students
(Total 490 sample) (%)

Taiwan and People's Republic of China Republic of Korea	160 (33.5%) 87 (18.2)	Kanji Letter Culture Countries 247 (51.7%)
Indonesia Thailand Philippines South Asia	29 (6.1) 19 (4.0) 10 (2.1) 52 (10.9)	South East and South Asia 110 (23.0)
Australia and New Zealand U. S. A. and Canada Western Europe Eastern Europe	7 (1.5) 17 (3.6) 23 (4.8) 11 (2.3)	Europe and North America 58 (12.1)
Middle East Africa Latin America	13 (2.7) 13 (2.7) 13 (2.7)	Others 63 (13.2)
N. A. and Unknown		12

56% of all the respondents are the married, and 72.3 per cent of them come to Japan with their family. As regards with the length of the period of stay in Japan, almost 40 per cent of them are staying for less than 2 years, and 80 per cent of all the respondents has stayed in Japan for less than 5 years.

85.2% (407 people) of the respondents are studying in the national universities, 14.2 percent (71 people) are enrolled at private universities. Students in the master's degree course consist of 42.0 per cent (206 people) with doctoral degree students accounting for 33.9 per cent (155 people), part-time research students for 22.2 per cent (109 people), and others 1.0 per cent (5 people).

The field of study which foreign graduate students choose varies. The largest number of students study engineering (26.7 per cent or 113 people), followed by social science (16.5 per cent or 81 people), humanities (14.1 per cent or 69 people), agriculture (13.9 per cent or 68 people), health sciences (medicine, dentistry, pharmacy) (11.8 per cent or 58 people), education (7.8 per cent or 38 people), natural science (6.3 per cent or 31 people), others (0.2 per cent or 1 person) (N. A. 2.7 per cent). Separating the natural sciences from the humanities and social sciences, a total of 62.5 per cent of students are in the natural science area. There is a tendency for students from the Asian developing countries to study such applied areas as engineering and the natural sciences, while students from the Western industrialized nations focus on the social sciences and Japanese studies.

Table 2 Students' Field of Study by National Origin

	Kanji Letter Cultural Countries	South East & South Asia	Europe and North America	Others	N. A.	Total
Humanities	33 (13.4)	8 (7.3)	20 (34.5)	7 (11.1)	1 (8.3)	69 (14.1)
Social Science	47 (19.0)	16 (14.5)	8 (13.8)	9 (14.3)	1 (8.3)	80 (16.5)
Natural Science	17 (6.9)	7 (6.4)	3 (5.2)	3 (4.8)	1 (8.3)	31 (6.3)
Engineering	63 (25.5)	33 (30.0)	12 (20.7)	22 (34.9)	1 (8.3)	131 (26.7)
Agriculture	34 (13.8)	17 (15.5)	7 (12.1)	10 (15.4)	0 (0.0)	68 (13.9)
Health	37 (15.0)	13 (11.8)	2 (3.4)	6 (9.5)	0 (0.0)	58 (11.8)
Education	15 (6.1)	13 (11.8)	5 (8.6)	4 (6.3)	1 (8.3)	38 (7.8)
N. A.	1 (0.4)	3 (2.7)	2 (3.4)	2 (3.2)	7 (58.3)	15 (3.1)
TOTAL	247 (50.4)	110 (22.4)	58 (11.8)	63 (12.9)	12 (2.4)	490

53.9 per cent of the foreign students obtained scholarship assistance from Japanese government. 60.4 per cent of these students enrolled at national universities, while only 15.5 per cent of students who study at private universities obtained Japanese government scholarships.

54.5 per cent of the respondents had obtained the bachelors degree before coming to Japan to study, while 26.7 per cent had a Master's degree and 2.7 per cent held a

doctorate. 47.0 per cent of students in doctoral programs had already obtained the master's degree prior to coming to Japan. The respondents varied in occupational status prior to coming to Japan, with 32.4 per cent holding positions as academics or researchers, 24.7 per cent were students, 10.6 per cent were company employees, 9.8 per cent were government officials, 5.5 per cent were school teachers, 3.1 per cent were without occupations and 10.0 per cent were in other jobs.

Choice of Japan for Study Abroad

The strongest reason for choosing Japan for study abroad is "academic or professional" (66.7%), followed by "interest in Japanese culture and society" (35.7%), "success in obtaining a scholarship" (35.7%). On the other hand, "geographical closeness" (18.0%), "difficulty of having appropriate graduate studies in home country" (17.0%), "high evaluation of studying in Japan in home country" (12.2%) seem to be less important reasons influencing students' decision. To the foreign students who obtained Japanese government scholarships, the major reason was "success in obtaining a scholarship". 64.5 per cent of all the students responded that Japan was the first choice as a foreign place to study. Fewer students in doctoral degree courses (50.6%) than master degree courses students (70.4%) reported that Japan was the first choice for them. Geographically speaking, while more than 80 percent of students from Latin America (91.9%), North America (88.2%), Oceania (85.7%), Europe (82.4%) said that Japan is the first choice, fewer students from developing countries, particularly only around 50 percent of students from Africa, Korea, South East-Asia said that Japan is the first choice place for them. (See Table 3)

Asian students (who comprise more than 70 per cent of the foreign students in Japan) in general chose the United States as their first choice as a place to study. 86.7 per cent of the Korean students chose the U. S. as their first choice, while 70.6 per cent of Southeast and South Asian students picked the United States. Only 10 per cent of the Asian students preferred Europe over the U. S.

The proportion of students who select Japan as first choice is high in the fields of humanities (85.5%) and social sciences (75.3%), while relatively low in the field of health (50.0%), natural sciences (51.6%), agriculture (58.8%), engineering (60.3%), and education (57.9%). Among these students, the majorities who select the U. S. A. as their first choice is especially high in the field of health (89.7%), education (81.3%), agriculture (78.6%), and engineering (74.5%). In the humanities and social sciences, a majority of students who did not select Japan as first choice, also choose the U.S.A., and about 31 per cent of them select Europe as first choice.

As to the extent of the satisfaction with the present graduate school, 73.9 per cent of all the respondents show a satisfaction. Only 4.7 percent of respondents express dissatisfaction. The degree of the satisfaction is slightly higher in students at national universities than those who attend private universities, and also higher among students who obtained governmental scholarship than students who get no

scholarship. (See Table 4)

Table 3 : Response to the question "Was Japan your first choice as a foreign place to study?"

(%)

		1. Yes	2. No	3. N. A.	If "No", then which country?		
Total		64.5	35.1	0.4	U. S. A	Europe	Asia
Course	Master	70.4	29.1	0.5	63.3	18.3	18.4
	Doctor	50.6	48.8	0.6	79.0	11.1	9.9
	Part Time Students	76.1	23.9	0.0	76.9	0.0	23.1
Region	Taiwan & China	68.8	31.3	0.0	84.6	9.6	5.8
	Korea	47.1	51.7	1.1	86.7	8.9	4.4
	South-East & South Asia	53.6	46.4	0.0	70.6	11.8	17.6
	Oceania	85.7	14.3	0.0	0.0	0.0	100.0
	North America	88.2	11.8	0.0	0.0	100.0	0.0
	Europe	82.4	17.6	0.0	16.7	33.3	50.0
	Middle East	76.9	23.1	0.0	33.3	0.0	66.7
	Latin America	91.9	8.1	0.0	66.7	33.3	0.0
	Africa	46.2	46.2	7.7	16.7	16.7	66.7
Field of Study	Humanities	85.5	13.0	1.4	55.6	33.3	11.1
	Social Science	75.3	24.7	0.0	50.0	35.0	15.0
	Natural Sciences	51.6	48.4	0.0	66.7	13.3	20.0
	Engineering	60.3	38.9	0.8	74.5	7.8	17.6
	Agriculture	58.8	41.2	0.0	78.6	10.7	10.7
	Health	50.0	50.0	0.0	89.7	0.0	10.3
	Education	57.9	42.1	0.0	81.3	6.3	12.5

Table 4 Extent of Satisfaction with the Present Graduate School (%)

	Total	Institution		Scholarship	
		National	Private	Students with Scholarship	Students without Scholarship
Very satisfied	20.6	21.1	15.5	23.1	17.5
Satisfied	53.3	53.6	56.3	54.2	52.4
Not so satisfied	17.1	15.5	25.4	14.4	20.3
Dissatisfied	4.7	4.9	2.8	5.3	3.8
Don't know	3.1	3.4	0.0	1.5	5.2
N. A.	1.2	1.5	0.0	1.5	0.9

Choice of University in Japan

Over half of the foreign students (57.3 per cent) had some knowledge concerning Japanese universities prior to coming to Japan. 90 per cent of the students at private universities had no information concerning their institutions, 45.9 per cent of the national university students were ignorant of Japanese institutions prior to studying in Japan. Taiwanese students were well-informed about Japanese higher education, with 98.1 per cent having some information, while nearly 10 per cent of students from Southeast Asia came to Japan without any knowledge about Japanese higher education.

The most important reason why students choose to come to Japanese universities are existence of "good professors in the major field" (38.0%), followed by "placement by the Ministry of Education" (38.3%) in the case of Government scholarship students. In spite of these facts, a great majority (85.1%) did not want to transfer to another graduate school. However, 10 per cent of the students want to transfer to other university, if possible.

Education in Graduate School

As to the level of ability in Japanese language, the proportion of students who described their ability "good" are 68.4 per cent in hearing, 66.9 per cent in reading, 64.5 per cent in speaking, and 50.1 per cent in writing. The level of ability is varied. For instance, the proportion of students from Korea and Taiwan, the Kanji letter cultural region, who described their ability "good", is very high and seems to have no language problem because they responded that 93.1 per cent in reading, 84.2 per cent in hearing, 73.7 per cent in speaking and 71.6 per cent in writing are good. In contrast, students from North America and Europe have some difficulties in the ability in Japanese because 67.3 per cent in speaking, 66.5 per cent in hearing, 46.5 per cent in reading, and 34.5 per cent in writing report that they are "good". Moreover, students from South-east & South Asia and other regions have even greater difficulties in the ability of Japanese.

Not surprisingly, there is a strong correlation between length of stay in Japan and linguistic ability. Those who have stayed in Japan for more than one year report a higher level of ability than those who have less experience in the country. Further, linguistic ability seems to improve greatly after one year.

Students reported that in general Japanese is the only language used in their university classes. 63.7 per cent said that only Japanese is used, while 33.5 per cent indicated that some English was used and only 0.2 per cent indicated that much English is used in class.

The level of understanding of lectures and classes differed among the students. Approximately 45 per cent of the students indicated that they could comprehend 80 per cent of their lectures, seminars and laboratory work. A smaller number indicated that they could understand 50-60 per cent of their academic work (34.3 in lectures,

38.1 per cent in seminars and 16.5 per cent in laboratory work). About 10 per cent of the students responded that their understanding of classes was very low. Students from South Asia had particular problems in this regard, as 26.3 per cent were deficient, while 19.1 per cent of students from the Middle East, Africa and Latin America indicated significant difficulties. If we notice the fact that only 4 per cent of students from the Kanji culture district (they reported) cannot understand even half of the classes, the major reason for the difficulty of understanding classes among these students seems to lie in their lack of ability in Japanese language. As a matter of fact, about 60 per cent of students said the lack of ability of Japanese language is the biggest reason. In contrast, the reasons why students who have good ability of Japanese feel classes difficult are "unsystematic teaching method" (18.6%), "insufficient training in basic subjects" (16.5%), "too high level of instruction" (11.3%), and "irrelevance of teaching contents" (6.2%).

To the question: "how often do you meet your supervising professor to discuss your study?", 28.8 per cent of students meet less than 10 times a year, followed by 18.2 per cent of students meet 11-20 times, 14.7 per cent meet 41-100 times, 14.1 per cent meet 21-40 times a year. During a one year period in Japan, 0.8 per cent of students reported that they have never met their supervising professors. 68.0 per cent of students reported that they are given sufficient advice and supervision in their graduate study and 18.9 per cent of students report that they were given insufficient advice and supervision. In terms of the degree of satisfaction with instruction given, students from Asia feel more satisfactory than American and European students, who are rather critical because 31 per cent of them said insufficient advice is given.

Table 5 Reasons why classes are difficult to understand

Personal reasons	Lack of understanding of Japanese language	59.6%
	Insufficient training in basic subjects	8.4
	Sub-total	68.0
Contents and methods of classes	Too high level of instruction	8.0
	Irrelevance of teaching contents	2.9
	Unsystematic teaching method	9.0
	Sub-total	19.9
	N. A.	12.2

Table 6 Satisfaction with instruction

	Total	Field of Study									Region			
		Non-natural				Natural Sciences					Taiwan Korea	South- east & South Asia	Europe and North America	others
		Humani- ties	Social sciences	Educa- tion	Non- Natural Sciences	Pure Science	Engine- ering	Agri- culture	Health	Natural Sciences				
1. Yes	68.0	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
2. No	18.9	23.2	18.5	13.2	19.1	29.0	11.5	22.1	15.5	16.6	15.0	15.5	31.0	20.6
3. D. K.	9.8	4.3	9.9	13.2	8.5	3.2	11.5	10.3	12.1	10.4	7.7	12.7	5.2	17.5

Academic Degrees

Not surprisingly, much emphasis was given to the goal of obtaining academic degrees. 57.5 per cent of our sample indicated that earning an academic degree in Japan was necessary, with students at the Master's level placing even more stress on earning a degree (79.1 per cent). The need to obtain degrees was stressed most strongly by students from Asia and Africa, while students from industrialized nations do not place as much emphasis on their degrees. Doctoral students placed particularly heavy stress on obtaining their degrees, with 91.6 per cent indicating that it is necessary. Again, students from developing countries were particularly concerned about earning their degrees.

Student attitudes concerning the difficulty of completing academic degrees in Japan differed, with 53.3 per cent of the students at the Master's level indicating that the work was not too difficult and only 16.3 per cent found it very difficult to obtain degrees. In contrast, 69.9 per cent of the doctoral students said that obtaining academic degrees is too difficult. There are also variations according to academic disciplines, with 70 per cent of students in social science, humanities and education complaining about the difficulty of obtaining Japanese degrees, while 50 per cent have similar complaints in the natural sciences.

The prestige of foreign degrees varies, with American academic degrees in general most highly valued. 66.3 per cent indicated that American degrees are "very prestigious" and 23.5 per cent indicating 'rather prestigious.' In contrast 48.6 per cent of our student sample claimed that European degrees are highly prestigious and 39.4 per cent claimed they are 'rather prestigious.' Japanese academic degrees were less highly valued, with 21.2 per cent indicating highly prestigious and 50.6 per cent rather prestigious. The students were critical of the academic degrees of their home countries, and 17.6 per cent said that they are "very prestigious", 42.0 per cent said "rather prestigious", and 28.6 per cent said "not so prestigious".

**Table 7 Evaluation of Japanese Academic Degrees
at Foreign Students' Home Countries**

1 Very prestigious 2 Rather prestigious
3 Not so prestigious 4 Don't know

Response Degrees		Total	Region								
			Taiwan & China	Korea	South-east & South Asia	Oceania	North America	Europe	Middle East	Latin America	Africa
Japanese Degrees	1	21.2	18.8	28.7	21.8	0.0	5.9	11.8	23.1	23.1	32.4
	2	50.6	66.3	59.8	44.5	0.0	23.5	23.5	53.8	23.1	40.5
	3	13.7	10.0	6.9	18.2	42.9	29.4	23.5	0.0	23.1	10.8
	4	14.5	5.0	4.5	15.5	57.1	41.2	41.2	23.1	30.8	16.2
European Degrees	1	48.6	43.1	54.0	57.3	28.6	29.4	26.5	46.2	61.5	64.9
	2	39.4	43.8	33.3	35.5	57.1	52.9	58.8	46.2	30.8	29.7
	3	3.1	1.9	5.7	0.0	0.0	5.9	8.8	7.7	0.0	2.7
	4	9.0	11.2	6.9	7.3	14.3	11.8	5.9	0.0	7.7	2.7
American Degrees	1	66.3	63.1	73.6	80.9	0.0	52.9	32.4	61.5	53.8	83.8
	2	23.5	28.1	17.2	13.6	71.4	29.4	44.1	30.8	38.5	13.5
	3	3.3	2.5	4.6	0.0	14.3	0.0	17.6	7.7	0.0	0.0
	4	7.0	6.2	4.6	5.5	14.3	17.7	5.9	0.0	7.7	2.7
Degrees in Students' Home Countries	1	17.6	12.5	8.0	20.0	14.3	41.2	38.2	30.8	23.1	16.2
	2	42.0	51.9	44.8	30.9	71.4	29.4	38.2	30.8	53.8	37.8
	3	28.6	27.5	42.5	29.1	0.0	5.9	20.6	30.8	7.7	32.4
	4	11.8	8.1	4.5	20.0	14.3	23.5	2.9	7.7	15.4	13.5

Table 8 Advantages of a Japanese Degree

	Total	Region								
		Taiwan & China	Korea	Oceania	South-east & South Asia	North America	Europe	Middle East	Latin America	Africa
	%									
Very advantageous	21.6	16.3	34.5	20.9	0.0	5.9	8.8	15.4	30.8	37.8
Advantageous	49.2	58.8	54.0	44.5	28.6	23.5	44.1	38.5	23.1	43.2
Not so advantageous	18.8	18.1	8.0	20.0	42.9	35.3	38.2	7.7	23.1	13.5
Don't know	10.4	6.9	3.4	14.5	28.6	35.3	8.8	38.5	23.1	5.4

With respect to the extent of a Japanese degree's advantage for employment, status or salary-increase in students' home countries, 21.6 per cent responded "very advantageous" and 49.2 per cent said "rather advantageous", while only 11.8 per cent responded "not so advantageous". Geographical diversity is evident. The regions where a Japanese degree is thought to be advantageous are Korea, Latin America,

Taiwan, and South-east & South Asia, while areas where Japanese degrees are not so advantageous are Australia, New Zealand, and North America.

To the question: "Do you think that there is any problem to be solved in foreign students' obtaining an academic degree in Japan?", 45.3 per cent of all students responded "Yes", while 14.9 per cent said "No". In this area, serious problems seem to be felt by students especially in the field of humanities, social sciences and education. According to foreign students' comments, improvement in the following four points has been proposed:

- 1) Doctors' degrees should be made more easily obtainable, especially in the field of humanities and social sciences, because Japanese doctoral degree is extremely difficult to obtain in these fields.
- 2) The traditional concept of "doctors' degree" which is conferred only on an outstanding academic achievement should be changed to more course work-oriented system like American Ph. D.
- 3) The procedures and standards for obtaining doctoral degrees in Japan are unclear and should be clarified so that they are understandable to foreign students.
- 4) Improvement in instruction and guidance for obtaining doctor's degree should be made.

The Evaluation of Japanese Higher Education

63.5 per cent of all of the students indicate that "in general, Japanese universities have reached international academic standards". Only 13.7 per cent did not agree with the statement. Students in the natural sciences are more favorable than those in the humanities and social sciences. Students from Asian countries tend to be more favorable to Japanese academic degrees than those from North America and Oceania.

Table 9 Responses to the statement: "In general, Japanese universities have reached to the international academic standards."

(%)

Response	Total	Field of Study						
		Humanities	Social sciences	Pure Science	Engineering	Agriculture	Health	Education
1) YES	63.5%	47.8	53.1	74.2	72.5	60.3	79.3	52.6
2) NO	13.7	23.2	22.2	9.7	6.9	13.2	5.2	18.4
3) D. K.	22.8	29.0	24.7	16.1	20.6	26.5	15.5	28.9

To the statement that "Japanese universities are paying enough attention to the problems in developing countries", only 18.4 per cent of the respondents said "yes", while more than half (51.2%) responded negative answer. The similar trend was also seen both in the field of study and national origins. It seems that Japanese universities are considered aloof from the problems of developing countries.

Unexpectedly, a majority (56.5%) did not agree with the proposal that "Japanese universities should provide foreign students with classes taught in English". Only 27.6 per cent supported the idea. However, more than 50 per cent of students from South-east and South Asia want to have classes in English.

To the statement that "Japanese professors are generous (not strict) to foreign students in terms of evaluation", the responses are diversified: "generous" (31.4%), "strict" (34.1%), and "don't know" (33.5%). Only 18.4 per cent of all the respondents agreed with statement: "In general, Japanese professors are indifferent to foreign students", while 64.3 per cent did not agree. Concerning attitude of Japanese students, nearly 70 per cent (69.8%) of all the foreign students agreed with the statement: "Japanese students at my graduate study are cooperative in my study". Only 18.4 per cent responded with a negative answer.

Finally, as to the evaluation of study abroad in Japanese university, 90.2 per cent of all the respondents answered "very helpful" or "helpful" to the question: "Do you think what you have studies at the Japanese graduate school will be helpful after returning to your home country?"

General Comments of Foreign Students

At the end of the questionnaire, we asked for general comments or proposals concerning on higher education, faculty members, administration and students in Japanese universities on the basis of their experiences as a student. 62 per cent (303 people) of all the respondents wrote their very frank comments. The languages used by them were English (126 people), Japanese (110 people), Chinese (34 people), Korean (21 people), Spanish (11 people), and French (1 person). The content of these comments are varied, but could be classified as following:

- (I) The problems in the preparation and receiving foreign students (the attitudes of Japanese society and people toward foreign students; cultural and educational exchange programs in Japan; the possibility of internationalization of higher education; the existence of racial discrimination in Japanese society; Japanese attitude to international relationship; and so on).
- (II) The lack of information and knowledge of studying in Japanese universities.
- (III) Problems of Japanese languages and Japanese language programs.
- (IV) Japanese higher education (including school system, methods of teaching, facilities, students, teachers, academic degrees, and so on)
- (V) Proposals for policies concerning foreign students (policy for foreign students; improvements in institutional systems; living and learning expenses; the way of the

allocation of foreign students to the institutions by the Ministry of Education; housing problems, and so on).

大学研究ノート・バックナンバー

- 第 1 号 (1971. 8) サセックス大学のカリキュラム：自然科学ハンドブック 1966-67 より
…… 大学問題調査室〔編訳〕
- 第 2 号 (1971. 9) ドイツの大学における Institute 数及び教授数に関する集計
…… 近 藤 春 生
- 第 3 号 (1971. 10) 高等教育に関する主要外国雑誌目録 …………… 岩 村 聡〔編〕
- 第 4 号 (1972. 7) 欧米の医学カリキュラム …………… 杉 原 芳 夫〔編訳〕
- 第 5 号 (1972. 8) アメリカ合衆国の主要大学に関する基本資料
…… 関 正 夫・川 上 昭 吾〔編訳〕
- 第 6 号 (1973. 2) サセックス大学のカリキュラム：人文・社会系ハンドブック 1966-67 より
…… 大学教育研究センター〔編訳〕
- 第 7 号 (1973. 3) 諸大学学寮規程・規則集(1) …………… 大学教育研究センター〔編訳〕
- 第 8 号 (1973. 8) ドイツ大学改革と学生生活の現況 マールブルク大学を中心として
…… 千代田 寛・阪 口 修 平
- 第 9 号 (1973. 9) 広島大学医学部紛争における医局・講座，大学院および学位制度問題資料
…… 杉 原 芳 夫〔編〕
- 第 10 号 (1974. 1) 理学部生物学科の調査－カリキュラムを中心に… 川 上 昭 吾
- 第 11 号 (1974. 2) 大学院・研究体制に関する文献目録 …………… 喜多村 和 之〔編〕
- 第 12 号 (1974. 2) 大学院・学位に関する規程集 …………… 喜多村 和 之〔編〕
- 第 13 号 (1974. 3) アメリカ工業教育協会報告書：工学系学生のための教養教育
…… 関 正 夫〔編訳〕
- 第 14 号 (1974. 3) 諸大学学寮規程・規則集(2) …………… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 15 号 (1974. 6) 農学系大学・学部新入学生の入学動機と農業に関する意識の調査・研究
農業高校生の進路選択と農業に関する意識の調査研究
－普通高校生との比較－ …………… 山 谷 洋 二
- 第 16 号 (1974. 9) カリフォルニア大学の農学系カリキュラム …………… 山 谷 洋 二〔編訳〕
- 第 17 号 (1975. 1) ヨーロッパの学生宿舎を見て …………… 横 尾 壮 英
- 第 18 号 (1975. 2) 学寮の管理運営の法的検討 …… 畑 博 行・村 上 武 則
- 第 19 号 (1975. 3) 大学院・学位制度に関する資料集 …………… 寺 崎 昌 男〔編〕
- 第 20 号 (1975. 10) 大学の大衆化をめぐる－第 3 回 (1974 年度) 研究員集会の記録－
…… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 21 号 (1976. 1) 大学英語教育に関するアンケート調査－広島大学における学生の意見－
五十嵐 二 郎・稲 田 勝 彦・岩 村 聡
藤 本 黎 時・湯 浅 信 之
- 第 22 号 (1976. 3) 西ドイツ高等教育改革の青写真 …………… 天 野 正 治
- 第 23 号 (1976. 3) 宮城教育大学の教育改革－視察報告－ …… 教師教育プロジェクト〔編〕
- 第 24 号 (1976. 8) 広島大学学生の宿舎と生活－アンケート調査から
黒 川 正 流・上 里 一 郎・岩 村 聡
- 第 25 号 (1976. 9) 高学歴社会－その現実と将来－－第 4 回 (1975 年度) 研究員集会の記録－
…… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 26 号 (1976. 11) 大学の組織・運営に関する総合的研究 …… 組織・運営プロジェクト〔編〕
- 第 27 号 (1977. 1) 教師教育カリキュラムに関する研究 …… 教師教育プロジェクト〔編〕
- 第 28 号 (1977. 2) 農学系大学・学部新入学生の入学動機と農業に関する意識の調査・研究
－その 2 東日本の場合－ …………… 山 谷 洋 二
- 第 29 号 (1977. 3) 理学系学生に対する教養課程における自然科学教育に関する調査・研究
－広島大学一般教育課程における物理学教育に関するアンケートから－

- …………… 理科系教育研究プロジェクト(物理グループ)
- 第 30 号 (1977. 6) 日本のアカデミック・プロフェッション
 - 帝国大学における教授集団の形成と講座制 - 天 野 郁 夫
- 第 31 号 (1977. 9) 大学における専門教育 - 第 5 回 (1976 年度) 研究員集会の記録 -
 …………… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 32 号 (1978. 8) 大学の国際化 - 第 6 回 (1977 年度) 「研究員集会」の記録 -
 …………… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 33 号 (1978.10) 諸外国の大学における国際交流 - とくにアメリカ合衆国を中心として -
 …… 喜多村 和 之・天 野 郁 夫・湯 浅 信 之
- 第 34 号 (1978.11) 教養課程における理科系学生に対する自然科学教育の現状と課題(I)
 - 広島大学の事例を中心として -
 …………… 高等科学技術教育研究プロジェクト
- 第 35 号 (1978.11) 教養課程における理科系学生に対する自然科学教育の現状と課題(II)
 - 理科系専門教育の立場から -
 …………… 高等科学技術教育研究プロジェクト
- 第 36 号 (1979. 2) 広島大学医学部と地域社会 …………… 大学と地域社会プロジェクト
- 第 37 号 (1979. 5) 諸外国における一般教育および科学技術教育改革の動向
 …………… 高等科学技術教育研究プロジェクト
- 第 38 号 (1979. 7) 高等専門学校の現状と課題 …………… 葉 柳 正
- 第 39 号 (1979.10) 地域社会と大学 - 第 7 回 (1978 年度) 研究員集会の記録 -
 …………… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 40 号 (1979.11) 大学と地域社会の相互連関に関する調査研究(I)
 - 広島大学教員実態調査 - …… 大学と地域社会プロジェクト(池田秀男)
- 第 41 号 (1979.12) 大学の国際交流に関する文献目録…「大学の国際化」プロジェクト〔編〕
- 第 42 号 (1979.12) 大学と地域社会の相互連関に関する調査研究(II)
 - 地域住民の大学観 - …… 大学と地域社会プロジェクト(吉森 護)
- 第 43 号 (1980. 1) 日本の大学における外国人教員 - 全国調査結果の概要 -
 …………… 「大学の国際化」プロジェクト〔編〕
- 第 44 号 (1980. 7) 大学と地域社会の相互連関に関する調査研究(III)
 - 広島大学と地域社会 - …… 大学と地域社会プロジェクト(黒川正流)
- 第 45 号 (1980. 7) 大学農学教育に関する文献目録 …………… 山 谷 洋 二〔編〕
- 第 46 号 (1980. 9) 理科系学生に対する一般教育の現状と課題
 …………… 高等科学技術教育研究プロジェクト
- 第 47 号 (1980.11) 諸外国の大学における外国人教授の任用
 - 制度と実態 - …………… 喜多村 和 之
- 第 48 号 (1981. 7) 大学医学教育に関する文献目録 …………… 川 崎 尚〔編〕
- 第 49 号 (1981. 8) 科学社会学の研究 …………… 新 堀 通 也〔編〕
- 第 50 号 (1981.10) 大学における教育機能(Teaching)を考える - 第 9 回 (1980 年度)
 研究員集会の記録 - …………… 大学教育研究センター〔編〕
- 第 51 号 (1982. 1) 19 世紀における科学の制度化と大学改革 …………… 成 定 薫〔編訳〕

大学研究ノート 通巻 52 号 1982 年 2 月発行

発 行 広島大学 大学教育研究センター

印 刷 (有) 高 橋 膳 写 堂

広島市中区東千田町 1 丁目 1 - 8 9
 TEL (082) 241 - 1221 (内線 706)
 広島市中区千田町 3 丁目 2 - 2 9
 TEL (082) 244 - 1110 (代)

A SURVEY OF OPINION AMONG FOREIGN STUDENTS CONCERNING JAPANESE GRADUATE EDUCATION

CONTENTS

preface

I.	Purpose and Method	1
1.	Purpose	1
2.	Method	2
3.	Demographic Information	3
4.	Way of Analysis	6
II.	Research Findings	9
1.	Choice of Japan for Study Abroad	9
2.	Choice of University in Japan	11
3.	Entrance Examination to Graduate Schools	13
4.	Education and Guidance in Graduate Schools	14
5.	Academic Degrees	25
6.	The Evaluation of Japanese Higher Education	29
7.	The Evaluation of Study Abroad in Japan	31
III.	Relationship between Understanding of Class and Satisfaction of Graduate Schools	33
IV.	General Comments of Foreign Students	39
V.	Summary and Conclusion	83
VI.	Appendix: Questionnaire of the Survey	93
VII.	English Summary	113

A Survey of Opinion among Foreign Students
Concerning Japanese Graduate Education

R.I.H.E. Joint Research Project on the
Internationalization of Higher Education

RESEARCH INSTITUTE FOR HIGHER EDUCATION
HIROSHIMA UNIVERSITY Hiroshima, Japan